

三日市 A 遺跡 5

2012

石川県野々市市教育委員会

三日市 A 遺跡 5

2012

石川県野々市市教育委員会

例 言

- 1 本書は、三日市A遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県野々市市三日市町地内である。
- 3 調査原因は、野々市市北西部土地区画整理事業にともなうものである。
- 4 調査は、野々市市北西部土地区画整理組合からの依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。
- 5 調査にかかる費用は、野々市市北西部土地区画整理組合が負担した。
- 6 現地調査の年度・期間・面積・担当者は以下のとおりである。

平成13年度	第4次
期 間	平成14年2月8日～平成14年3月26日
面 積	830 m ²
担当者	横山貴広 野々市町教育委員会文化課 主査
平成15年度	第9次
期 間	平成15年4月18日～平成15年7月7日
面 積	2,770 m ²
担当者	横山貴広 立原秀明 野々市町教育委員会文化課 主査
平成16年度	第16次
期 間	平成16年4月12日～平成16年7月16日
面 積	1,387 m ²
担当者	田村昌宏 野々市町教育委員会文化振興課 主査
平成17年度	第21次
期 間	平成17年10月18日～平成18年3月29日
面 積	570 m ²
担当者	田村昌宏
平成17年度	第22次
期 間	平成18年1月20日～平成18年2月23日
面 積	822 m ²
担当者	横山貴広 野々市町教育委員会文化振興課 専門員
平成19年度	第30次
期 間	平成19年5月7日～平成19年6月29日
面 積	1,795 m ²
担当者	田村昌宏
平成19年度	第33次
期 間	平成19年10月23日～平成19年11月27日
面 積	1,642 m ²
担当者	横山貴広
- 7 出土品整理は平成17年度～平成23年度に野々市市教育委員会が実施した。
- 8 報告書の刊行は平成23年度に野々市市教育委員会文化振興課が実施した。担当分担は以下のとおりである。

第1章	第2章	第5章	第6章	第8章	田村昌宏
第3章	第4章	第7章			横山貴広
- 9 遺物写真撮影及び編集は、菊地山里子（臨時職員）が実施した。
- 10 現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでに、野々市市北西部土地区画整理組合、柿田祐司、向井裕知の協力を得た。（敬称略）
- 11 本書についての凡例は以下のとおりである。
 - (1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅷ系に準拠している。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
 - (4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
 - (5) 土層図の注記は、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人 日本色彩研究所監修「新版標準土色帖」に拠った。
 - (6) 遺構名称の略号は以下のとおりである。

横列：S A	掘立柱建物：S B	竪穴建物：S I	土坑：S K	溝：S D
小穴：P	性格不明遺構：S X			
- 12 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。
- 13 例言、本文中に記載されている野々市町の名称は、2011年11月11日の市制施行に伴い、現在は野々市市となっている。

目 次

第1章 調査の経緯 …… 1	第3節 遺物 …… 15	第7章 第22・33次調査 …… 56
第2章 遺跡の位置と環境 …… 3	第4節 小結 …… 15	第1節 調査の経過 …… 56
第1節 地理的環境 …… 3	第5章 第16次調査 …… 37	第2節 遺構 …… 57
第2節 歴史的環境 …… 3	第1節 調査の経過 …… 37	第3節 遺物 …… 56
第3節 基本層序 …… 6	第2節 遺構 …… 38	第4節 小結 …… 57
第3章 第4次調査 …… 7	第3節 遺物 …… 45	第8章 第30次調査 …… 68
第1節 調査の経過 …… 7	第4節 小結 …… 45	第1節 調査の経過 …… 68
第2節 遺構 …… 7	第6章 第21次調査 …… 49	第2節 層序 …… 72
第3節 小結 …… 7	第1節 調査の経過 …… 49	第3節 遺構 …… 73
第4章 第9次調査 …… 15	第2節 遺構 …… 50	第4節 遺物 …… 85
第1節 調査の経過 …… 15	第3節 遺物 …… 54	第5節 小結 …… 94
第2節 遺構 …… 15	第4節 小結 …… 55	

挿 図 目 次

第1図 北西部上地区面整理事業地区遺跡位置図 …… 1	第42図 工事計画図 …… 49
第2図 調査区位置図 …… 2	第43図 調査区全体図 …… 49
第3図 野々市市位置図 …… 3	第44図 SK1土層断面図 …… 51
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 5	トレンチ1～7、11遺構平面図 …… 51
第5図 土層断面模式図 …… 6	トレンチ8、9遺構平面図 …… 52
第6図 調査区遺構図1 …… 8	トレンチ9道路状遺構土層断面図 …… 52
第7図 調査区遺構図2 …… 9	トレンチ10遺構平面図 …… 53
第8図 調査区遺構図3 …… 10	トレンチ10道路状遺構土層断面図 …… 53
第9図 調査区遺構図4 …… 11	土器・陶磁器実測図 …… 54
第10図 調査区遺構図5 …… 12	遺構全体図 …… 58
第11図 調査区遺構図6 …… 13	SI1遺構図・土層断面図 …… 59
第12図 調査区遺構図7 …… 14	SI2、SI3遺構図・土層断面図 …… 60
第13図 SB1遺構図・断面図 …… 16	SK、SI、P遺構図・土層断面図 …… 61
第14図 SB2遺構図・断面図 …… 17	SD、近代河道、鉄滓群土層断面図 …… 62
第15図 SB3遺構図・土層断面図 …… 18	SX遺構図・土層断面図 …… 63
第16図 SB4遺構図・土層断面図 …… 19	22次、33次土器・石製品実測図 …… 64
第17図 SB5遺構図・土層断面図 …… 20	33次土器実測図1 …… 65
第18図 SB6遺構図・土層断面図 …… 21	33次土器実測図2 …… 66
第19図 SB7遺構図・土層断面図 …… 22	工事計画図 …… 69
第20図 SB8遺構図・土層断面図 …… 23	調査区全体図 …… 69
第21図 SB8土層断面図 …… 24	I区遺構全体図 …… 70
第22図 SB9遺構図・断面図 …… 25	II区遺構全体図 …… 71
第23図 SB10遺構図・土層断面図 …… 26	III区遺構全体図 …… 72
第24図 SB11遺構図・断面図 …… 27	基本土層図 …… 72
第25図 SD2～7土層断面図 …… 28	SI1遺構図・土層断面図 …… 77
第26図 主要遺構模式図 …… 29	SI2、SI3遺構図・土層断面図 …… 78
第27図 土器・石製品実測図1 …… 31	SI4遺構図・土層断面図 …… 79
第28図 土器実測図1 …… 32	SI4、SK遺構図・土層断面図 …… 80
第29図 土器実測図2 …… 33	SK遺構図・土層断面図1 …… 81
第30図 土器実測図3 …… 34	SK遺構図・土層断面図2 …… 82
第31図 調査区グリッド図 …… 37	SK遺構図・土層断面図3 …… 83
第32図 I、II区遺構平面図 …… 39	SK、SD遺構図・土層断面図 …… 84
第33図 III、IV区遺構平面図 …… 40	土器実測図1 …… 86
第34図 V区遺構平面図 …… 41	土器実測図2 …… 87
第35図 SB1遺構図・土層断面図 …… 41	土器・陶磁器実測図 …… 88
第36図 SK1遺構図・土層断面図 …… 41	土器・陶磁器・石製品実測図 …… 89
第37図 SD1、SX1遺構図・土層断面図 …… 42	石製品実測図1 …… 90
第38図 SD2、SD3、SD4遺構図・土層断面図 …… 43	石製品実測図2 …… 91
第39図 自然河道平面図・土層断面図 …… 44	鉄製品実測図 …… 92
第40図 土器・陶磁器・石製品実測図 …… 46	第80図 鉄製品実測図 …… 93
第41図 石製品実測図 …… 47	

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表 …… 6	第6表 土器・陶磁器観察表 …… 54
第2表 遺構観察表 …… 30	第7表 土器観察表 …… 67
第3表 遺物観察表1 …… 35	第8表 土器観察表1 …… 96
遺物観察表2 …… 36	土器観察表2 …… 97
第4表 土器・陶磁器観察表 …… 48	第9表 石製品観察表 …… 98
第5表 土器・石製品観察表 …… 48	第10表 鉄製品・銅銭観察表 …… 98

図 版 目 次

写真図版1、2 (第4次) …… 99、100	写真図版9～11 (第21次) …… 107～109
写真図版3～6 (第9次) …… 101～104	写真図版12～15 (第22、33次) …… 110～113
写真図版7、8 (第16次) …… 105、106	写真図版16～22 (第30次) …… 114～120

第1章 調査の経緯

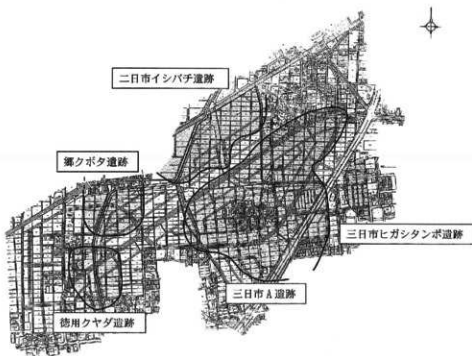
本書収録の三日市A遺跡が所在する野々市市西北部地域は、整然とした水田が広がる農業振興地域であった。しかし、近年における周辺地域の都市化に伴い、本地域も住生活環境の変化が必要となり宅地化の促進が図られることになった。そこで、平成11年に野々市町西北部土地区画整理事業が施行されることになった。

西北部土地区画整理施行区域65.4ha内には、埋蔵文化財の存在する可能性があり、詳細な確認調査を行う必要が生じた。そこで、平成11年8月25日付で野々市町産業建設部長から野々市町教育委員会教育長宛に土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財の分布調査についての依頼が出され、同年8月31日付で同区域での分布調査を行う旨の回答をした。これに基づき、西北部土地区画整理施行区域内に試掘坑352箇所を設定し、宅地化など掘削作業できない箇所を除いた337箇所を、同年9月27日～10月19日にかけて試掘調査を実施した。その結果、以前より存在が確認されていた二日市イシバチ遺跡の南側の範囲が確定したほか、新たに三日市ヒガシタンボ遺跡、三日市A遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡を発見した。

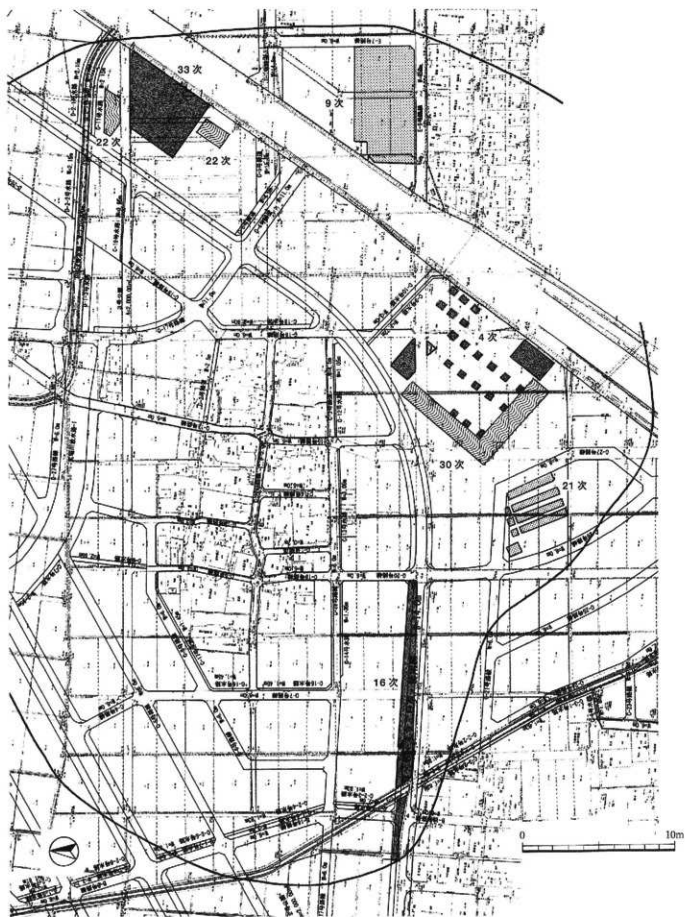
この結果から、野々市町西北部土地区画整理組合、野々市町都市計画課、野々市町教育委員会と協議を重ね、埋蔵文化財包蔵地のうち、道路等恒久化する工事箇所と、民有地内で十分な遺跡の保護層が確保できない箇所については、発掘調査を行うことで合意した。平成12年4月13日付で、野々市町と野々市町西北部土地区画整理組合との間で野々市町西北部土地区画整理事業地区内埋蔵文化財に関する協定書が交わされた。

西北部土地区画整理組合から文化庁長官宛に提出される二日市イシバチ遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡、三日市A遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡に関する文化財保護法第57条の3に基づく届出は、平成12年3月29日付で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会教育長宛に到達した。これを受けて、同年3月30日付で石川県教育委員会教育長から野々市町教育委員会教育長宛に埋蔵文化財発掘調査の届出に関する通知がなされた。

以上の手続きを終えて、平成13年度より上記5遺跡の発掘調査が開始された。



第1図 西北部土地区画整理事業地区遺跡位置図



第2図 調査区位置図 (S=1/2500)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市の大きさは南北約6.7km、東西4.5kmで、県内で最も面積の小さい自治体である。市域は霊峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部にあたり、扇尖部と扇端部の狭間に位置する。本市で最も高い標高地は50m、最も低い地点は10mで、なだらかな緩斜面となる地勢をみせている。

現在の野々市市は平坦な地形が広がっているが、従前は手取川から派生する多くの小河川によって形成された微高地と微低地が混在する地形であった。野々市で人々の生活が認められるのは縄文時代後期前半からで、集落の拠点は標高の高い微高地であった。この時代は扇状地の大部分が未開の原野で、ススキや低木が生い茂る荒地であったようである。これが稲作の伝わる弥生時代から石川平野の中で水田耕作が営まれるようになり、土地の開墾が始まっていった。古代以降、農具の発達などにより凸凹の多い土地は次々と開発されていき、未開発地は耕作地として生まれ変わっていった。明治時代以降は、田区改正による耕地整理が各地で急速に広がり、市内全域は起伏のない平坦な地形へと移り変わり、水田区画は甚だ日のように整然となった。このように、大きく広がった田園風景は昭和30年代ころまで見られた。

しかし、昭和40年代の高度経済成長期以降は、県庁所在地金沢市の隣接地という地理的条件から、住宅地や商業施設の建設などが著しくなり、急速に水田風景は失われていった。特に、北部の御経塚地区や南部の三納・栗田・新庄地区は区画整理事業が進み、新興住宅地として生まれ変わっていった。今回、発掘調査箇所となる市域北西部地区も区画整理事業の一貫として行われており、周辺地は大きな変貌を遂げてきている。また、市内の東部には金沢工業大学、南部には石川県立大学といった教育機関が置かれ、若者が多く集う学園都市としての性格も持ち合わせている。



第3図 野々市市位置図

今回の発掘調査地である三日市A遺跡は、標高約15mで、手取川から派生する小河川によって形成された微高地上に立地する。ただし、市域上流部と比較して、大きな川原石の堆積は少なく、微低地との高低差も大差ないことから、当時の生活拠点の場としては、非常に適した地であったと思われる。

第2節 歴史的環境

三日市A遺跡周辺の遺跡を中心として、時代別に概観する。

縄文時代

本遺跡より北東方約1km離れたところには国指定史跡となっている6御経塚遺跡が存在する。御経塚遺跡は、縄文時代後期中葉～弥生時代初頭にかけて営まれた地域における拠点集落である。当遺跡で発見された御経塚式土器は縄文時代晩期前半の基準資料となる。御経塚遺跡の近隣には、縄文時代後期後半～晩期後半の1チカモリ遺跡や縄文時代後期後半～晩期後半の2中屋サワ遺跡といった集落遺跡が点在し、御経塚遺跡の拠点集落を中心に展開した出村的な集落であったようである。これらの遺跡が存在する地点は標高6～10mに立地し、扇状地を伏流する地下水の湧水域であった。また、当時の生活に必要な落葉広葉樹と照葉樹が混在する豊かな林野が大きく広がっていた場所でもあったことから、この地帯は当時の人々にとって生活環境に最適な場であったようである。

本遺跡より南東約2kmのところには、縄文時代晩期の17長竹遺跡がある。長竹遺跡は縄文時代後半の基準資料となる土器が出土した遺跡で、水田稲作農耕が西日本に波及した極めて重要な時期である。なお、三日市A遺跡及び御経塚遺跡からは、当該時期の稲柄の圧痕のついた土器が出土している。

弥生時代

手取川扇状地一帯における弥生時代の遺跡分布を見ると、前期～中期にかけては極めて少なく、後期に数多く存在する。御経塚遺跡（ツカダ地区）、15 乾遺跡からは、柴山出村式と呼ばれる弥生時代前期の土器が確認されているが、この時期は弥生文化の波及が十分ではなく、まだ縄文文化の影響が強く残っていたようである。

弥生時代後期になると、鉄器の普及などを要因とする生産力の向上から人口が増え、それに伴い、手取川扇状地一帯にも集落が展開するようになる。本遺跡をはじめ、周辺にある 5 御経塚シンデン遺跡、御経塚遺跡、7 長池ニシタンボ遺跡、9 二日市イシバチ遺跡、10 郷クボタ遺跡、13 三日市ヒガシタンボ遺跡、14 徳丸ジョウジャダ遺跡などからは、竪穴建物や掘立柱建物などで構成される集落跡が見つまっている。これは、農耕社会が急速に広がったことから、安定した農耕地の確保が必要となったため、広範にわたってムラが形成していったと考えられる。

古墳時代

古墳時代前半については、本遺跡に隣接する二日市イシバチ遺跡で、弥生時代後期からの流れを汲む集落跡を確認することができるが、扇状地上での集落数は激減し、一旦取東傾向となる。ただし、本遺跡より北方 1 km にある御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群では、弥生集落廃絶後に 15 基の前方後方墳、方墳からなる大古墳群を造立している。また、二日市イシバチ遺跡でも一辺約 18 m の規模を中心とした大小の方墳 7 基を確認しており、各地域を治める首長層の存在を伺い知ることができる。

古墳時代後半になると、本遺跡から南方約 4 km の市上流域の扇状地扇状部で末松古墳や上林古墳など後期古墳が築かれるようになる。これは河川上流域における開発が広がり始めていったことを意味する。

古代

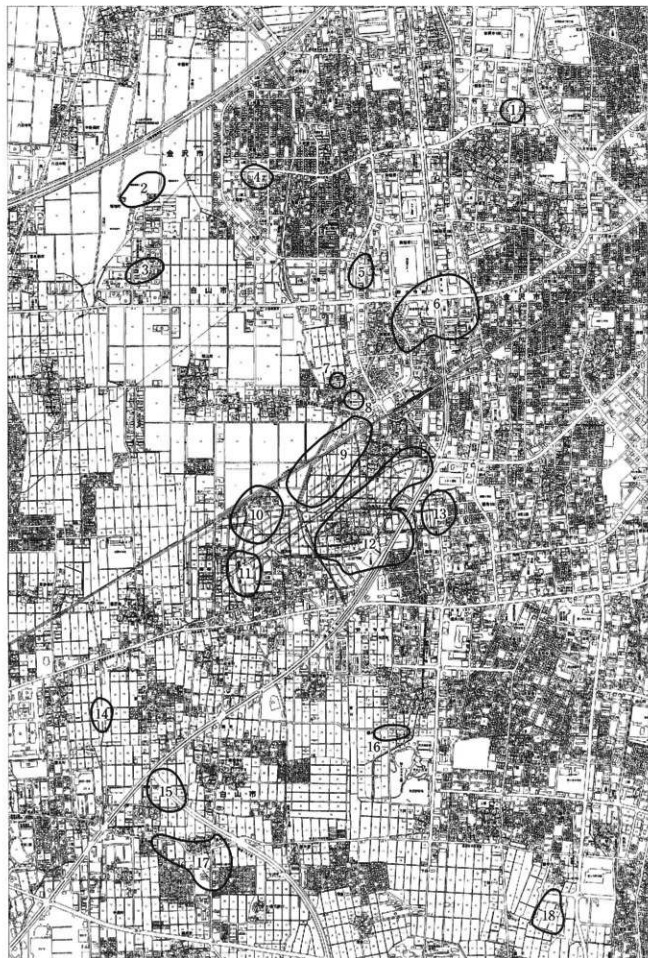
7 世紀後半には、手取川扇状地扇状部に、県内最古の古代寺院である末松庵寺が建立される。末松庵寺跡は、東に塔、西に金堂が置かれた法起寺式の伽藍配置をもち、この寺院建立以降、市内南部地域を含む手取川扇状地扇状部一帯で耕作地開発が急速に進み、特に 8 世紀後半以降は 18 藤平田ナカシンギ遺跡をはじめとする周辺各地に集落が増大していく。扇状地扇状部には、初期荘園の遺跡である 3 横江荘々家跡、4 上荒屋遺跡が所在する。また、三日市 A 遺跡の南方部には、9 世紀頃に成立した古代の官道である北陸道の跡が見つかり、上記荘園遺跡との関係が指摘されている。

中世

11 世紀後半～12 世紀頃から、在地領主層の武士団の形成がはかられるようになった。地元武上団である林氏や富樫氏は、手取川扇状地での新開発や再開発に大きな影響を与えた。ただし、市内において現在のところ中世前半にかけての遺跡はあまり多く確認されていない。中世の遺跡が多く認められるようになるのは、富樫氏が加賀国の守護職に任じられ、野市に守護所を置く 14 世紀頃からである。三日市 A 遺跡をはじめ、近隣の二日市イシバチ遺跡や郷クボタ遺跡、中屋サワ遺跡では、溝で囲まれた中に建物などが配置される散居村のような景観が広がる集落が認められる。また、本遺跡南方 1.5 km にある 16 堀内館跡では、幅 1.5 m、深さ 1 m ほどの大きな堀で囲まれた屋敷地の跡も確認されている。15 世紀以降になると、集落跡である三日市 A 遺跡、8 長池キタノハシ遺跡、11 徳用クヤダ遺跡では、掘立柱建物、竪穴状遺構などの主要遺構が密集した村落形態を示し、14 世紀頃までみられた散村から集村へと大きく変わる様相となる。

近世

現在見ることのできる集落は、近世に成立したと考えられる。御経塚集落内（御経塚遺跡アト地区）や郷町集落（徳用クヤダ遺跡）隣接地での発掘調査でも、近世の遺構・遺物を発見している。また、乾遺跡や三日市 A 遺跡からは、当該時期の村落墓跡を確認している。



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/20000)

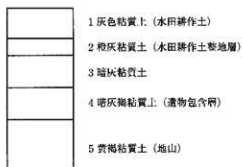
第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代
1	チカモリ遺跡	集落跡	縄文
2	中隈ウヅ遺跡	集落跡	縄文～中世
3	横江荘々家跡	荘園	古代
4	上荒原遺跡	集落跡 荘園跡	縄文～中世
5	御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群	集落跡 古墳	弥生～中世
6	御経塚遺跡	集落跡	縄文～中世
7	長池ニシタンボ遺跡	集落跡	弥生
8	長池キタノハシ遺跡	集落跡	中世
9	二日市イシバチ遺跡	集落跡 古墳	弥生 古墳 中世
10	郷クボク遺跡	集落跡	弥生 古代 中世
11	徳用クヤダ遺跡	集落跡	古代 中世
12	三日市人遺跡	集落跡	弥生 古代 中世 近世
13	三日市ヒガシタンボ遺跡	集落跡	弥生 古代 中世
14	徳丸ジョウジャダ遺跡	集落跡	弥生 古代
15	乾遺跡	集落跡・塚地	縄文～近世
16	堀内館跡	館跡	中世
17	長竹遺跡	散布地・塚地	縄文～古墳
18	番平田ナカシンギジ遺跡	集落跡	古代 中世

第3節 基本層序

基本層序については、下記のとおりである。ただし、各調査区が広範囲であることから、それぞれの箇所ですべての相違が見られる。

1の灰色粘質土は土地区画整理事業以前まで行われていた水田耕作土である。2の橙灰粘質土は耕作土の整地層にあたる。3の暗灰粘質土は中世～近世頃までの耕作土と想定される。4の暗灰褐粘質土は遺物包含層で、中世の遺構面にもあたる。その下面にある5の黄褐粘質土は地山面である。



第5図 土層断面模式図

第3章 第4次（平成13年度）調査

第1節 調査の経過

第1項 調査に至る経緯

本調査区は、野々市市北西部土地区画整理地区72街区における家電量販店建設工事に伴う発掘調査である。平成13年9月、北西部土地区画整理組合から野々市町（当時）教育委員会（以下、町教委という。）に対し、当該地において家電量販店建設の計画の打診があった。建設予定地は全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、双方でその取扱いについて協議を行った。加えて、この建物が包蔵地に面して接しない、限られた基礎で立ち上がるフローティングともいべき構造で、建物の下を駐車場として利用する建築物であったため、並行して石川県教育委員会文化財課（以下、県教委という。）とも協議を進めた結果、22か所の基礎部分と地面から立ち上がる入口及び倉庫部分を調査対象とし、他は盛土造成工事として遺跡を保護することで合意した。調査面積は830㎡である。

町教委は、平成13年11月5日付で県教委に発掘調査報告を提出し、当該地における埋蔵文化財発掘調査の具体的準備に着手した。

第2項 発掘作業の経過

現地における発掘調査は、先行して行っていた第3次調査が終了した後の平成14年2月8日に着手した。計画図をもとに調査区を設定し、重機を用いて遺構上面までの表土を除去し、その後人力による掘削を開始した。調査にあたっては、1か所につき4名1組で担当してもらい、包含層掘り下げから遺構掘削までを一貫して行った。その後調査員が写真撮影を行い、記録を取った。調査区全体の配置図とそれぞれの遺構平面図等については外部委託を行い、同年3月26日に現地での作業を終了した。

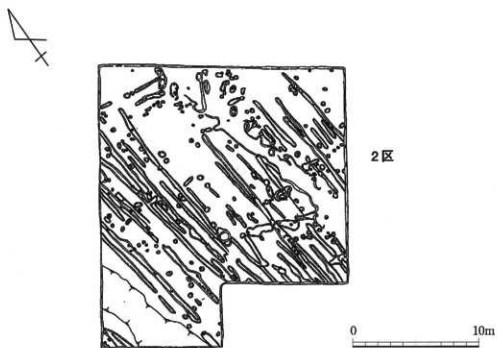
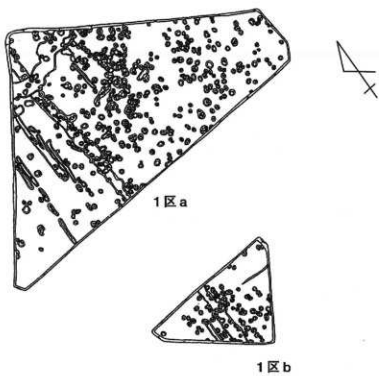
出土した遺物の整理については、平成17年度に行ったが、図化できるほどのものはなく、僅かに時期を判断できるものは9世紀前半代の須臾器盤1点のみであった。

第2節 遺構（第6～12図）

南西から北東にかけてのラインをA～E列、西から東にかけてのラインを1～8列と設定し、各調査区の位置を南西隅よりA3調査区というように標記している。この内、C1調査区及びD1調査区とE列の調査区については遺構全体図の中では第30次の遺構図と重なっている。今次の調査は三日市A遺跡としては早い年次の調査であったため当時は思いもよらなかったが、事後の確認ではA3・A6・B4・C4・D1・D2調査区に古代北陸道と思われる道路状遺構の側溝跡がみられる。各調査区の配置については、遺構全体図でご確認願いたい。

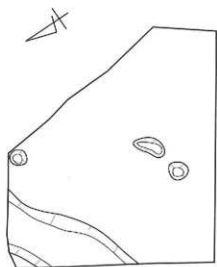
第3節 小結

第4次の調査としてみれば小さな調査区の集合体であるが、これまで積み重ねられた調査成果全体をみれば、古代北陸道と思われる道路状遺構を中心とした位置にあたり、集落としての土地利用は、それより若干遅れた時期になるとと思われる。

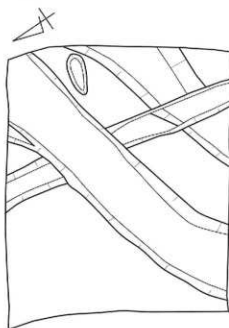


第6图 調査区遺構図1 (S=1/300)

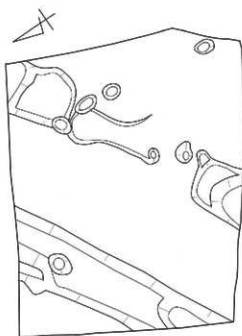
A3 調査区



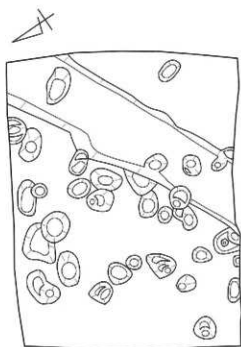
A6 調査区



A7 調査区

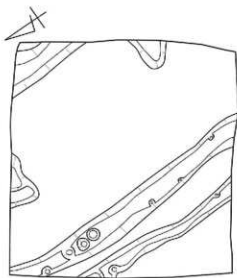


A8 調査区

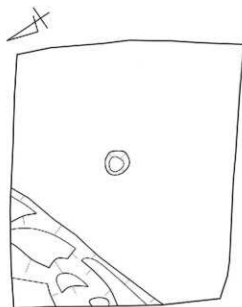


第7図 調査区遺構図2 (S=1/50)

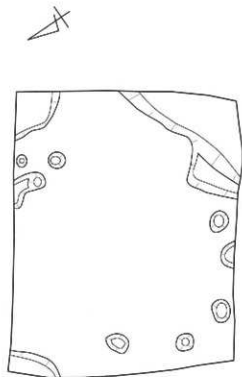
B3 調査区



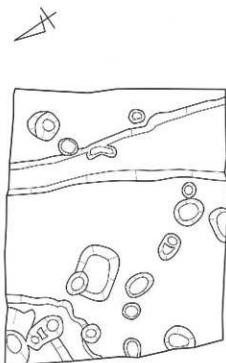
B4 調査区



B6 調査区

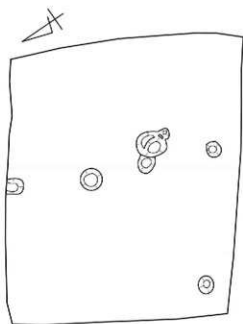


B7 調査区

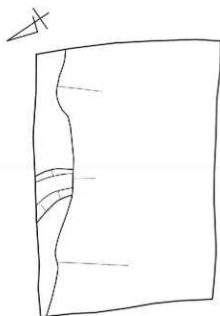


第 8 図 調査区遺構図 3 (S=1/50)

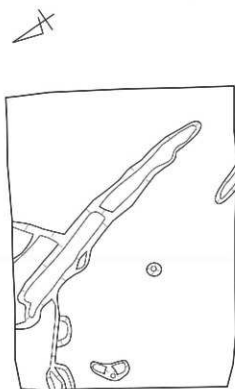
B8 調査区



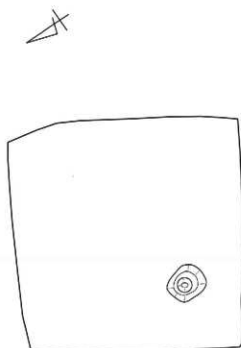
C1 調査区



C2 調査区

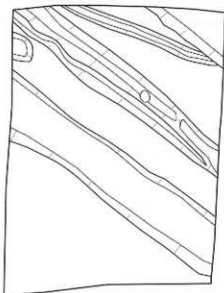


C3 調査区

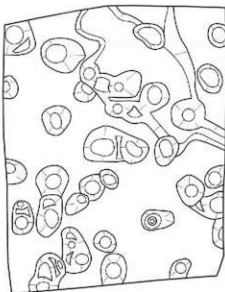


第9図 調査区遺構図4 (S=1/50)

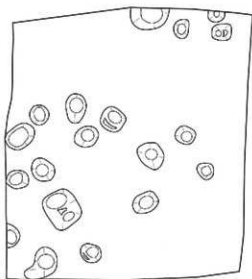
C4 調査区



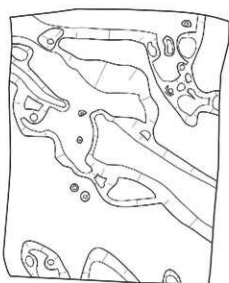
C5 調査区



C6 調査区

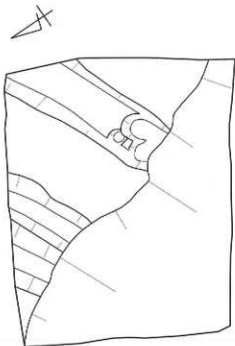


D1 調査区

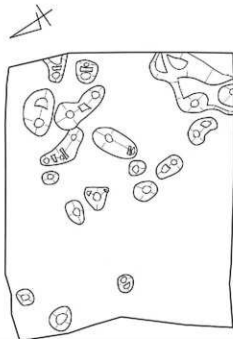


第10図 調査区遺構図5 (S=1/50)

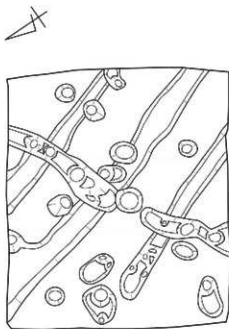
D2 調査区



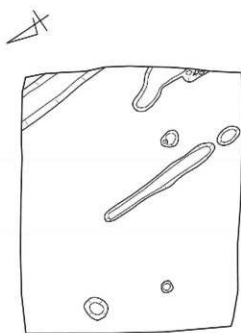
D3 調査区



D4 調査区

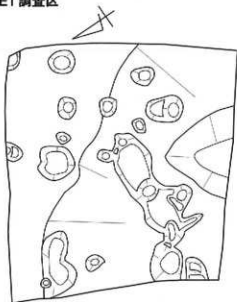


D5 調査区

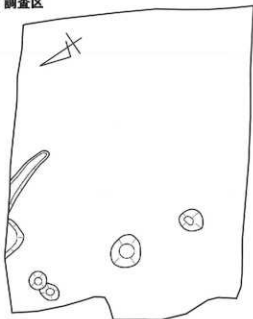


第11图 調査区遺構図6 (S=1/50)

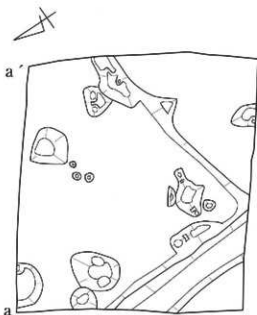
E1 調査区



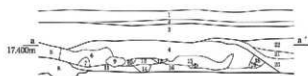
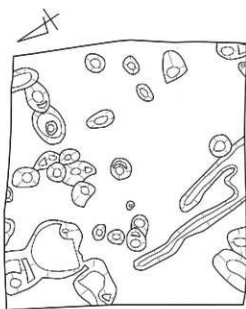
E2 調査区



E3 調査区



E4 調査区



- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 黄土 | 11 明褐色粘質土に堆山ブロック混入 |
| 2 赤土 | 12 淡褐色粘質土 |
| 3 暗褐色粘質土 | 13 深褐色粘質土 |
| 4 暗灰色粘質土 | 14 淡褐色粘質土 |
| 5 深明褐色粘質土 | 15 淡明褐色粘質土に堆山ブロック混入 |
| 6 黄褐色粘質土と黒褐色粘質土の混入 | 16 明褐色粘質土に堆山ブロック混入 |
| 7 黒褐色粘質土 | 17 黒褐色粘質土 |
| 8 暗褐色粘質土 | 18 明褐色粘質土に堆山ブロック混入 |
| 9 深褐色粘質土 | 19 黄褐色粘質土 |
| 10 淡褐色粘質土 | 20 明褐色粘質土 (異分線) |
| | 21 深褐色粘質土 |
| | 22 灰褐色粘質土 |



第12図 調査区遺構図7 (S=1/50)

第4章 第9次（平成15年度）調査

第1節 調査の経過

第1項 調査に至る経緯

本調査区は、野々市市北西部十地区画整理地区44街区における車用品量販店建設工事に伴う発掘調査である。平成14年10月、北西部上地区画整理組合から野々市町（当時）教育委員会（以下、町教委という。）に対し、当該地において車用品量販店建設の計画の打診があった。建設予定地は全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、双方及び建設事業者を加えてその取扱いについて協議を行った。その結果、建設によって地下に影響を受ける店舗部分を調査対象とし、他は盛土造成工事として遺跡を保護することで合意した。また、盛土造成工事についても、慎重に実施するよう指導している。調査面積は2,770㎡である。

町教委は、平成15年4月1日付教文第6号で石川県教育委員会文化財課に発掘調査報告を提出し、当該地における埋蔵文化財発掘調査の具体的作業に着手した。

第2項 発掘作業の経過

現地における発掘調査は、平成15年4月18日に着手した。計画図をもとに調査区を設定し、重機を用いて遺構上面までの表土を除去し、その後人力による掘削を開始した。調査にあたっては、包含層掘り下げを行った後に遺構検出を行い、並行して1/100スケールの遺構略測図を作成した。その後遺構掘削を進め、写真撮影と記録作成を行い、同年7月7日に現地での作業を終了した。

出土した遺物の整理については、平成20年度に行った。内容は遺物の洗浄と記名、選別及び接合と実測図作成、トレースである。並行して遺構図の編集や遺物写真の撮影を行い、原稿執筆を含めたすべての作業を平成21年3月30日に完了した。

第2節 遺構（第13～26図）

確認された主な遺構は、古代北陸道と思われる道路状遺構と、掘立柱建物11棟である。この内、道路状遺構は路面幅8mを測る堂々としたものであり、北東方向より南西へ直線的に伸びている。道路上にはほかの時代の遺構はほとんど干渉しておらず、長く古代の官道として意識されていたことがうかがわれる。遺物は図化していないが、側溝覆土層より須恵器の杯小片が1点出土している。時期的には9世紀後半代のものであり、北側に連れて展開する集落からの混入品と考えられる。

掘立柱建物はこの道路状遺構から若干遅れて建てられたものである。中央に南北に走る幅7.5mほどの鞍部を挟み、東西に分けられている。詳細については遺構観察表（第2表）を参照していただきたい。

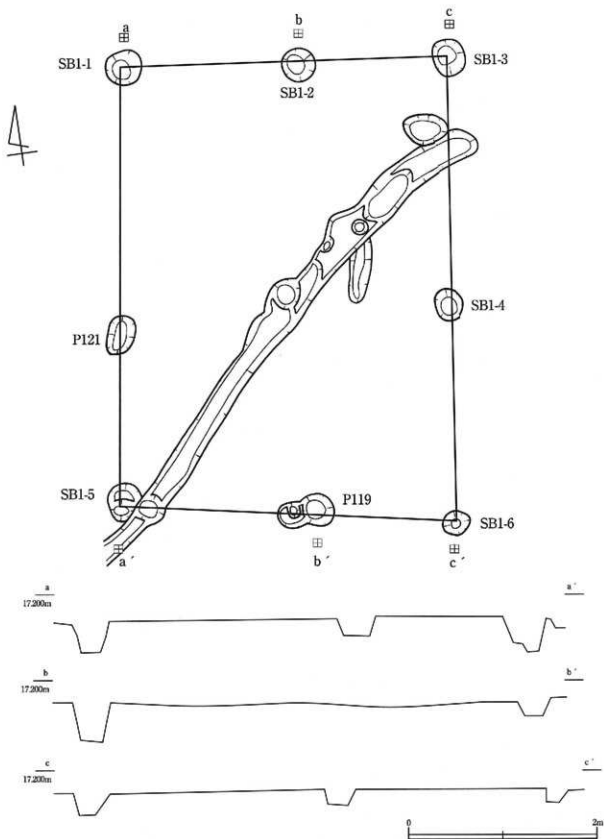
第3節 遺物（第27～30図）

遺物は61点図示した。概ね9世紀中頃から後半のものでしめられており、道路状遺構に後続するとと思われるものである。詳細については遺物観察表（第3表）を参照いただきたい。

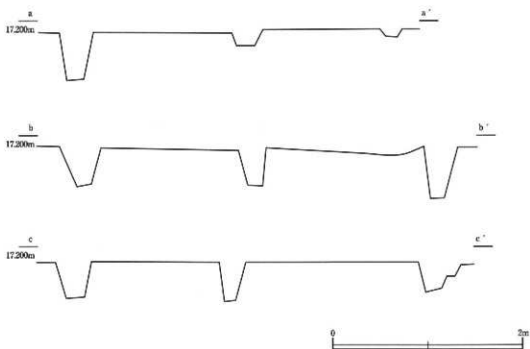
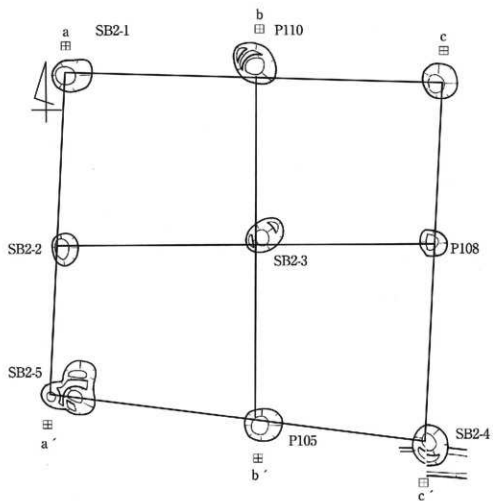
第4節 小結

今回の調査で特筆すべきは、これまで加賀平野においてそのルートが不明であった古代北陸道の存在が確認されたことであり、周辺の調査成果も含めると現在までに約530mの区間で直線的に伸びていることが確認されている。古代の官道はその機能を維持するために頻繁に側溝を掃除するため、明確に機能した時期を特定できる遺物は確認されていないが、その目的に鑑みて律令体制が成立した時代からそう遠くないものと考えられる。そうした場合、北側に展開する掘立柱建物群とは一時代画しているものと思われるが、路面より9世紀代以降の遺構が確認されていないことからしばらくは官道

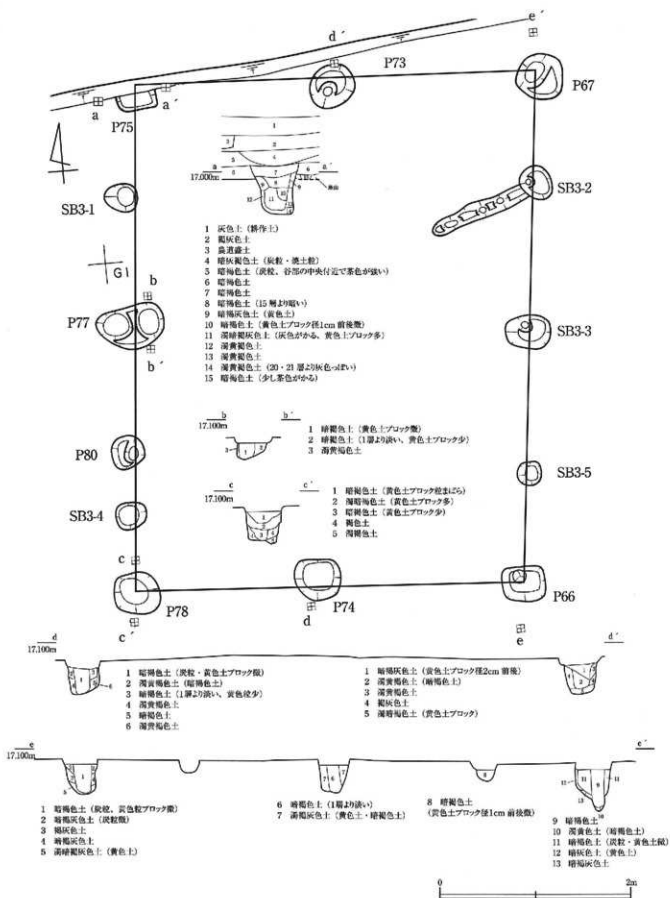
として意識されていたものと考えられる。周辺では現状で三日市A遺跡以外に同様の遺構が確認されていないため明言をさけるが、東は金沢市広飯廃寺方面へ、西は白山市石の木塚方面へ伸びているようにも思える。ただ、大きな縮尺の地図を用いての推測では、鉛筆の芯1本分のずれでも大きな誤差が生じることから、今後は本遺跡より西側（白山市地内）で確認されることを期待したい。



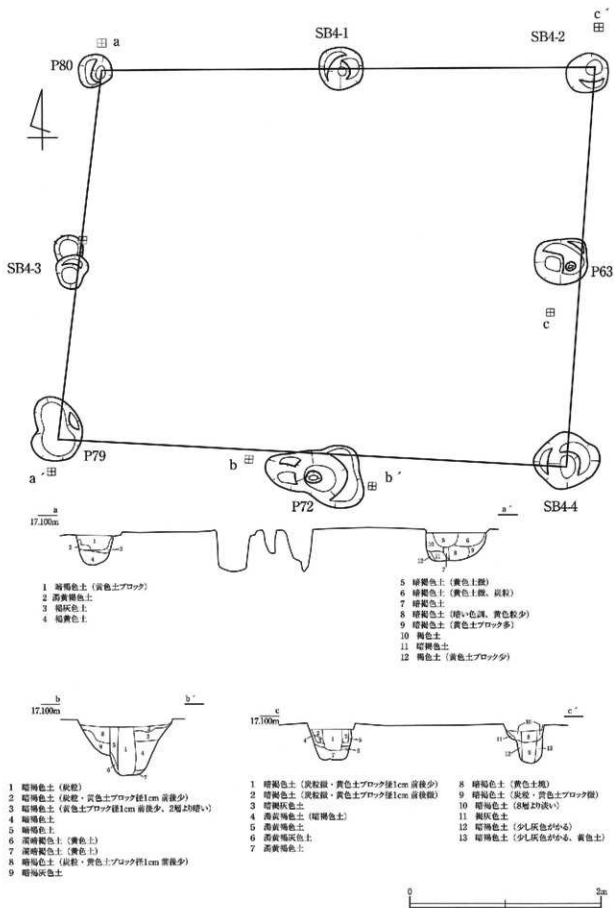
第13図 SB1遺構図・断面図 (S=1/40)



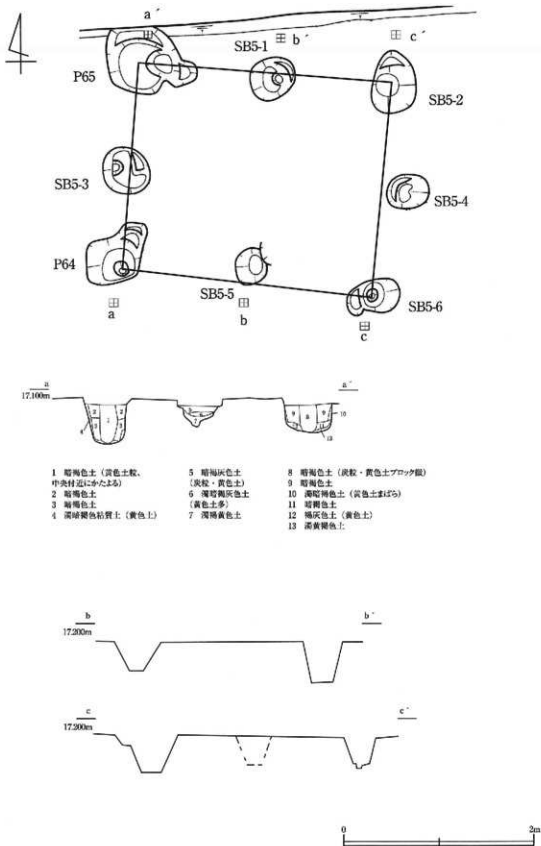
第 14 图 SB2 遺構図・断面図 (S=1/40)



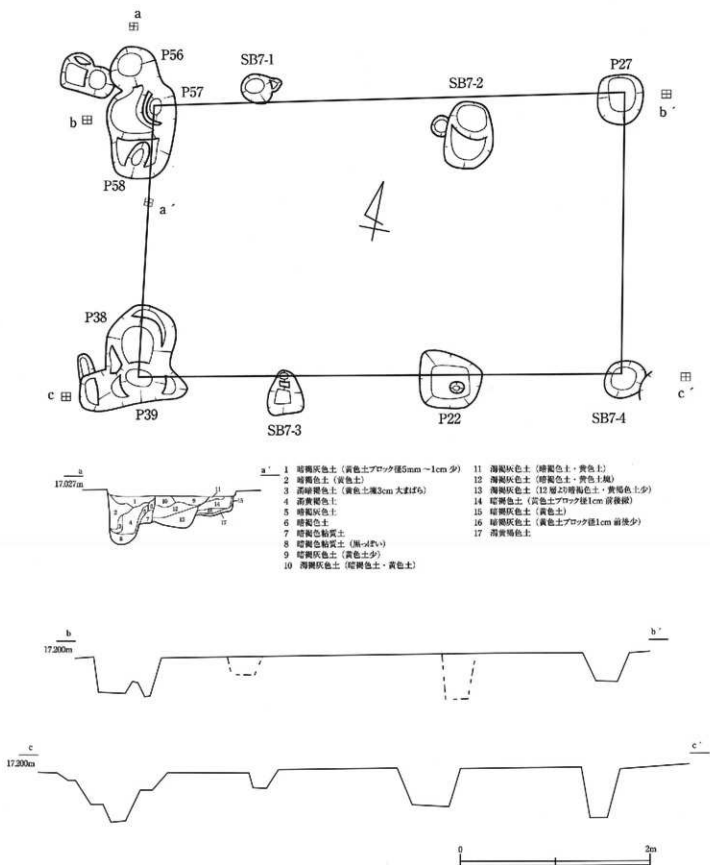
第15図 SB3遺構図・土層断面図 (S=1/40)



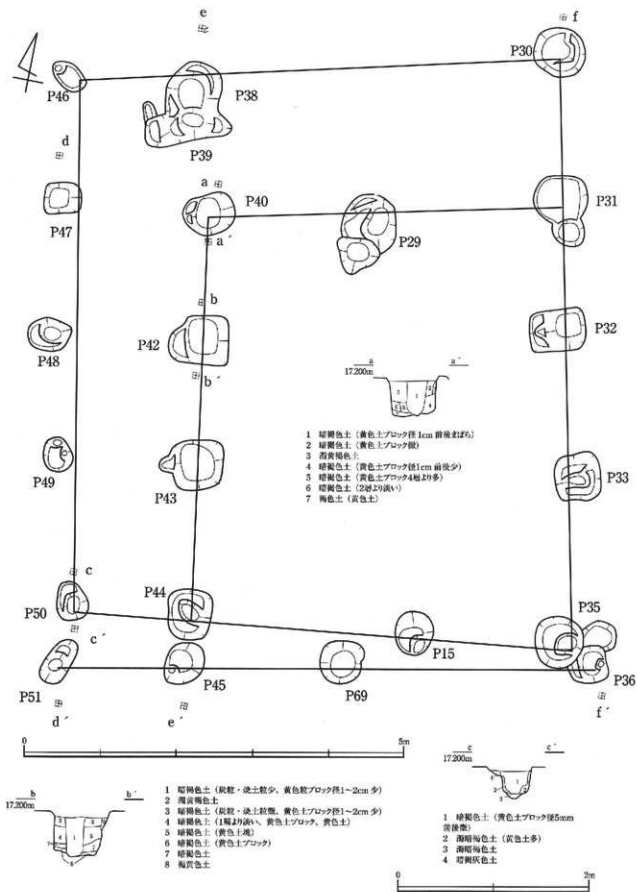
第 16 図 SB4 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



第17図 SB5遺構図・土層断面図 (S=1/40)



第19図 SB7 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



第20図 SB8 遺構図・土層断面図 (遺構図 S=1/50、断面図 S=1/40)



- 1 暗褐色土 (灰粒・地土粒・黄色土多)
- 2 暗褐色土 (黄色土)
- 3 暗褐色土 (黄色土)
- 4 暗褐色土 (黄色土多)
- 5 暗褐色土 (灰粒・黄色土・黄色土・黄色土)
- 6 暗褐色土 (黄色土)
- 7 暗褐色土 (黄色土)
- 8 暗褐色土 (黄色土)
- 9 暗褐色土 (黄色土)
- 10 暗褐色土 (黄色土)
- 11 暗褐色土 (黄色土)
- 12 暗褐色土 (黄色土)
- 13 暗褐色土 (黄色土)
- 14 暗褐色土 (黄色土)
- 15 暗褐色土 (黄色土)
- 16 暗褐色土 (黄色土)
- 17 暗褐色土 (黄色土)

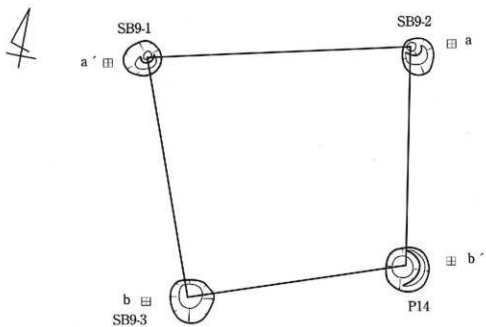


- 1 暗褐色土 (灰粒・地土粒・黄色土多)
- 2 暗褐色土 (黄色土)
- 3 暗褐色土 (黄色土)
- 4 暗褐色土 (黄色土)
- 5 暗褐色土 (黄色土)
- 6 暗褐色土 (黄色土)
- 7 暗褐色土 (黄色土)
- 8 暗褐色土 (黄色土)
- 9 暗褐色土 (黄色土)
- 10 暗褐色土 (黄色土)
- 11 暗褐色土 (黄色土)
- 12 暗褐色土 (黄色土)
- 13 暗褐色土 (黄色土)
- 14 暗褐色土 (黄色土)
- 15 暗褐色土 (黄色土)
- 16 暗褐色土 (黄色土)
- 17 暗褐色土 (黄色土)
- 18 暗褐色土 (黄色土)
- 19 暗褐色土 (黄色土)
- 20 暗褐色土 (黄色土)
- 21 暗褐色土 (黄色土)
- 22 暗褐色土 (黄色土)
- 23 暗褐色土 (黄色土)
- 24 暗褐色土 (黄色土)
- 25 暗褐色土 (黄色土)
- 26 暗褐色土 (黄色土)
- 27 暗褐色土 (黄色土)
- 28 暗褐色土 (黄色土)
- 29 暗褐色土 (黄色土)
- 30 暗褐色土 (黄色土)
- 31 暗褐色土 (黄色土)
- 32 暗褐色土 (黄色土)
- 33 暗褐色土 (黄色土)

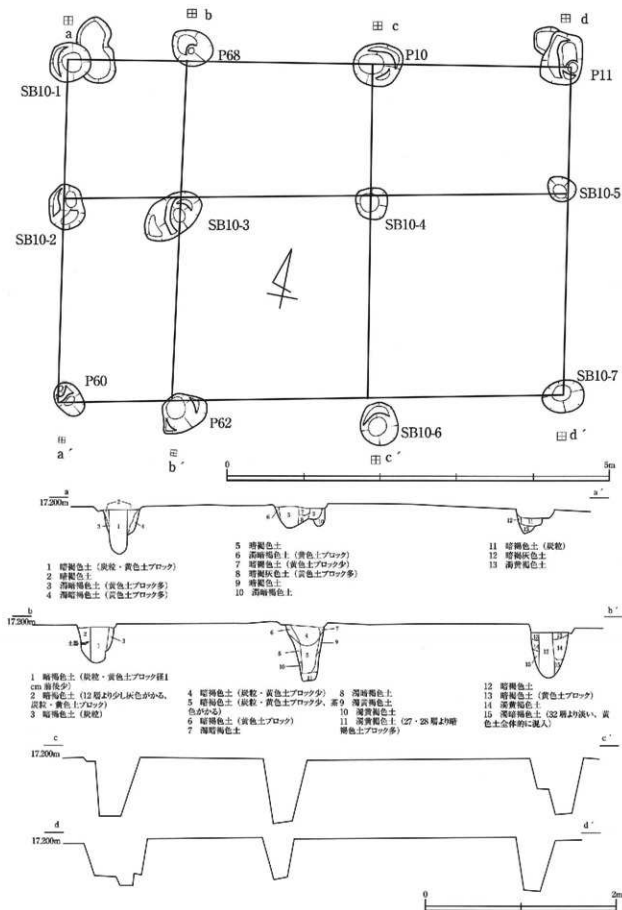


- 1 暗褐色土 (黄色土)
- 2 暗褐色土 (黄色土)
- 3 暗褐色土 (黄色土)
- 4 暗褐色土 (黄色土)
- 5 暗褐色土 (黄色土)
- 6 暗褐色土 (黄色土)
- 7 暗褐色土 (黄色土)
- 8 暗褐色土 (黄色土)
- 9 暗褐色土 (黄色土)
- 10 暗褐色土 (黄色土)
- 11 暗褐色土 (黄色土)
- 12 暗褐色土 (黄色土)
- 13 暗褐色土 (黄色土)
- 14 暗褐色土 (黄色土)
- 15 暗褐色土 (黄色土)
- 16 暗褐色土 (黄色土)
- 17 暗褐色土 (黄色土)
- 18 暗褐色土 (黄色土)
- 19 暗褐色土 (黄色土)
- 20 暗褐色土 (黄色土)
- 21 暗褐色土 (黄色土)
- 22 暗褐色土 (黄色土)
- 23 暗褐色土 (黄色土)
- 24 暗褐色土 (黄色土)
- 25 暗褐色土 (黄色土)
- 26 暗褐色土 (黄色土)
- 27 暗褐色土 (黄色土)
- 28 暗褐色土 (黄色土)
- 29 暗褐色土 (黄色土)
- 30 暗褐色土 (黄色土)
- 31 暗褐色土 (黄色土)
- 32 暗褐色土 (黄色土)
- 33 暗褐色土 (黄色土)
- 34 暗褐色土 (黄色土)
- 35 暗褐色土 (黄色土)

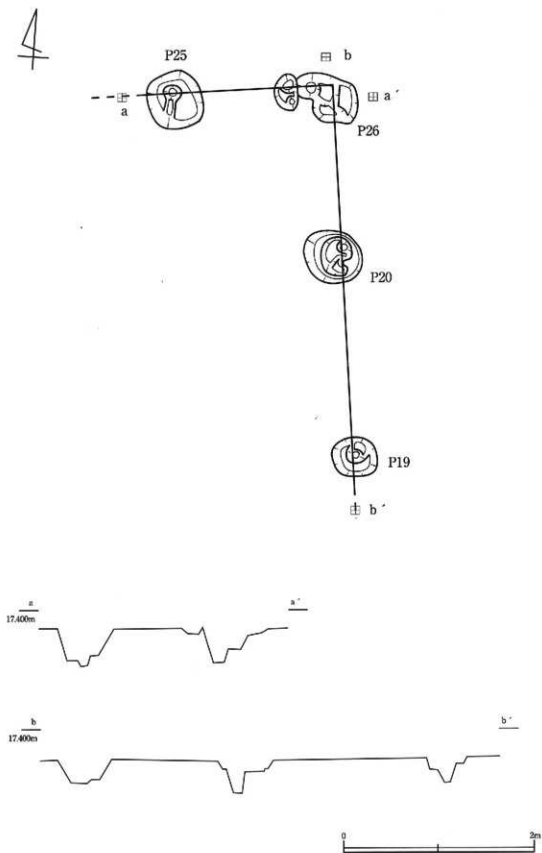
第 21 図 SB8 土層断面図 (S=1/40)



第 22 图 SB9 遺構図・断面図 (S=1/40)

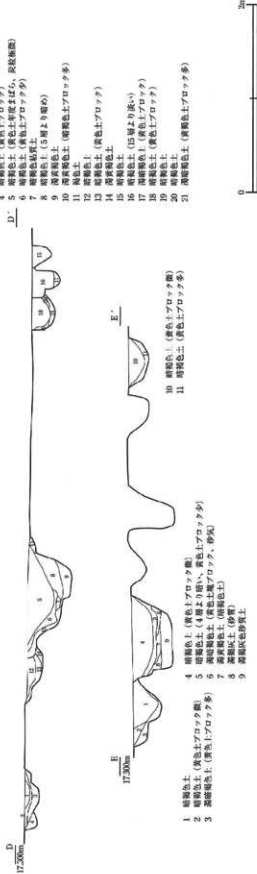
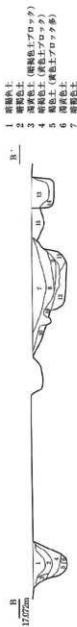
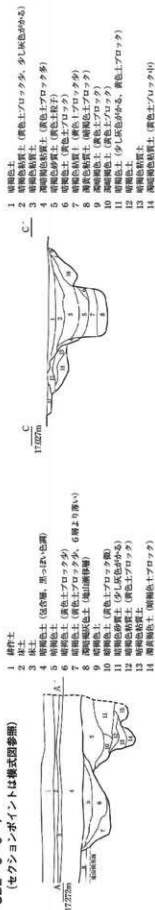


第23図 SB10 遺構図・土層断面図 (遺構図S=1/50、断面図S=1/40)

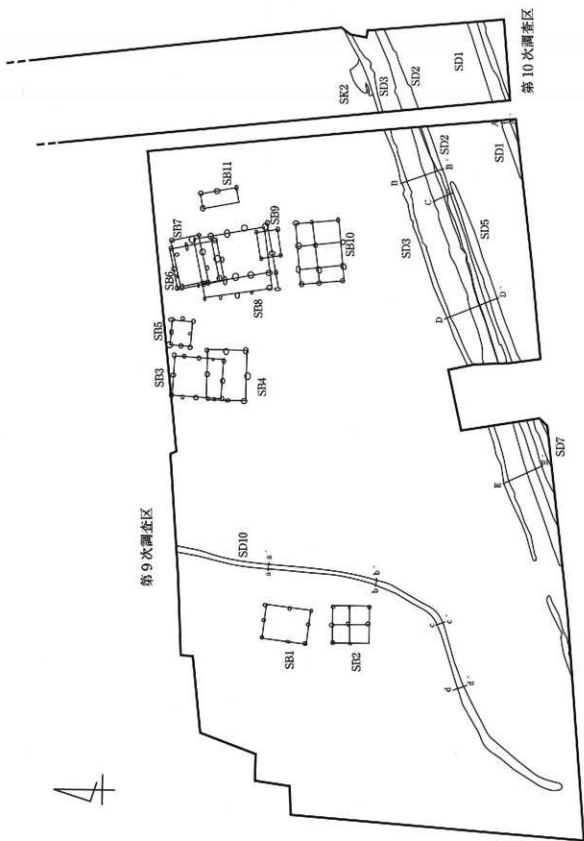


第24图 SB11 遗構図・断面図 (S=1/40)

SD2・3・5・7
(セクションポイントは形式図参照)



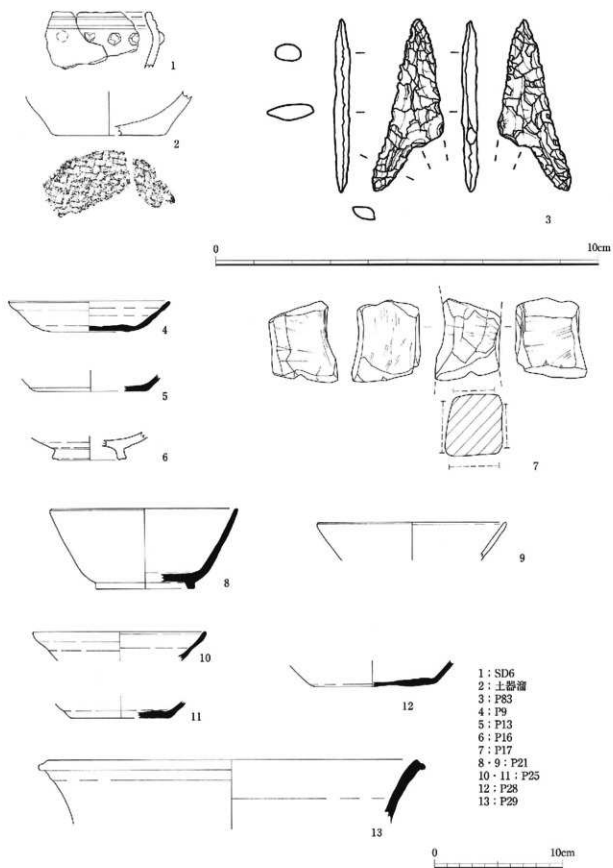
第 25 図 SD2～7 土層断面図 (S=1/40)



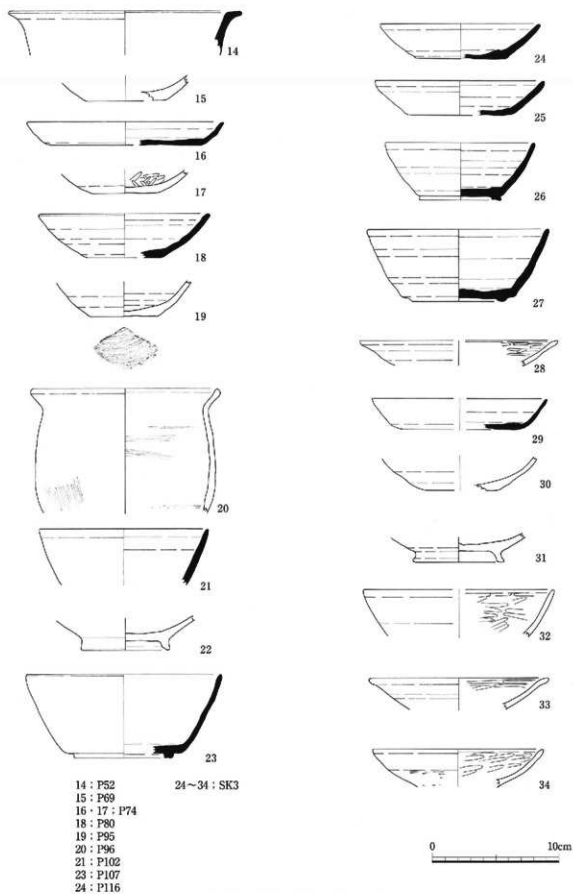
第 26 图 主要道構模式图

第2表 遺構観察表

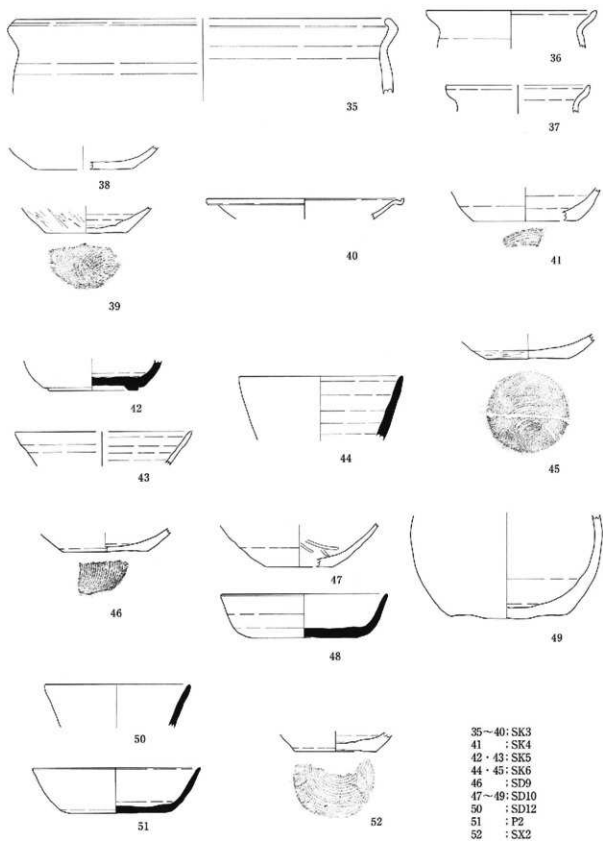
遺構	軸	長軸 cm	短軸 cm	梁	桁	構成SP	長径 cm	短径 cm	深さ cm	その他	遺構	軸	長軸 cm	短軸 cm	梁	桁	構成SP	長径 cm	短径 cm	深さ cm	その他													
SB1	N-7-W	467	345	2	2	SB1-1	40	37	33		切り合い	SB7	E-10-N	301	300	1	3	SB7-1	33	32	23													
						SB1-2	35	35	41									SB7-2	40	40	50													
						SB1-3	40	34	19									SB7-3	50	35	25													
						SB1-4	36	33	16									SB7-4	41	38	58	切り合い												
						SB1-5	41	36	27									P57	74	56	42	切り合い												
						SB1-6	28	25	16									P27	54	48	31													
						SP121	43	29	16									P39	48	42	64	切り合い												
						SP119	35	34	19									P22	61	62	44													
						SB2	N-2-E	385	374	2								2	SB2-1	43	33	51		SB8	N-6-W	708	642	4	1	P46	49	31	16	庇か
																			SB2-2	34	28	16								P47	48	32	36	
SB2-3	43	31	40		P48						54	46	39																					
SB2-4	43	41	31		P49						46	37	33																					
P110	51	39	39		P50						52	41	34																					
P112	40	37	38		P30						71	65	36																					
P108	29	29	44		P40						67	51	49	上階か																				
P105	40	33	55		P42						64	57	56																					
SB3	N-5-E	335	415	4	2						SB3-1	34	30	36		P43	65		63	40														
											SB3-2	38	31	20		P44	67		56	44														
						SB3-3	47	34	49		P15	59	30	76																				
						SB3-4	36	34	34		P35	67	64	46																				
						SB3-5	24	24	12		P33	60	60	53																				
						P75	42	18	47	調査区外	P32	74	55	63																				
						P73	51	46	48		P31	71	65	23	切り合い																			
						P67	52	50	55		P29	71	63	56	切り合い																			
						P77	41	28	23		P38	72	60	33	利用か?																			
						P78	50	44	45		P51	65	35	46	横列か																			
SB4	N-5-E	512	425	2	2	P74	50	44	37		P45	54	51	50																				
						P66	46	38	43		P69	58	57	54																				
						P80	37	30	33		P36	50	48	36																				
						P63	54	48	47		SB9	N-7-W	274	210	1	1	SB9-1	39	34	44														
						P79	70	54	30								SB9-2	41	32	44														
						P72	56	33	56								SB9-3	35	29	27														
						SB4-1	48	46	34								P14	48	35	43														
						SB4-2	45	42	32								SB10	N-3-W	440	157	2	1	SB10-1	55	51	61	庇か							
						SB4-3	35	34	34														SB10-2	62	47	46								
						SB4-4	70	64	54														P60	48	33	37								
SB5-1	50	40	32		P68	57	46	50	主壁(礎柱)か																									
SB5-2	65	45	41		P10	64	53	66																										
SB5-3	50	48	32		P11	70	53	50																										
SB5-4	44	36	28		SB10-3	87	51	65																										
SB5-5	38	32	42	切り合い	SB10-4	40	40	70																										
SB5-6	44	36	42		SB10-5	40	33	44																										
P64	58	48	59		P62	53	50	59																										
P65	74	58	34		SB10-6	56	49	56																										
SB5	N-6-E	264	220	2	2	SB6-1	65+	46	56	切り合い	SB10-7	56	40	52																				
						SB6-2	50	41	17		SB11	N-11-W	372	163	2	1+	P25	60	57	42														
						SB6-3	74	36	25								P26	53	47	24														
						SB6-4	55	47	56	切り合い							P20	64	57	35														
						SB6-5	40	40	47								P19	48	44	28														
						P56	50	42	57	切り合い																								
						P38	72	60	33	切り合い																								
						P41	74	45	46																									



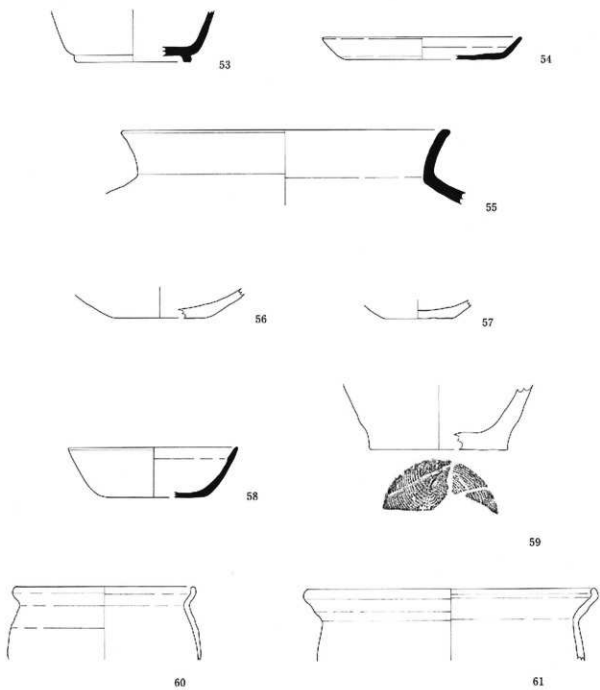
第27図 土器、石製品実測図1 (S=1/3、3はS=1/1)



第 28 图 土器実測図 1 (S=1/3)



第29图 土器実測図2 (S=1/3)



53~55: 埴土
 56~58: 包含野鳥道以西微高地部
 59~61: 包含層

0 10cm

第30圖 土器実測圖3 (S=1/3)

第3表 遺物總表表1

圖版番号	形骸番号	類別	器種	出土地点	口径 mm	底径 mm	器高 mm	底径 mm	外周調整	内周調整	貼上	器身番号	備考			
1	1	縄文土器	漆漆	SD6					小片	漆波紋線2条-粘土粘附片	ナ字	25Y7/4	25Y4/2	I, I, S2	T488	波状山脈、泡見式
2	2	縄文土器	漆漆	C9林		11			小片	ナ字、無文、底漆線代裏	ナ字	25Y7/4	25Y4/2	I, I, M1, S1	T451	漆刷
3	3	石製器	石環	P83	最大長46.	最大幅19.	最大厚0.4.	重さ2.9g	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	L, L, M1, S1	T496	
4	4	須恵器	杯A	P9	128	60	25	1/3	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S2	N310	
5	5	須恵器	杯A	P13	88	58	11	1/5	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S2	N310	
6	6	須恵器	杯B	P16	88	58	11	1/5	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S2	N310	
7	7	須恵器	杯B	P17	最大長65.	最大幅56.	最大厚2.9g		小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N516	欠損
8	8	須恵器	杯B	P21	130	83	64	1/3	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N516	欠損
9	9	須恵器	杯	P21	132			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N516	欠損
10	10	須恵器	杯	P25	137			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N516	欠損
11	11	須恵器	杯A	P25	78			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N513	
12	12	須恵器	杯A	P28	96			1/6	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S2	T493	
13	13	須恵器	盃	P29	306			1/9	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	T497	
14	14	須恵器	盃	P52	184			1/9	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	T500	
15	15	須恵器	杯A	P59	63			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	T501	
16	16	須恵器	杯A	P74	154	120	19	1/6	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N515	
17	17	須恵器	杯A	P74	154	120	19	1/6	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N515	
18	18	須恵器	杯A	P80	136	60	35	1/3	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	T489	
19	19	須恵器	短冊型	P85				1/3	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N509	
20	20	須恵器	短冊型	P86	150			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N508	
21	21	須恵器	杯	P102	133			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N512	
22	22	土師器	銅環	P107	70			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N473	
23	23	須恵器	杯B	P116	154	78	67	1/3	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	T498	
24	24	須恵器	杯A	SK3	126	72	28	5/7	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	T504	
25	25	須恵器	杯A	SK3	133	86	28	1/2	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N463	
26	26	須恵器	杯B	SK3	118	65	46	1/2	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N463	
27	27	須恵器	杯B	SK3	143	74	58	1/2	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N454	
28	28	土師器	杯	SK3	156			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N473	
29	29	土師器	杯A	SK3	138	102	28	1/6	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N465	
30	30	土師器	杯A	SK3	138	57	1/2	1/2	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N457	
31	31	土師器	杯B	SK3	131			1/2	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N456	
32	32	土師器	盃	SK3	150			1/9	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N458	
33	33	土師器	盃	SK3	142			1/7	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N466	
34	34	土師器	盃	SK3	135			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N467	
35	35	土師器	短冊型	SK3	294			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N460	
36	36	土師器	短冊型	SK3	136			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N461	
37	37	土師器	短冊型	SK3	114	80		1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N472	
38	38	土師器	盃	SK3				1/3	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N469	
39	39	土師器	盃	SK3	63			1/3	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N462	
40	40	土師器	盃	SK3	156			1/4	小片	底漆へラ切り	ナ字	5Y6/1	5Y6/1	M1, S1	N464	

第3表 遺物調査表2

図面番号	棟名	種別	器種	出土地点	口径 mm	底径 mm	器高 mm	遺存 数	外周調査	内周調査	外面 色調	内面 色調	胎土	発掘 番号	備考
3	41	土師器	須弥盆	SK4	82		17	1/7	ロクロナズ、底部赤切り	ロクロナズ	2.5YR7/3	10YR65/2	M1, S1	N471	
	42	須弥器	杯A	SK5	71		1/2	1/2	ロクロナズ、底部へろ切り	ロクロナズ	2.5Y5/1	2.5Y5/1	L1, M1, S1	N470	
	43	須弥器	杯	SK5	140		1/9	1/9	ロクロナズ	ロクロナズ	10YR8/2	10YR8/2	M1, S2	N469	
	44	須弥器	杯	SK6	130		1/7	1/7	ロクロナズ	ロクロナズ	7.5YR5/1	7.5YR5/1	S2	N475	
	45	土師器	杯B	SK6	65		小片	小片	ロクロナズ、底部赤切り	ミガキ	10YJ5/4	10YR5/1	S1	N474	
	46	土師器	杯A	SD9	68		1/3	1/3	ロクロナズ、底部赤切り	ミガキ	10YR6/3	10YR5/3	M1, S1	T457	
	47	土師器	杯A	SD10	54		1/2	1/2	ロクロナズ、底部へろ切り	ミガキ	10YR6/4	NS/	S1	T466	
	48	須弥器	杯A	SD10南西	84		35	完	ロクロナズ、底部へろ切り	ロクロナズ	2.5Y7/2	2.5Y7/2	L1, M1, S1	T491	
	49	土師器	須弥盆	SD10南西	100		完	完	ロクロナズ、底部へろ切り	ロクロナズ	10YR6/4	10YR7/3	L1, M1, S1	T492	
	50	須弥器	杯	SD12	116		74	1/3	ロクロナズ	ロクロナズ	5Y7/1	5Y7/1	L1, M1, S2	T480	
	51	須弥器	杯A	SK02	135		64	2/3	ロクロナズ、底層赤切り	ロクロナズ	10YR8/2	10YR5/1	S2	N468	
	52	須弥器	杯B	SK02	92		61	2/3	ロクロナズ、底層赤切り	ロクロナズ	N4.0	N4.0	S2	T484	
	53	須弥器	杯A	排土	138		18	1/9	ロクロナズ、底部へろ切り	ロクロナズ	7.5Y6/1	7.5Y6/1	S2	T483	
	54	須弥器	排土	排土	138		18	1/9	ロクロナズ、底部へろ切り	ロクロナズ	7.5Y6/1	7.5Y6/1	S2	T483	
	55	須弥器	排土	排土	290		290	1/9	ロクロナズ	ロクロナズ	5Y7/1	5Y7/1	S2	T482	
56	土師器	杯A	包含層 高麗部	74		74	1/2	ロクロナズ、底層赤切り	ミガキ	10YR8/4	10YR3/1	S1	T478		
57	土師器	杯A	包含層 高麗部	56		56	1/2	ロクロナズ、底部へろ切り	ミガキ	2.5YR6/6	2.5YR7/6	S1	T480		
58	土師器	杯A	包含層 高麗部	134		70	40	1/2	ロクロナズ、底部へろ切り	ロクロナズ	10YR8/3	10YR8/2	M1, S1	T481	
59	土師器	須弥盆	包含層 高麗部	90		90	1/9	ロクロナズ、底層赤切り	ロクロナズ	10YR7/6	10YR8/3	L1, M1, S1	T476		
60	土師器	須弥盆	包含層 高麗部	144		144	1/9	ロクロナズ	ロクロナズ	10YR5/1	10YR8/2	S1	T479		
61	土師器	須弥盆	包含層 高麗部	226		226	小片	ロクロナズ	ロクロナズ	10YR8/3	10YR8/3	S1	T477		

注記
 発掘番号はそれぞれ別の区で付加され、通しではない
 法廷の発掘は遺存物の項目に「発」とない場合はすべて復元性である
 遺存物に示した数値は、実測図に点された範囲内での遺存物であり、器形全体に対するものではない「ロクロナズ」であれば、ヨコナデを行ったものを示す
 調査 発掘の場所は土師器で調査が異なる場所があることを示す

色調
 土師器 発掘番号の上に発掘区の子のふさふさ、S (径1mm以下) M (径1~3mm) L (径3mm以上)
 排土 数値は発掘区の子のふさふさ、0 (ほとんど含まない) 1 (少量含む) 2 (やや多い) 3 (多い)

須弥器・土師器の器種名は小松市教育委員会2006~2010「須弥器調査1~V」を参考にした

第5章 第16次（平成16年度）調査

第1節 調査の経過

第1項 発掘作業の経過

本発掘調査業務は、野々市市北西部上地区画整理地区内の野々市町道二日市徳用線工事に伴う事業を調査原因とする。

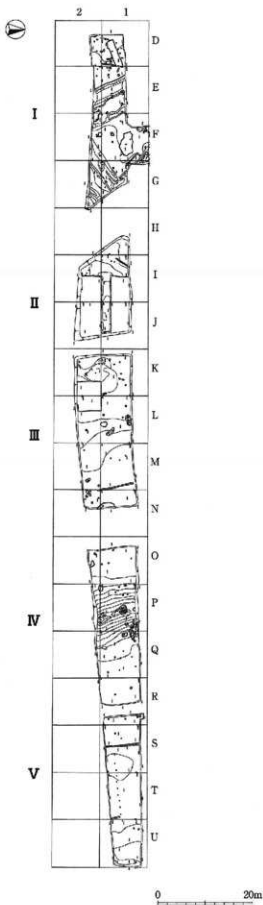
平成16年4月1日、野々市町（当時）は本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を野々市町北西部上地区画整理組合（以下、北西部組合と呼称する。）に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。

現地調査は、4月12日調査区の設定により開始した。4月21日からは大型掘削機を使って遺構面までの土砂を掘削し、5月6日には完了した。同日からは、発掘作業員による人力作業が始まった。人力の作業内容は、遺構精査や遺構掘削などで、これらの作業中に調査員は図面の記録を行った。7月2日には全ての遺構掘削が完了し、7月5日からは調査区の清掃作業を開始した。清掃作業は7月7日まで行われ、同日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後調査区全体や個別遺構の写真撮影を行って、現地調査作業を完了した。7月14日から7月16日にかけては、大型掘削機による調査区内の埋戻し作業が行われた。

出土品の整理は平成17年6月1日から開始した。整理作業の内容は出土品の洗浄、記名・分類・接合、実測で、7月29日に完了した。平成24年1月5日からは、現地で行われた記録図や出土品実測図の製図、出土品の写真撮影、併行して原稿執筆や編集を実施して、3月30日までにこれらの作業を完了した。

第2項 調査区の設定

本調査区は東西約175m南北約10mを対象とし、東西に長い調査区を設定している。本調査区域内には既設道路や小川、耕作地及び排水用の用水施設が縦断している。これらの対象箇所については、調査区域から割愛した。このことから、調査地は大きく5か所の区画に分かれることとなり、西方から東方へⅠ～Ⅴ区の小区を設定した。また、調査区内の公表座標を基として、算用数字とアルファベットを使ってグリッドを設定した。



第31図 調査区グリッド図 (S=1/800)

第2節 遺構

S B 1 (第35図)

V区西端で2基のピットを検出した。ピットは直径30cmの円形、深さ55cm、65cmと深いため、掘立柱建物の柱穴と想定した。V区内ではこのほかにピットを確認されなかったため、建物はIV区とV区間の調査区外に延びていったと思われる。

S D 1 (第37図)

I区中央に位置する北西—南東に方位をとる溝である。上幅約4m、底幅約1.5m、深さ約1.3mを測り、箱堀を思わせる大溝である。層12～17までは砂土が堆積していたことから、水流があったようである。ただし、検出範囲での溝底の高低差は見られなかった。堆積覆土からは4の青磁碗をはじめ、土師器皿片、越前焼・珠洲焼・瀬戸焼の陶片が出土している。東隣にはS X 1が接しており、土層の観察からS D 1の方が古いことが判明している。

S D 2 (第38図)

I区東端で確認した近世溝である。北東—南西に方位をとり、後述するS D 4とは同方向となる。調査区で確認できた長さは約9.8m、上幅2.8～3.2m、深さ60cm前後で、堆積土は砂や石礫土が錯綜するようにして埋まっていることから、水が流れていたと想定される。中からは近世を中心とした陶磁器片が多く埋まっていた。北側で確認したS D 3とは方位が違うが、同一遺構になると考えられる。

S D 3 (第38図)

I区東端で確認した近世溝である。北西—南東方向で、S D 2とは交差する。溝のほとんどは調査区外となるため全容は不明である。検出できた範囲では幅1.4m以上、深さ約80cmであるが、平成16年度第15次調査ではこの溝の延長と思われる遺構を確認することができた。第15次調査で検出した溝の幅は約5m、深さは最深部で約1mであった。

S D 4 (第38図)

I区東端で確認した近世溝である。北東—南西に方位をとり、S D 2とはほぼ同方向である。検出できた長さは約3.4m、溝の幅は約2m、深さ約80cmである。本溝とS D 2の間の幅約2mの地山面は約30cm削りとられていることから、両者の溝は同一遺構で、幅の広い大溝であったと考えられる。

S K 1 (第36図、第39図)

IV区自然河道の西際で確認した。北東—南西を長軸とする楕円形の形状をしている。長辺120cm、短辺100cm、深さ45cmを測る。覆土は褐色粘質土1層で、中から縄文土器片が出土した。

S A 1 (第34図)

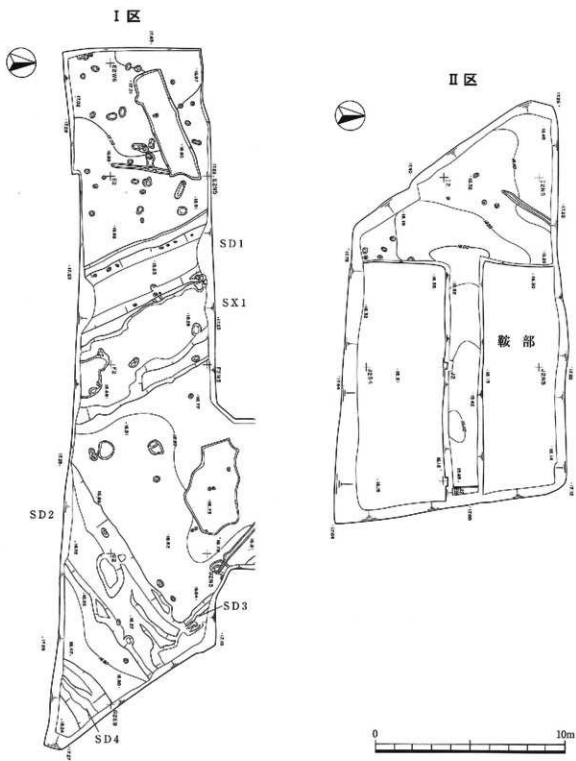
V区の中央を東西方向に並ぶ欄列である。ピットの数には11基、ピットとピットの間は100～170cmで、一部の穴には位置がずれる箇所があり、一直線のラインにはならない。穴は円形で、直径16～20cm、深さは5cm前後と浅い。遺物は出土していないが、覆土は灰色粘質土であることから、近世以降と考えられる。

S X 1 (第37図)

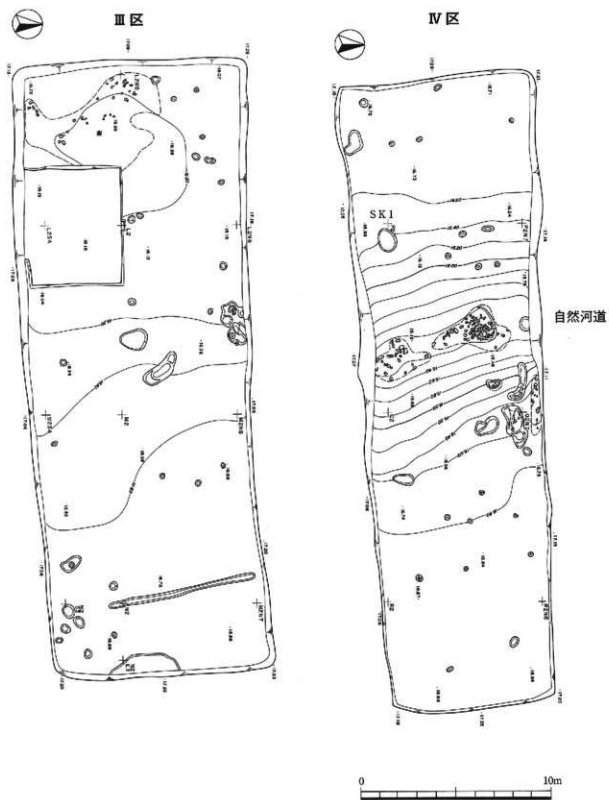
I区S D 1の東隣で確認した。不定形な土坑が重なり合うような形状をしている。東西長4m前後、深さ約60cm、北東側には幅約60cm、深さ15cmのテラスがある。土層断面からS D 1が埋った後に掘削されていることが判明した。堆積覆土の中には石礫土の含むものがあることから、流水していた溝の可能性もある。遺物は、3の青磁碗、5の土師器皿、越前焼等の陶片などが出土している。

自然河道 (第39図)

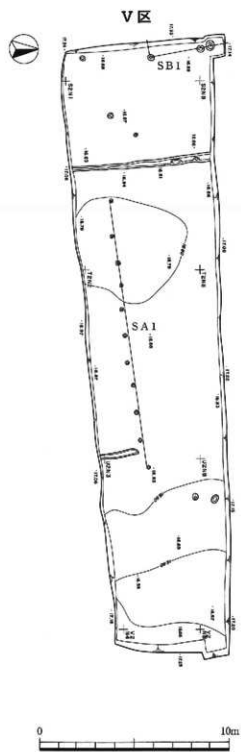
IV区で確認した南北に走る河の跡である。幅約11m、深さ約140cmを測り、中から縄文土器や打裂石斧が出土しており、この時期より河として機能していたようである。ただし、土の堆積状況から常水はしておらず、雨など降水の時のみ水が流れ、普段は湿地のような状況であったと思われる。なお、土層断面から中世段階には埋っていたようである。



第 32 图 I、II区遺構平面図 (S=1/200)



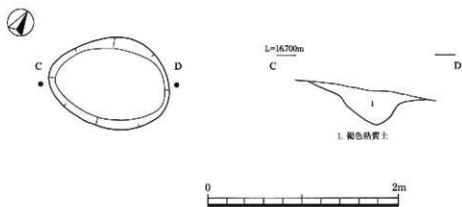
第 33 图 III、IV区遺構平面図 (S=1/200)



第34図 V区遺構平面図 (S=1/200)



第35図 SB1遺構図・土層断面図 (S=1/40)



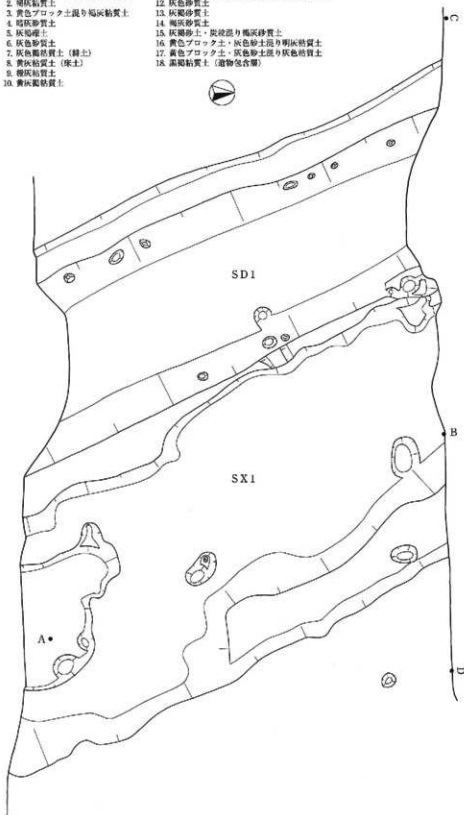
第36図 SK1遺構図・土層断面図 (S=1/40)

L=1500m

A

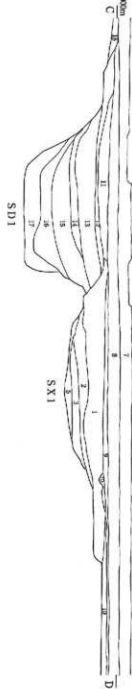


- | | |
|-------------------|-----------------------------|
| 1. 黄色ブロック土混り灰褐色粘土 | 11. 黒褐色ブロック土混り灰色粘質土 (遺物包含層) |
| 2. 褐色粘質土 | 12. 灰色砂質土 |
| 3. 黄色ブロック土混り褐色粘質土 | 13. 灰褐色砂質土 |
| 4. 褐色粘質土 | 14. 褐色粘質土 |
| 5. 灰褐色土 | 15. 灰褐色土・灰褐色泥炭砂質土 |
| 6. 灰色砂質土 | 16. 黄色ブロック土・灰色砂土混り褐色粘質土 |
| 7. 灰色粘質土 (緑土) | 17. 黄色ブロック土・灰色砂土混り灰色粘質土 |
| 8. 黄色粘質土 (緑土) | 18. 黒褐色粘質土 (遺物包含層) |
| 9. 褐色粘質土 | |
| 10. 黄色粘質土 | |



L=11000m

C



0 2m

第 37 図 SD1、SX1 遺構図・土層断面図 (S=1/60)

第3節 遺物（第40、41図）

遺物については、縄文時代、中世、近世のものが出土しているが、総体的には少ない。以下、実測した遺物の概要を述べる。

2は、縄文時代晩期前葉～中葉にあたる中層式の深鉢で、口頸部のみ残る。3と4は青磁碗片である。3は直縁寛播蓮弁紋碗、4は厚輪端反無紋碗である。5は土師器皿で、口縁部に灯芯油痕が残る。6～9は近世陶磁器である。10～16は打製石斧である。10は基部・刃部両者とも欠損している。復元すると大型品になると思われる。11と12は括れを有するCタイプである。流水があったSD2から出土していることから、全体的に摩耗している。13もCタイプである。一部で刃こぼれが認められるが、刃先は大凡残っている。括れ部で真二つに割れており、使用途中に折れた可能性がある。14～16は基部である。14と16は縁が直線的な直基、15は欠損しているが、本来は丸みを帯びた円基であったと思われる。17～22は磨石、23は中世の石臼残欠である。

第4節 小結

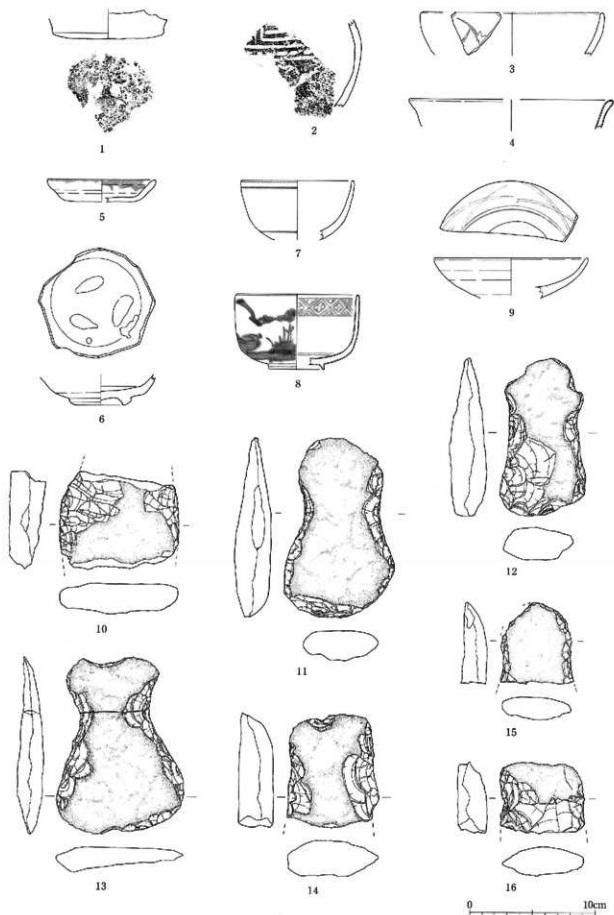
本調査区では縄文時代晩期及び中世、近世の時代を確認した。縄文時代は、IV区自然河道の袂で土器や石製品が集中して見つかった。しかし、遺構はSK1のみで、遺物の数量は極めて少ないことから、本地は食料採取などを目的とした一時的な生活拠点の場であったと推察する。

中世はI区でSD1とSX1を検出した。SD1は上幅約4m、底幅約1.5m、深さ約1.3mと極めて大きく、堆積土層から水流を有していたと思われ、耕作地の用水や土地間の境界溝として使用されていたと考えられる。時期は出土遺物から15世紀中頃と思われる。本調査区より北方には当該時期の集落跡を確認しており、SD1とは密接な関係にあったと推測する。

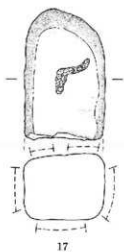
近世はI区で用水と思われるSD2～SD4、V区でSA1を確認した。I区で検出したSD2～SD4は、調査区外へと延びるため断定はできないが、すべて同一になる可能性をもつ。同一の溝と仮定するなら、SD2とSD4は本調査区際で90度北西方に進路を変えてSD3となって流水することになる。

参考文献

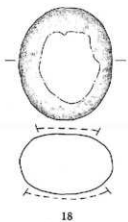
- 河合忍 安美樹 1999「石鏡雑考」『石川考古資料調査・集成事業報告書 農工具』 石川考古学研究会
水澤幸一 2009「中世後期の貿易陶磁器」『日本海流通の考古学 中世武士団の消費生活』 高志書院
藤田邦夫 1997「中世加賀国の土師器様相」『中近世の北陸—考古学が語る社会史—』 杜書房



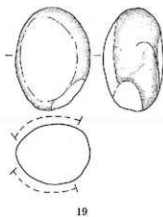
第40图 土器、陶磁器、石製品実測図 (S=1/3)



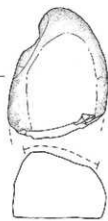
17



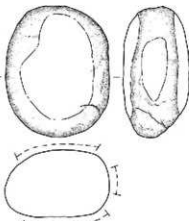
18



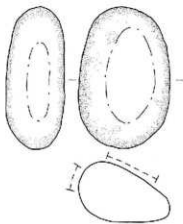
19



20



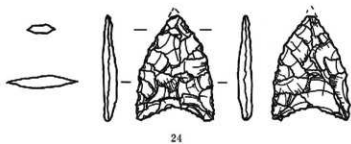
21



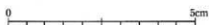
22



23



24



第41図 石製品実測図 (S=1/3、24のみS=1/1)

第4表 土器・陶磁器観察表

番号	調査区・gr		口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調(内)		調整(内)		残存率	備考	実測 番号
	遺構	器種				色調(外)	調整(外)					
1	Ⅳ区O-1 自然河道	縄文土器			8.8	灰青				底部1/3	黒色粒、赤色酸化粒、石英粒	5
		底部				程、にぶい黄橙						
2	Ⅲ区K-2 包含層	縄文土器				黒褐、黄褐、にぶい黄橙		沈滓、河点文		体部小片		13
		深鉢				灰オリーブ		施軸(青磁)				
3	Ⅰ区E-1-2 SX1	青磁	14.6			灰オリーブ		施軸(青磁)		口縁部1/12		23
		碗				灰オリーブ		施軸(青磁)				
4	Ⅰ区E-1-2 SD1	青磁	(16.4)			灰オリーブ		施軸(青磁)		口縁部1/18	茶色粒	14
		碗				灰オリーブ		施軸(青磁)				
5	Ⅰ区F-1 SX1	土師器	8.6	17.5	5.8	にぶい黄橙、浅黄橙、灰白		ココナテ		1/7	赤色酸化粒、口縁部内 外面灯芯油煤	12
		皿				にぶい黄橙、浅黄橙、灰白		ココナテ				
6	Ⅰ区F-G-1 SD2	唐津陶器			3.8	にぶい黄橙		施軸		底部完形	底部内面に砂目	1
		碗				施軸		施軸				
7	Ⅰ区G-2 SD2	肥前磁器	9.0			灰白		施軸(透明釉)		口縁部1/4		4
		染付碗				灰白		施軸(透明釉)				
8	Ⅰ区G-1 包含層	肥前磁器	9.1	5.95	4.4	灰白		施軸(透明釉)		口縁部1/6		19
		染付碗				灰白		施軸(透明釉)				
9	Ⅰ区G-1 包含層	肥前磁器	12.2			灰白、黄オリーブ灰、オリーブ灰		施軸(透明釉)		1/3	黒色粒微量、内面に輪 割ぎ	20
		染付皿				灰白、黄オリーブ灰、オリーブ灰		施軸(透明釉)				

第5表 石製品観察表

番号	gr		器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	質量 (g)	石材	備考	実測 番号
	遺構									
10	Ⅰ区E-1-2 SD1		打製石斧	(7.8)	(9.5)	(2.9)	(256)	流紋岩		26
11	Ⅰ区F-G-1 SD2		打製石斧	14.2	8.75	2.9	350	火山礫凝灰岩		3
12	Ⅰ区F-G-1 SD2		打製石斧	12.65	6.8	3.0	270	緑色凝灰岩		2
13	Ⅱ区E2 包含層		打製石斧	14.0	10.1	2.2	220	火山礫凝灰岩		6
14	Ⅱ区I-2 包含層		打製石斧	(9.0)	(7.3)	(2.8)	(260)	火山礫凝灰岩		7
15	Ⅱ区I-2 包含層		打製石斧	(6.5)	(5.8)	(2.1)	(100)	火山礫凝灰岩		25
16	Ⅳ区O-2 包含層		打製石斧	(5.7)	(6.7)	(2.3)	(120)	火山礫凝灰岩		24
17	Ⅰ区E-1-2 SD1		磨石	(10.3)	(6.5)	(5.4)	(595)	流紋岩		8
18	Ⅳ区O-2 自然河道		磨石	8.9	7.4	4.8	440	粗流紋灰岩		9
19	Ⅳ区O-2 自然河道		磨石	8.2	5.9	4.8	285	安山岩		11
20	Ⅰ区G-2 包含層		磨石	(10.4)	(7.9)	(5.7)	(580)	凝灰岩		18
21	Ⅲ区K-1 包含層		磨石	10.4	8.3	5.3	670	凝灰岩		21
22	Ⅳ区O-2 包含層		磨石	11.3	7.2	4.7	530	砂岩		16
23	Ⅰ区G-2 SD1		石臼	(12.2)	(7.1)	(5.1)	(470)	凝灰岩		15
24	Ⅳ区O-2 自然河道		石鏡	2.3	2.1	0.3	1.8	輝石安山岩		22

第6章 第21次(平成17年度)調査

第1節 調査の経過

第1項 調査に至る経緯

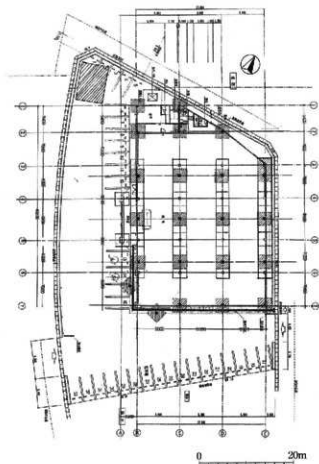
本発掘調査業務は、野々市市西北部土地区画整理地区73街区における開発事業を調査原因とする。平成17年7月、西北部土地区画整理組合(以下、西北部組合と呼称する。)から野々市町(当時)教育委員会(以下、町教委と呼称する。)に、本地区内において靴専門店施設建設の計画の打診があった。建設予定地は、全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、組合と町教委との間で協議を行った。協議をした結果、本開発地工事で埋蔵文化財に影響を及ぼす約570㎡分は発掘調査を実施し、それ以外の盛土造成など地下遺構に影響を及ぼさない箇所は、慎重な工事施工を実施してもらうこととした。施設建設予定地の埋蔵文化財発掘調査については、翌年の平成18年3月までに現地調査を完了することで合意した。

町教委は、平成17年8月3日付で、石川県教育委員会(以下、県教委と呼称する。)に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱いの届出を行い、同月同日に県教委から町教委にその通知が届いた。これを受けて、町教委は本開発予定地の埋蔵文化財発掘調査の作業に着手していった。

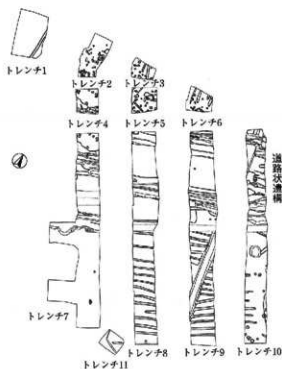
第2項 発掘作業の経過

現地調査は、10月18日より開始した。調査区の設定をした後、大型掘削機により遺構面までの土砂を掘削し、10月20日に完了した。10月21日からは、発掘作業員による人力作業が始まった。作業は10月31日まで行われたが、他所で緊急の埋蔵文化財発掘調査を実施しなくてはならないことが生じたため、西北部組合と協議し、本調査を一時中断することで合意した。本調査は翌年の平成18年3月6日より再開した。内容は、作業員による遺構掘削や調査員による記録作業及び、調査区内の遺構写真撮影などである。3月28日で現地調査の記録をすべて終え、3月29日に出土遺物の取上げ、発掘調査器材等の搬出作業を経て、現地調査を終えた。

出土品の整理は平成21年3月10日から開始した。整理作業の内容は出土品の洗浄、記名・分類・接合、実測で、同年4月10日に完了した。平成24年1月5日より、現地で行われた記録図や出土品実測図の製図、出土品の写真撮影、併行して原稿執筆や編集を実施して、3月30日までにこれらの作業を完了した。



第42図 工事計画図 (S=1/800)



第43図 調査区全体図 (S=1/600)

第2節 遺構

本調査区は幅約3m、長さ3～34mの計11箇所の調査区（トレンチ）を設定している。うち、調査区の西方にあたるトレンチ1とトレンチ7の南側、トレンチ11は遺構が希薄となる。また、トレンチ11より南方は、地山面が低くなる傾向となり谷地となって落ち込んでいくようである。トレンチ2～6については溝やピットを検出したが、特徴的な遺構は抽出できず、遺物の出土もほとんどなかった。主要な遺構が確認できたのはトレンチ7～10で、以下その概要を述べる。

道路状遺構（第45～49図）

トレンチ7～10で確認した。本調査区から北東約400m離れた平成15年度第9次調査で発見された古代北陸道跡と直線上に結ぶとはほぼ合致することから、本遺構も古代北陸道跡と推定する。後述するSD1とSD2は道路状遺構の側溝と考えられる。側溝と側溝の間の道路幅の長さはトレンチ7で3m以上、トレンチ8で約8.5m、トレンチ9で約8m、トレンチ10で約9.3mを測る。ただし、側溝SD1とSD2は掘り直されたようで、その際は道路面の幅も変わっていたようである。各トレンチでは、粘土と砂が混合した厚さ5～7cmの叩き締めが見られ、道路には硬化面が施されていたようである。ただし、トレンチ10においては遺存状態があまりよくなく、硬化面が認められない箇所がある。硬化面の認められない箇所は凹み状になっており、これが自然によるものか、敵の跡になるかはわからない。トレンチ10の道路面直上から3の上脚器有台塊底部が出土している。

SD1（第46、48図）

トレンチ8～10で検出した。北東-南西ラインをとり、前述した古代北陸道跡の北側側溝にあたる。掘り直しの痕跡が認められることから、道路の改修があったと思われる。トレンチ8では、調査区北端で検出された。溝の大部分は調査区外へと延びているため全体の詳細はわからない。確認できたのは南面掘り方の一部で、幅55cm、深さ15cmである。トレンチ9では、幅約150cm、深さは最深部で約65cmを測る。トレンチ10ではSD3と交差しており、全容を明らかにすることはできなかった。幅は約180cm、深さは最深部で約70cmである。

SD2（第45、46、48図）

トレンチ7～10で検出した古代北陸道跡の南側側溝にあたる。SD1と同様、掘り直しの痕跡が認められる。トレンチ7では、幅130～155cm、深さ50～90cmである。トレンチ8は140～170cm、深さ50～70cmを測る。溝内からは内黒の土師器破片が出土した。トレンチ9では幅100～120cm、深さ70～80cm、トレンチ10では幅140～180cm、深さ100cm前後を測る。なお、溝全体の幅は320～400cmとなる。

SD3（第46、48図）

トレンチ9と10で確認した。ほぼ真北に近い方位をとる南北溝である。幅130～150cm、深さ45～60cmを測る。溝底の堆積層が砂層であったことから流水していたようである。遺物は少量ながら8世紀後半～9世紀前半にかけての須恵器甕と坏の破片を確認している。この溝は切り合いによる前後関係などから、古代北陸道よりも古い時期に掘削され、古代北陸道築造の時には埋められたようである。

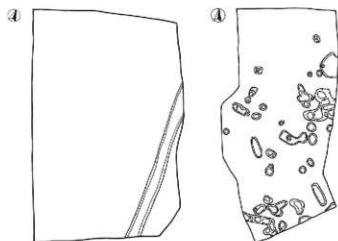
SK1（第44、48図）

トレンチ10の中央付近で検出した土坑である。一辺約180cmの隅丸方形をしており、深さは25cmを測る。暗灰褐粘質土を基本とした土がレンズ状に堆積し、中からは6の青磁破片1点と大量の焼土と炭片が見つかった。

畝溝（第46、48図）

トレンチ8～10の南側で確認された。トレンチ8では14条、トレンチ9では16条、トレンチ10では6条見つかった。遺物の出土はなかったが、古代北陸道跡の方位とほぼ同じなので、両遺構は同時期のものと考えられる。また、トレンチ7では畝溝が全く確認されず、トレンチ10では東方の終焉部となるため、溝の長さは20～25mになると考えられる。溝幅は25～40cm、深さは5～20cm、溝と溝の間は50～200cmを測るが、幅60cmが平均となる。

また、トレンチ3、6では南北に方位をもつ溝が数条確認されており、これらも畝溝になるかもしれない。

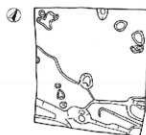


トレンチ1

トレンチ2



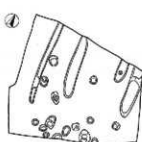
トレンチ3



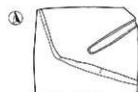
トレンチ4



トレンチ5



トレンチ6



トレンチ11

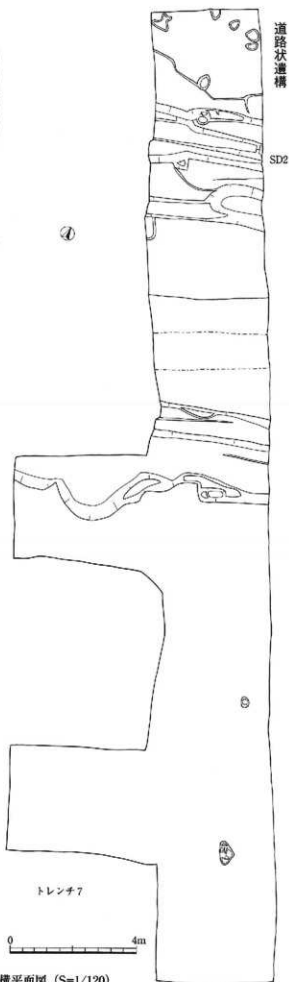
L=17900m

a ————— b

1. 褐色粘質土
2. 黄土・泥片混り硬状凝結質土
3. 貫通ブロック土混り硬状凝結質土

0 ————— 2m

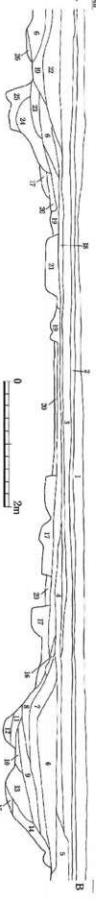
第44図 SK1土層断面図 (S=1/60)



トレンチ7

第45図 トレンチ1～7、11遺構平面図 (S=1/120)

L=1:500m

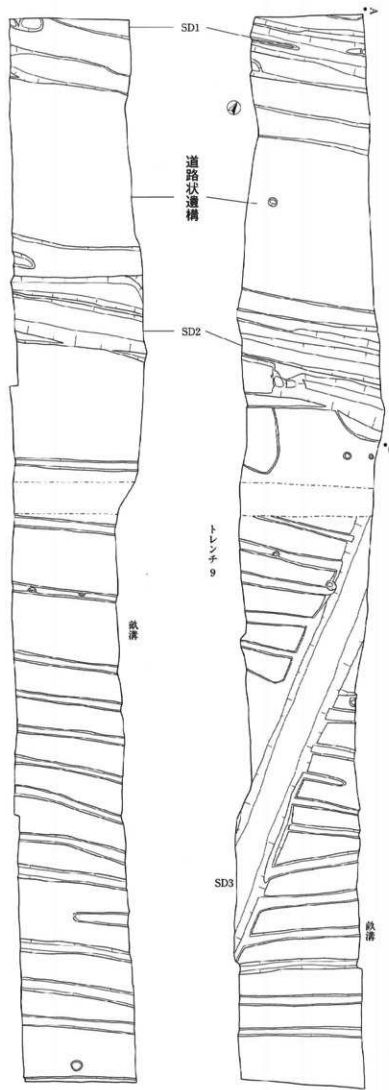


- 1 灰色粘質土 (層土)
- 2 灰褐色粘質土 (S土)
- 3 褐色粘質土 (田附土)
- 4 褐色粘質土 (田附土)
- 5 灰褐色粘質土 (田附土)
- 6 灰褐色粘質土 (田附土)
- 7 灰色粘質土 (田附土)
- 8 灰褐色粘質土 (田附土)
- 9 褐色粘質土 (田附土)
- 10 褐色粘質土 (田附土)
- 11 褐色粘質土 (田附土)
- 12 褐色粘質土 (田附土)
- 13 褐色粘質土 (田附土)
- 14 褐色粘質土 (田附土)
- 15 褐色粘質土 (田附土)
- 16 褐色粘質土 (田附土)
- 17 褐色粘質土 (田附土)
- 18 褐色粘質土 (田附土)
- 19 褐色粘質土 (田附土)
- 20 褐色粘質土 (田附土)
- 21 褐色粘質土 (田附土)
- 22 褐色粘質土 (田附土)
- 23 褐色粘質土 (田附土)
- 24 褐色粘質土 (田附土)
- 25 褐色粘質土 (田附土)
- 26 褐色粘質土 (田附土)

第47図 トレンチ9 道路状遺構土層断面図 (S=1/60)



第46図 トレンチ8、9 遺構平面図 (S=1/120)



①

②

道路状遺構

トレンチ9

トレンチ8

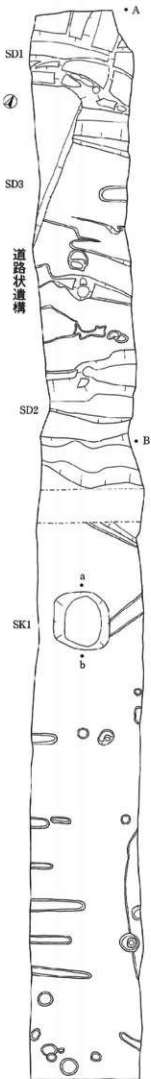
溝溝

溝溝

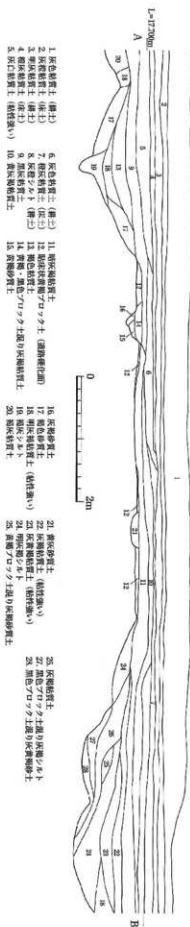
SD3

SD2

SD1



第48図 トレンチ10遺構平面図 (S=1/120)



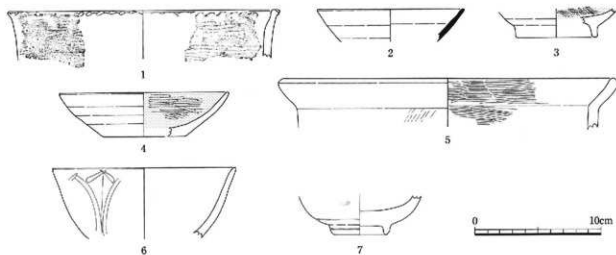
第49図 トレンチ10道路状遺構土層断面図 (S=1/100)

- | | | | | | |
|-----------------|-------------|-----------|-----------|------------------|-----------|
| 1 灰色粘質土 (層上) | 6 灰粘質土 (層上) | 11 黄褐色粘質土 | 16 灰褐色粘質土 | 21 黄灰砂質土 | 26 灰褐色粘質土 |
| 2 黄褐色粘質土 (層上) | 7 灰粘質土 (層上) | 12 黄褐色粘質土 | 17 灰褐色粘質土 | 22 灰褐色粘質土 (粘性強イ) | 27 灰褐色粘質土 |
| 3 黄褐色粘質土 (層上) | 8 灰粘質土 (層上) | 13 黄褐色粘質土 | 18 黄褐色粘質土 | 23 黄褐色粘質土 (粘性強イ) | 28 黄褐色粘質土 |
| 4 黄褐色粘質土 (層上) | 9 灰粘質土 (層上) | 14 黄褐色粘質土 | 19 黄褐色粘質土 | 24 黄褐色粘質土 (粘性強イ) | 29 黄褐色粘質土 |
| 5 灰褐色粘質土 (粘性強イ) | 10 黄褐色粘質土 | 15 黄褐色粘質土 | 20 灰褐色粘質土 | 25 黄褐色粘質土 | 30 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 31 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 32 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 33 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 34 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 35 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 36 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 37 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 38 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 39 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 40 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 41 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 42 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 43 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 44 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 45 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 46 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 47 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 48 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 49 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 50 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 51 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 52 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 53 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 54 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 55 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 56 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 57 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 58 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 59 黄褐色粘質土 |
| | | | | | 60 黄褐色粘質土 |

第3節 遺物 (第50図)

遺物については、縄文時代、古代、中世、近世の土器・陶磁器が出土しているが、数量は約150点程度と総体的に少ない。実測できた点数も7点程度であった。以下、実測した遺物の概要を述べる。

1は、縄文時代晩期中葉後半～後葉にあたる下野式の深鉢で、口縁部のみ残る。2はSD1で出土した須恵器坏端部である、8世紀後半～9世紀前半のものと思われる。3と4は内面黒色の土師器碗で、3は古代北陸道跡の道路面直上から、4は道路側溝にあたるSD2から出土した。3は9世紀後半、4は9世紀半ばと考えられる。5はSD3から見つかった8世紀後半の土師器甕の口縁部である。6はトレンチ10内SK1から見つかった青磁碗である。鎗蓮弁を施し、14世紀中頃と思われる。7は排土から見つかった近世後半の陶器碗である。



第50図 土器・陶磁器実測図 (S=1/3)

第6表 土器・陶磁器観察表

番号	選擧	種類 器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整		残存率	備考	実測 番号
						色調(内)	調整(内)			
1	包含層	縄文土器	21.3			色調(内)	調整(内)	口縁部 1/12	赤色粒 外面に煤付着	5
		深鉢				暗褐色	ナデ			
2	SD1	須恵器	11.6			色調(外)	調整(外)	口縁部 1/8	黒色粒、白色粒 内外面に重ね焼き痕	4
		坏				褐色、灰白	ナデ			
3	北陸道 路西直上	土師器			6.4	色調(内)	調整(内)	底部 1/6	内面黒色	6
		碗				褐色、内黒	ミガキ			
4	SD2	土師器	13.3	3.5	6.6	色調(内)	調整(内)	1.6	内面黒色	2
		碗				褐色、内黒	ナデ			
5	SD3	土師器	26.8			色調(内)	調整(内)	口縁部 1/12	赤色粒、石実質粒	3
		甕				明緑灰	ハケ			
6	SK1	青磁	14.4			色調(内)	調整(内)	口縁部 1/10	黒色粒 蓮弁文	7
		碗				明緑灰	ハケ、ナデ			
7	排土	陶胎染付			4.3	色調(内)	調整(内)	底部完形	陶胎染付	1
		碗				灰白	施輪			

第4節 小結

本調査区では古代北陸道跡を確認した。道路は約8～9mの幅があり、厚さ5～7cmの硬化面も検出することができた。南北両側には側溝を有しており、全国で展開されている古代官道とほぼ同様の様相を呈している。トレンチ9の土層断面図を観察すると、道路跡は大きく2時期存在することがわかった。当初は、層17や20の整地及び硬化面で構築した路面と、層23～25の北側側溝及び層10～15の南側側溝で構成されたようである。この時期の路面幅は約8mである。この後、層16や19による約10cmの硬化面のかさ上げがあり、その際両側側溝も掘り直されたようである。北側側溝は層6と19、南側側溝は層8と9で、深さは築造当初が65～90cmであったのに対して、改修後の側溝の深さは40cm前後と浅くなっている。路面幅は約8mと改修前とは大きな変化はない。いつ頃築造し、改修されたかは明確に判断できないが、道路側溝及び路面直上からの出土遺物から8世紀後半には築造され、一度大きな改修を経て、9世紀後半までは存続したと推定される。

参考文献

- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会

第7章 第22・33次(平成17・19年度)調査

第1節 調査の経過

第1項 調査に至る経緯

第22次調査区は、野々市市北西部土地区画整理地区45街区における家電量販店建設工事に伴う発掘調査である。平成17年6月、北西部土地区画整理組合(以下、組合という。)から野々市町(当時)教育委員会(以下、町教委という。)に対し、当該地において家電量販店建設の計画の打診があった。建設予定地は全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、双方でその取扱いについて協議を行った。加えて、この建物が第4次調査と同様に包蔵地に面して接しない、限られた基礎で立ち上がるフローティングともいべき構造で、建物の下を駐車場として利用する建築物であったため、並行して石川県教育委員会文化財課(以下、県教委という。)とも協議を進めた結果、14か所の基礎部分と地面から立ち上がる入口及び倉庫部分を調査対象とし、他は盛土造成工事として遺跡を保護することで合意した。調査面積は822㎡である。

町教委は、平成17年9月20日付教文第307号で県教委に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取扱いの届出を行い、同年9月20日に県教委から町教委にその通知が届いた。これを受けて、町教委は当該地における埋蔵文化財発掘調査の具体的作業に着手した。しかし、調査が終了した後に経緯は不明であるが当初の計画が中止となり、当該地は埋め戻して現状保存することとなった。

ところが、2年後の平成19年7月に、同じ街区で今度は温泉施設建設の計画が持ち上がった、第33次調査である。今回計画された建物は温泉施設を備えたものであり、全体に深く掘削することが確実であったため、建設予定地全体を調査対象とすることで合意した。調査に当たっては、効率を考慮して既に調査が終了している部分も再度表上を除去し、全体として遺構の状況を把握することとした。

町教委は、平成19年10月10日付教文第245号にて県教委に発掘調査報告を提出し、現地における調査の準備に入った。調査面積は調査済の部分も含め1,642㎡である。しかし、調査終了後にこの温泉施設の建設計画も白紙となり、現在は調査が終了した部分には大型衣料品販売店が建設され、すでに営業を開始している。

第2項 発掘作業の経過

第22次調査は、平成18年1月20日に着手した。計画図をもとに調査区を設定し、重機を用いて遺構上面までの表土を除去し、その後人力による掘削を開始した。調査にあたっては、1か所につき4名1組で担当してもらい、包含層掘り下げから遺構掘削までを一貫して行った。その後調査員が写真撮影を行い、記録を取った。その後、調査区全体で空中写真測量を行い、同年2月23日に現地での作業を終了した。

第33次調査は、平成19年10月23日に着手した。第22次調査終了後、盛土造成済であったため重機を用いて掘削した遺構面までの上量は相当なものであった。人力での作業は11月1日より着手しており、包含層掘り下げから遺構検出を行い、並行して遺構略測図を作成した。その後遺構の掘削及び記録作成、空中写真測量等を経て11月27日に現地における調査を終了した。

出土した遺物の整理作業は平成22年度に実施した。内容は、洗浄及び記名、選別・接合と実測図作成・トレースである。その後図版の編集や写真撮影、原稿執筆などを行い、すべての作業を平成24年3月30日までに完了した。

第2節 遺構

本調査区は三口市A遺跡推定値の中央西端にあたり、遺構密度はそれほど高くなかった。確認された主なものは、堅穴建物4棟とその他土坑と畝間溝状遺構、性格不明遺構などである。全体の概要については遺構全体図(第51図)を確認していただきたい。

S I 1 (第 52 図)

4.08 m × 2.88 m を測る略長方形の竪穴建物である。深さ 22cm を測り、かなり上面を削られているものと思われる。明確な柱穴やカマドの痕跡などは確認されていない。遺物は 4 点図示している。

S I 2 (第 53 図)

3.24 m × 2.92 m を測る略長方形の竪穴建物である。深さ 12cm 程度であり、同じく上面を削られているものと思われる。やはり明確な柱穴やカマドの痕跡は確認されていない。遺物は 3 点図示している。

S I 3 (第 53 図)

南北 2.44 m、東西推定で 2.2 m ほどの略長方形の竪穴建物である。深さは床面まで約 16cm を測り、東側を従前の建物基礎で破壊されている。柱穴やカマドの痕跡は確認されていない。遺物は 1 点図示している。

S I 4 (第 54 図)

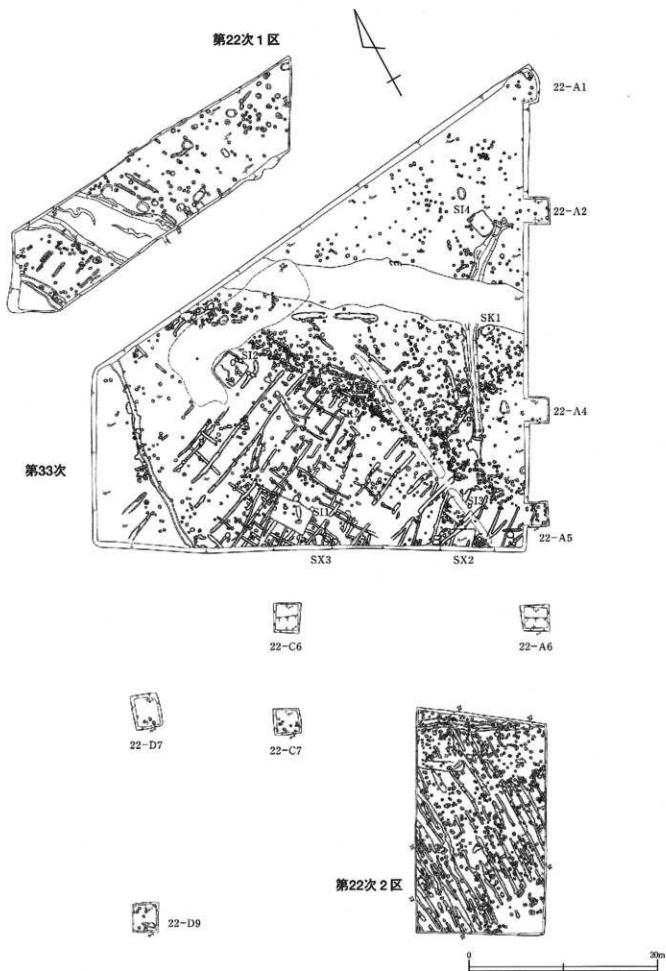
4.3 m × 2 m を測る略長方形の竪穴建物である。床面までの深さは約 11 であり、やはり柱穴やカマドの痕跡は確認されていない。図示可能な遺物は出土していない。

第 3 節 遺物 (第 57 ~ 59 図)

37 点を図示した。縄文土器を除けばほぼ 9 世紀後半代のもので占められており、周辺の土地利用の時期を示している。詳細は遺物観察表 (第 6 表) を参照いただきたい。

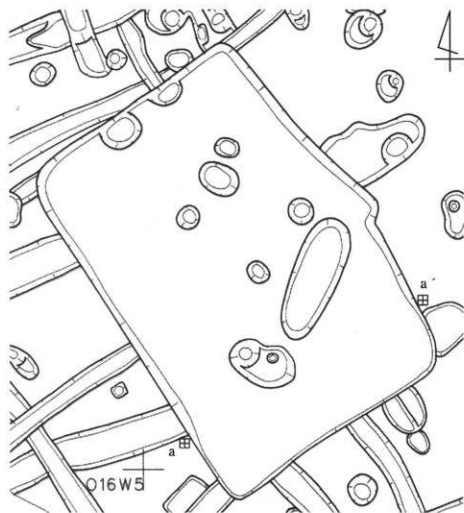
第 4 節 小結

本調査区は、多くの掘立柱建物を検出した第 18 次調査区や、大型の掘立柱建物を検出した第 19 次調査区に近い部分であったが、確認された主要な遺構には掘立柱建物は含まれていない。中央を南北に走る小穴は垣の跡と思われる、その西側に多くみられる畝間溝状の遺構は、後代にこの地が農地として利用されたことを示している。



第51图 遺構全体図 (S=1/400)

S11

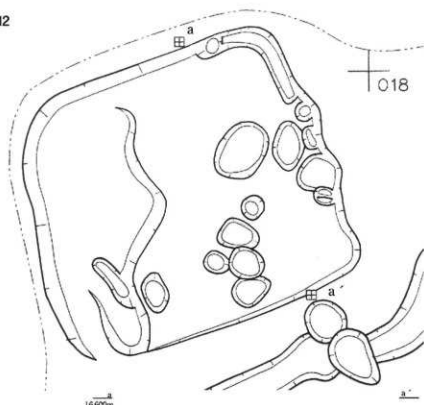


- 1 暗灰色粘質土
- 2 淡粉褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 淡黃色粘質土
- 5 淡黃色粘質土
- 6 淡灰褐色粘質土
- 7 暗灰色粘質土
- 8 淡綠灰褐色粘質土
- 9 灰褐色粘質土
- 10 淡黃色粘質土
- 11 灰褐色粘質土 (中々波い)



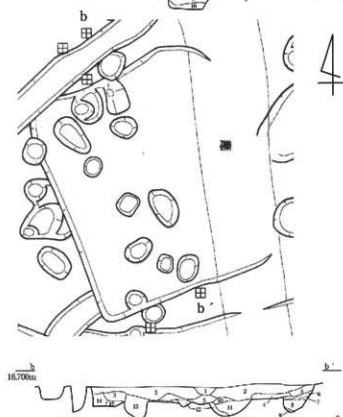
第 52 図 S11 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

S12



- 1 褐色粘質土
- 2 暗灰色粘質土
- 3 暗灰色粘質土 (やや硬い)
- 4 暗灰色粘質土
- 5 赤褐色粘質土 (粘土)
- 6 黄褐色粘質土
- 7 暗褐色粘質土
- 8 褐色粘質土
- 9 灰褐色粘質土
- 10 黄褐色粘質土

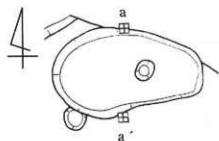
S13



- 1 褐色粘質土 (やや硬い)
- 2 暗褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 褐色粘質土 (やや硬い)
- 6 暗褐色粘質土 (やや硬い)
- 7 黄褐色粘質土
- 8 暗褐色粘質土
- 9 淡黄褐色粘質土
- 10 褐色粘質土 (やや硬い)
- 11 暗褐色粘質土
- 12 黄褐色粘質土
- 13 暗褐色粘質土
- 14 黄褐色粘質土
- 15 淡黄褐色粘質土

第53図 S12、S13遺構図・土層断面図 (S=1/40)

SK1

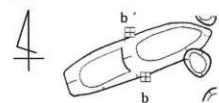


16.000m

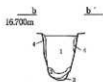


- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土 (黄色ブロッタ多)

SK2

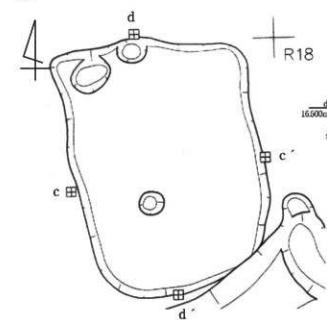


16.700m



- 1 暗褐色粘質土
- 2 赤粘質土
- 3 暗褐色粘質土 (黄色多)
- 4 暗褐色粘質土 (やや細かい)

SI4



R18

16.500m

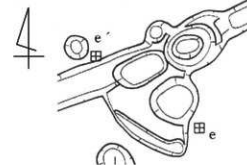


16.600m



- 1 暗褐色粘質土
- 2 赤黄粘質土 (暗褐色土シイ状)
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土

P39



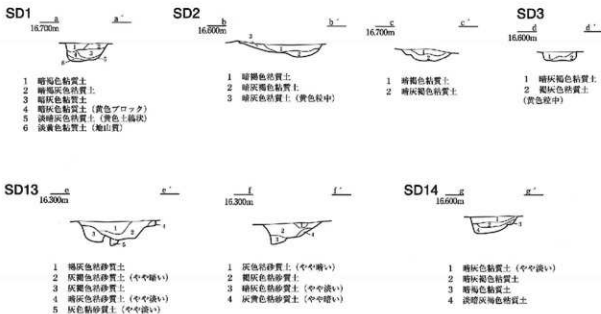
16.600m



- 1 淡緑褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 淡黄粘質土 (褐色土シイ状)
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土
- 6 暗褐色粘質土
- 7 暗褐色粘質土 (やや細かい)
- 8 暗褐色粘質土 (黄色土まだら)
- 9 暗褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土 (やや細かい)
- 11 淡黄粘質土

0 3m

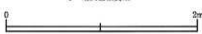
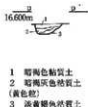
第54図 SK、SI、P遺構図・土層断面図 (S=1/40)



近代河道

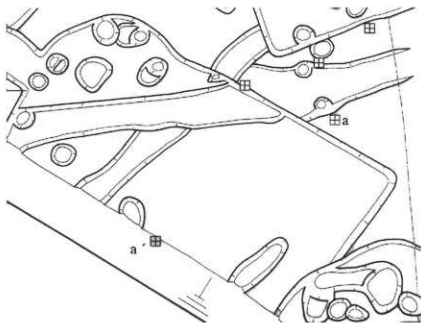


畝溝群



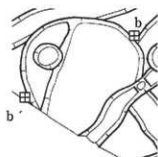
第 55 図 SD、近代河道、畝溝群上層断面図 (S=1/40)

SX2



- 1 灰色粘質土
- 2 暗灰色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗灰色粘質土 (黃色粒多)
- 5 暗褐色粘質土
- 6 暗灰色粘質土
- 7 暗灰色粘質土 (含中礫%)
- 8 暗褐色粘質土
- 9 褐色粘質土
- 10 黃褐色粘質土
- 11 暗褐色粘質土
- 12 黃褐色粘質土 (地山質)

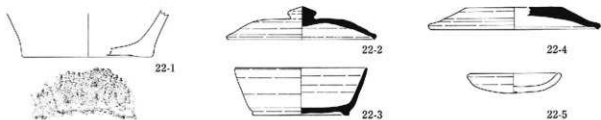
SX3



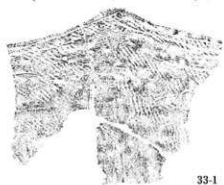
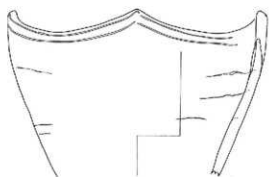
- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 淡黃色粘質土



第 56 图 SX 遺構圖・土層断面圖 (S=1/40)



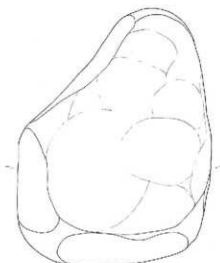
12区SD11
21区P6
31区a SD3
42区P11
51区a 東側包含層



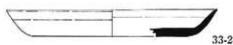
33-1



33-7



33-8



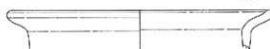
33-2



33-3



33-4



33-5



33-6

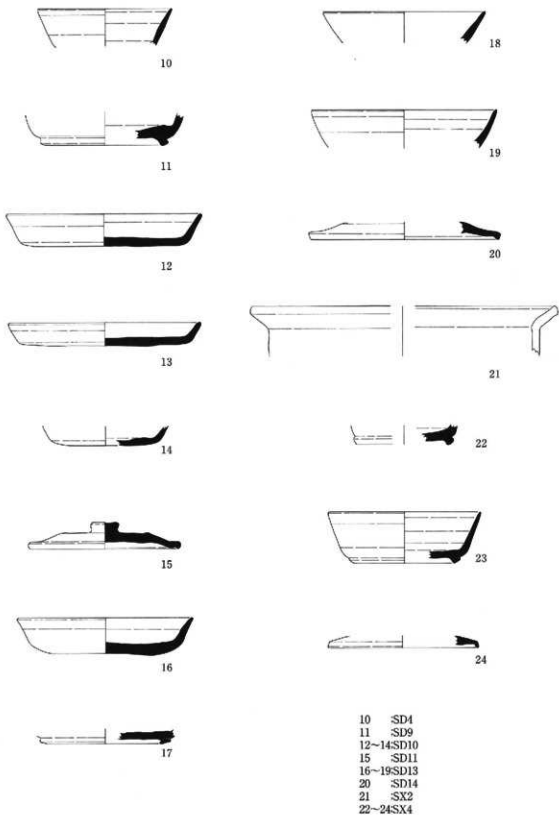


33-9

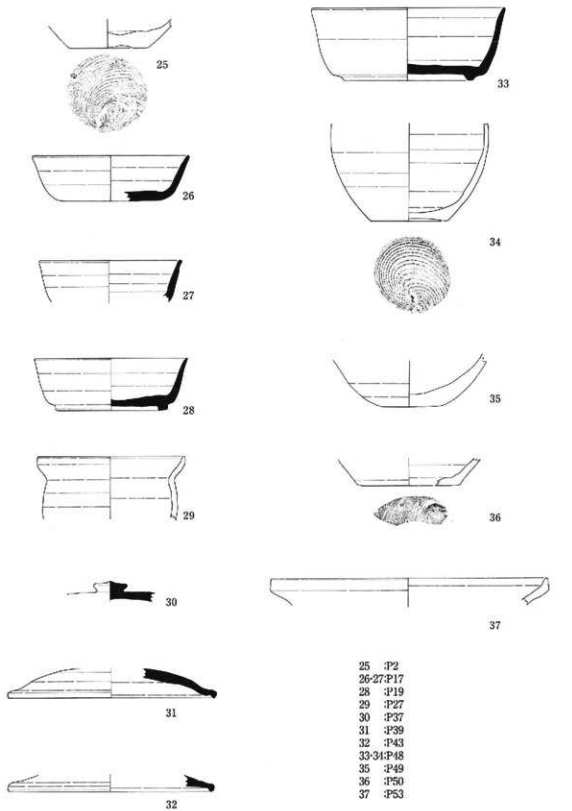
1 :P3
2~5:SI1
6 :SI2表面
7-8 :SI2内P54
9 :SI3

0 10cm

第57図 22次、33次土器・石製品実測図 (S=1/3、33-8はS=1/4)



第58图 33次土器実測図1 (S=1/3)



第 59 图 33 次土器実測図 2 (S=1/3)

第8章 第30次（平成19年度）調査

第1節 調査の経過

第1項 調査に至る経緯

本遺跡発掘調査業務は、北西部土地区画整理地区72街区における開発行為を調査原因とする。平成19年3月、野々市町北西部土地区画整理組合（以下、北西部組合と呼称する。）から野々市町教育委員会（以下、町教委と呼称する。）に、上記地区内における家電量販店の店舗増築の計画打診があった。北西部土地区画整理地区72街区は、全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、直ちに、組合と町教委との間で協議を行った。協議をした結果、本開発地の予定地である家電量販店の店舗増築、約1,150㎡分は、埋蔵文化財に影響を及ぼすと予測されることから、発掘調査を実施することで合意した。当該地における増築工事の着手については、平成19年6月から開始したいという計画であった。そのため、平成19年4月から調査を開始し、工事の実施に影響を及ぼさないように配慮することとした。

町教委は、同年3月20日付で、石川県教育委員会（以下、県教委と呼称する。）に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱いは提出し、同月同日に県教委から町教委に発掘調査実施の旨の通知が届いた。これを受けて、町教委は本開発予定地の埋蔵文化財発掘調査の作業に着手していった。

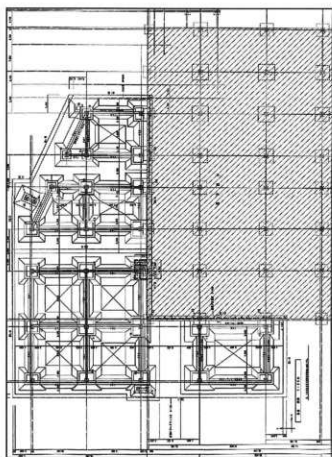
第2項 発掘作業の経過

平成19年4月2日、北西部組合は、本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査を野々市町に依頼した。同月同日、野々市町は埋蔵文化財発掘調査実施計画書を北西部組合に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。

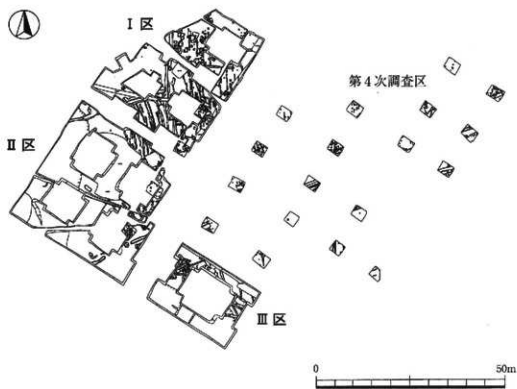
発掘調査は家電量販店舗の隣接地で行われるため、残土置場など諸々の制限があった。そのため、調査箇所を大きく2回に分けて実施することとし、Ⅱ及びⅢ区を前半に、Ⅰ区を後半に行った。前半のⅡ、Ⅲ区の調査は、5月7日より大型掘削機による表土の除去作業からはじめた。重機による掘削は遺構面手前までとしたが、家電販売店舗に取りつく水道管や電気ケーブルの配線が埋設しており、それらを回避しながらの作業であったため困難を極めた。また、当初の店舗造成工事などによる視認箇所も所々見られた。重機掘削は5月21日に完了した。人力による遺構確認作業は重機掘削作業と併行するように5月10日より開始した。作業は南東のⅢ区から始めた。遺構面の検出を実施した後、遺構の地点を明確にするため遺構略図を作成し、それと同時に遺構の掘削作業を行った。主要遺構や遺物が出土したものについては、記録をしてから完掘した。Ⅲ区作業完了後はすぐに隣地のⅡ区の作業にとりかかった。Ⅱ・Ⅲ区の遺構完掘後は、清掃作業を実施し、5月24日に空中写真測量及び個別遺構写真撮影して調査を終えた。Ⅱ・Ⅲ区調査終了後は直ちにⅠ区の発掘作業にとりかかった。6月4日より、Ⅰ区での重機による遺構面までの掘削作業を始めた。6月11日から人力による遺構の確認及び掘削を行い、同時併行で主要遺構の記録の作図を実施した。これらの作業が終わった後、清掃作業を行ってから、6月28日空中写真測量及び個別遺構写真撮影して、翌29日に調査をすべて終えた。

整理作業については、野々市市ふるさと歴史館内にある調査整理室で実施した。作業手順は、まず出土した遺物を水で洗浄し乾燥させ、乾燥した遺物に遺跡名や出土した地点などを注記した。注記後一部の遺物を実測し、この遺物実測図や現地で表記した遺構実測図を製図トレースした。これらの作業は、平成21年10月1日から平成22年1月29日まで行われた。

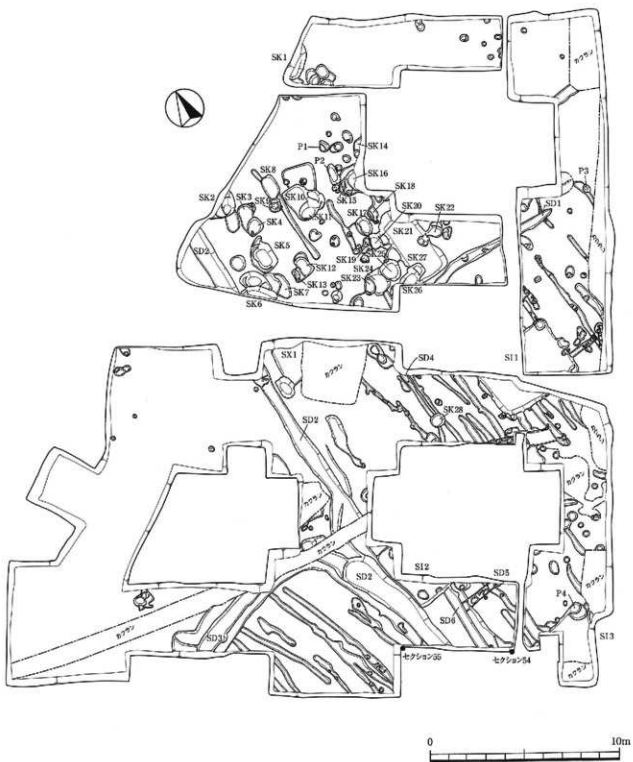
これらの作業完了後、平成24年2月8日から同年2月10日にかけて遺物の写真を撮影し、その後は、調査担当者が原稿執筆、図面・写真の編集を行い、報告書を刊行した。



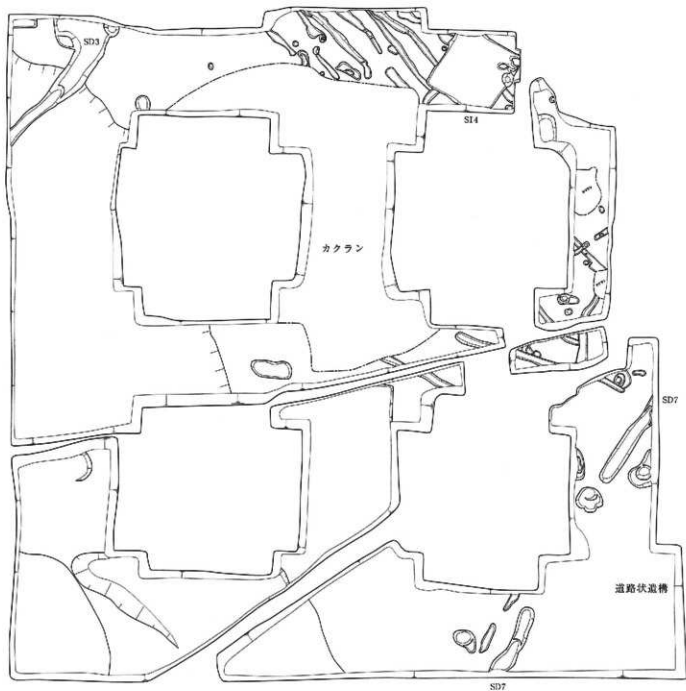
第 60 图 工事計画图 (S=1/1000)



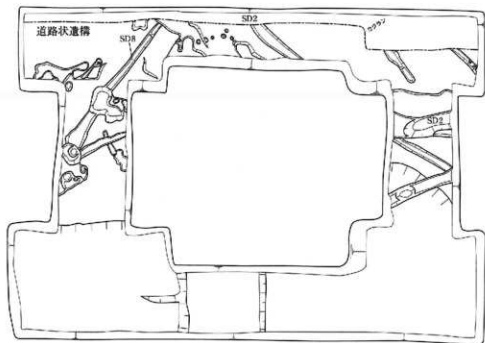
第 61 图 調査区全体图 (S=1/1000)



第 62 図 I 区遺構全体図 (S=1/200)



第 63 図 II 区遺構全体図 (S=1/200)



第 64 図 III区遺構全体図 (S=1/200)

第 2 節 層序

層序については、第 65 図の基本土層図を基に説明していく。
 1 は家電販売店舗造成に伴う盛土である。2 は店舗造成前まで行われていた灰色粘質土をベースとした水田耕作土である。
 3 の橙灰粘質土は上記耕作土の整地層にあたる。4 の暗灰褐粘質土は遺物包含層で、中世の遺構面にもあたる。その下の 5 黄褐粘質土は地山面である。



第 65 図 基本土層図

第3節 遺構

S I 1 (第66図)

I区西方に位置する。方位はN7°Wで、パイプ管埋設などから全体の3分の1は確認できていない。東西460cm、南北360cm、深さ50cm前後を測る。床には硬化面となる貼床を施す。カマドは検出できなかったが、一部焼土塊が散在していた。竪穴内部では柱穴を確認することができなかったが、北東角や東西面の壁溝際には柱穴に想定できそうな穴を確認することができた。これらの穴の大きさは長径30～60cm、深さは30～50cmを測る。

S I 2 (第67図)

I区南部で確認した。方位はN9°Wで、東半分は調査区外となる。東西210cm以上、南北370cm、深さ25～30cmを測る。床には硬化面となる貼床が施されていた。カマドは確認できなかった。竪穴内部には不定形な穴を検出したが、柱穴とは言い難い。

S I 3 (第67図)

I区南東隅で見つかった竪穴建物である。方位はN20°Wで、調査区の隅での発見のため北東部の一角でしか確認できていない。東西330cm、南北140cm以上、深さ40cm以上を測る。床には貼床が敷かれていた。カマドは確認していない。北東角には長辺64cm、短辺46cm、深さ54cmのP4を検出しており、柱穴の可能性をもつ。また、このP4からは、第33図12～14、16、17の土師器壺が出土している。

S I 4 (第68、69図)

II区北東隅で確認した。方位はN24°Wで、北と南の一部は調査区外となる。規模は一辺約380cmの方形プランで、深さは20cm前後である。床は全域に貼床を施している。柱穴は確認していない。東コーナーではカマドを確認した。カマドは袖部にあたる盛土の一部と焼土塊、土師器壺が散在しており、明瞭な構造を確認することはできなかった。人為的に破壊した可能性もある。カマド中央から竪穴外へ向けて細い溝状遺構が見られる。この溝の幅は約30cm、深さは約15cmで、煙道と考えられる。また、竪穴内のカマド脇には60×70cm、深さ35cmの小穴が存在する。

S K 1 (第69図)

I区北端で確認した楕円形の土坑である。北側半分は調査区外となり、全容は明らかでない。長辺196cm、短辺230cm以上、深さ125cmを測る。近世後半の陶磁器や近代初頭の瓦などが見つかっており、廃棄土坑と考えられる。

S K 2 (第69図)

I区中央部北端で確認した。隅丸長方形プランをしていると思われるが、北側半分は調査区外となるため全容はわからない。北西-南東を長辺とし145cm、短辺は125cmを測る。穴内には、3カ所のテラスが認められ、それぞれ地山面から15cm、22cm、47cmの深さをもつ。東端に最深部の穴が設けられており57cmを測る。覆土からは複数の人歯や人骨片がみつかった。

S K 3 (第70図)

I区SK2の南東隣に位置する。南北に長い隅丸長方形のプランをしている。南側はSK4が存在し、全体の様相はわからない。南北長135cm以上、東西長約70cm、深さ約30cmである。覆土からは炭塊や炭粒が多く見つかった。

S K 4 (第70図)

I区SK3の南に接する土坑である。やや歪ながら東西に長い隅丸長方形のプランをしている。東西長90cm、南北長75cm、深さ18cmを測る。

S K 5 (第70図)

I区SK4の南に位置する。南北に長い隅丸長方形プランの土坑である。南北長195cm、東西長100cm、深さ約70cmである。穴内の中央部、灰褐粘質土中から鉄鍋が見つかった。鉄鍋は完形品で伏せた状態で出土しており、鍋の中からは人頭部にあたる骨を検出した。

SK 6 (第70図)

I区SK 5の南西で見つかった土坑である。北西-南東に長い楕円形プランであるが、土坑全体の半分は調査区外となるため全容は不明である。長辺172cm、短辺54cm以上、深さ56cmを測る。

SK 7 (第70図)

I区SK 6に近接する土坑である。南北に長い不定形な形状をしており、SK 6とその間に別の楕円形土坑と重複している。土坑の大きさは南北長183cm、東西長100cm以上、内部には1段のテラスが認められる。深さは最深部で約30cm、テラスが14cmである。覆土から炭化粒と人骨片が多く見つかっている。

SK 8 (第70図)

I区SK 3、4の東隣にある土坑である。若干歪ながら南北に長い隅丸長方形をしている。南端にはSK 9が接している。南北長124cm、東西長78cm、深さ15cmを測る。覆土からは炭化物や焼土片、人骨片が多く発見されている。

SK 9 (第70図)

I区SK 8の南隣にある土坑である。北東-南西が長い歪な方形プランをしている。長辺74cm、短辺52cm、深さ20cmである。穴のほぼ中央、5cm程掘り下がったところから人頭大の石1個と人骨が見つかった。

SK 10 (第71図)

I区SK 8、9の南東方に隣接する。南北に長い隅丸長方形のプランをしているが、南端はSK 11が掘られており全貌は明らかでない。南北長195cm、東西長130cm、深さ約25cmを測る。覆土から人骨が出土している。

SK 11 (第71図)

I区SK 10の南に接する土坑である。東西が長い楕円形プランをしている。東西長120cm、南北長84cm、深さ87cmを測る。覆土には炭化粒が多く含んでいる。

SK 12 (第71図)

I区SK 5の南東側に位置する。南北に長い隅丸長方形プランの土坑である。南北長104cm、東西長62cm、深さ20cmを測る。覆土から炭化粒と人骨片を確認した。

SK 13 (第71図)

I区SK 12の西隣に接する。隅丸方形と思われるが、SK 12と切りあっていることから全体プランの様相はわからない。南北長68cm、東西長42cm以上、深さ13cmである。

SK 14 (第71図)

I区SK 15、16の北東隣に位置する。東側半分は調査区外となるため全体プランはわからない。長辺225cm、短辺62cm以上、深さ5cmである。南端には直径約80cm、深さ54cmの小穴があり、中から複数の人頭大の石が人為的に入れたような状態で見つかった。右については加工痕跡こそなかったが、一部に意図的に焼かれた跡が認められた。

SK 15 (第71図)

I区SK 11の東隣に位置する。後述するSK 16と接しているため、明確なプランを抽出することはできない。南北長98cm、東西長62cm以上、深さ23cmである。覆土内からは炭化粒を確認した。

SK 16 (第71図)

I区SK 15の東に接する状態で見つかった土坑である。東側ほとんどが調査区外となるため、全容はわからない。形状は隅丸方形と思われる。東西50cm以上、南北124cm、深さ49cmを測る。中からは炭化物のほか、人骨片や人歯が見つかった。

SK 17 (第71図)

I区SK 15の南隣に位置する。南北に長い楕円形プランをしている。南北長102cm、東西長88cm、穴内には5cmほどの深さをもったテラスが認められる。最深部は25cm、覆土内には炭化粒と人骨片

が見つかっている。

SK 18 (第71図)

I区SK 17の東隣で確認した南北に長い不定形な土坑である。東西長50cm、南北長92cm、深さ15cmを測り、中から炭化物と人骨片を検出した。

SK 19 (第71図)

I区SK 17の南西隅で認められた東西に長い不定形な土坑である。東西長94cm、南北長38cm、穴内には深さ15cmのテラスが認められる。最深部は30cmを測る。

SK 20 (第71図)

I区SK 19の東に隣接する。南北が長い楕円形プラン土坑である。東西長60cm、南北長88cm、深さ65cmを測る。

SK 21 (第72図)

I区SK 20、25、26、27の東隣に位置する南北に長い大型隅丸長方形の土坑である。東西長184cm、南北長420cm、深さ40～50cmを測る。覆土には大量の炭化材、炭化粒、人骨片が散在するように入っていた。また、土層断面から最低2回の掘り直しがあったと考えられる。なお、南西隅にはSK 26、27と切り合っているが、前後関係はわからなかった。

SK 22 (第72図)

I区SK 21の東隣にある。北西-南東が長い楕円形の形状をしている。長辺76cm、短辺60cm、深さ20cm前後を測る。覆土から炭化粒と人骨片を確認している。

SK 23 (第72図)

I区南端で確認した土坑である。南北に長い楕円形プランと思われるが、形状は若干歪である。東西長53cm、南北長90cm、深さ32cmを測る。

SK 24 (第72、73図)

I区SK 23の東隣に接する。本土坑の東方にはSK 25が接しているため、全体のプランはわからないが、隅丸方形と想定したい。東西長推定104cm、南北長125cm、深さ62cmを測る。土層断面からSK 23及びSK 25よりも古いことがわかった。覆土からは炭化粒及び人骨片を検出している。また、穴内の北東コーナー付近で第35図39の瀬戸焼犬目茶碗の完形品が出土した。犬目茶碗は底から7cm上の箇所まで裏返しの状態で見つかった。

SK 25 (第72、73図)

I区SK 24の東隣に位置する。隅丸の方形プランと考えられるが、上場のプランが丸いため円形にも見える。東西長100cm、南北長110cm、深さ60cm前後を測る。中からは炭化粒と人骨片のほかに、人頭大の自然石数個と第39図77の鉄鍋1点を検出した。鉄鍋は伏せられた状態で、底から20cmほど上から見つかった。石は鉄鍋の横を巡るような状態で出土した。また、土坑南端からは、第40図87～92の寛永通宝6点が重なって見ついている。出土地点は穴底から4cmほど上がったところである。

SK 26 (第72、73図)

I区SK 25の南隣にある土坑である。東西に長い隅丸長方形のプランと思われるが、南西側が調査区外となるため全容はわからない。東西長88cm以上、南北長推定80cm、深さ83cmを測る。覆土には炭化粒と人骨片、複数の人頭大の自然石が見つかったほかに、第35図38の瀬戸焼丸碗と第37図67の石製行火の完形品を確認することができた。両遺物は穴底近くから出土しており、行火は開口部を上の方に瀬戸焼丸碗は伏せた状態で見つかった。

SK 27 (第72図)

I区SK 21、26と接するようにして見つかった土坑である。隅丸方形のプランと考えられるが、上記土坑と切り合っているため詳細はわからない。なお、両遺構との前後関係も不明である。東西長80cm、南北長73cm、深さ76cmを測る。覆土から炭化粒と人骨片を確認している。

SK 28 (第73図)

Ⅱ区北端、S I 1の西側で確認した土坑である。東西に長い隅丸長方形プランであるが、楕円形にも見える。東西長75cm、南北長65cm、深さ48cmを測る。

SD 1 (第62図)

I区中央部からやや北西寄りて確認した東西方向の溝である。前述した上抗群の南端に位置する。長さ740cm、最大幅60cm、深さ5～10cmである。

SD 2 (第62、64、73図)

I区のほぼ真ん中を南北に縦断し、Ⅲ区の東側でも確認できた溝である。長さは約76m、溝幅はI区が65～100cm、Ⅲ区が45～65cmであるが、I区のSD 3と交差する箇所では幅180cmと大きくなる。深さはI区が20～30cm、Ⅲ区が10～20cmで、SD 3と交差する付近では50～70cmと深くなる。近世以降の陶磁器が大量に出土した。

SD 3 (第62、63図)

I区中央のSD 2から西方に枝分かれし、Ⅱ区北西端でも確認できた東西溝である。全長24m、幅は60～90cm、深さ15～35cm、SD 2よりは少量であるが、近世陶磁器が出土している。

SD 4 (第62図)

I区東側とⅡ区北東側で検出した畝溝の中のひとつである。畝溝はほぼ真北に近い方位をとり、時期は古代と考えられ、土層断面から前述した竪穴建物跡よりも古いことがわかった。SD 4はI区のほぼ中央に位置する。長さは440cm、幅は20cm前後、深さは6～11cmである。

SD 5 (第62図)

I区東南部で確認した東西溝である。長さは110cm、幅は40cm前後、深さ5～7cmで、直径30cm、深さ10cm前後の小ピット3基が溝底で検出した。

SD 6 (第62図)

I区東南部で確認した南北溝である。前述したSD 5とは切り合っており、SD 6の方が新しい。長さは380cm、幅約50cm、深さ7～13cmを測る。

SD 7 (第63図)

Ⅱ区南東隅で確認した。北東-南西に方位をとり、南西端部は後世に大きく削平を受けていたことから、一部途切れた状態となっている。長さ約500cm、幅約78cm、深さ27～44cmを測る。

SD 8 (第64図)

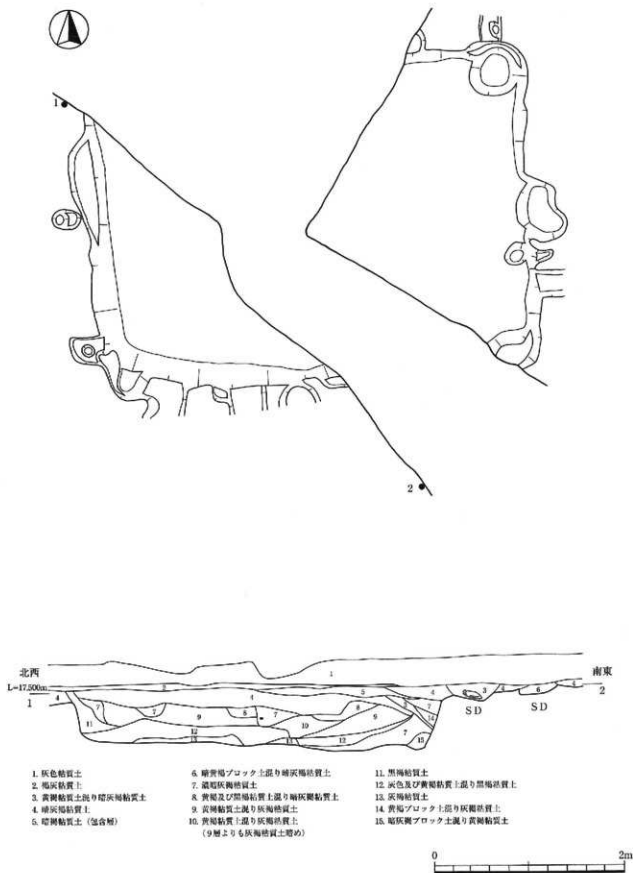
Ⅲ区北西隅で見つかった溝である。後世に掘られた複数の穴に切られており全容は明らかでない。長さ約800cm、幅24～64cm、深さ25～35cmである。前述したSD 7とSD 8は古代北陸道跡の溝にあたる。

道路状遺構 (第63、64図)

Ⅱ区南東隅とⅢ区北西隅にまたがる状態で確認された。本調査区の北東方で行われた第9次調査、南西方で実施された第5次、第21次調査で見つかった古代北陸道跡と規模、方位などが一致することから、本遺構も古代北陸道跡と推定した。前述のSD 7は路面北側、SD 8は路面南側の側溝にあたる。路面の幅は約10.5m、Ⅲ区の一部から貼床状の硬化面を検出することができたが、Ⅱ区は後世の削平を受けており、道路硬化面は確認できなかった。

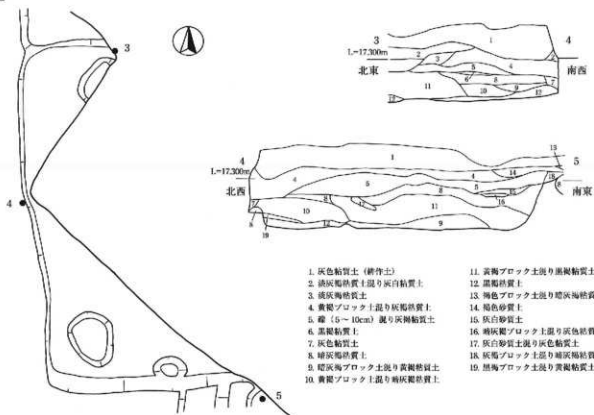
SX 1 (第62図)

I区中央部やや北寄りに位置し、SD 2に隣接する。本遺構の南西端には土坑が存在し、東側は後世の掘削、北側は調査区外となり、全体のプランは方形の竪穴状遺構のようになるかもしれないが判然としない。南北長223cm以上、東西長90cm以上、深さ15cm前後である。中から第38図74の黒碁石が見つかった。



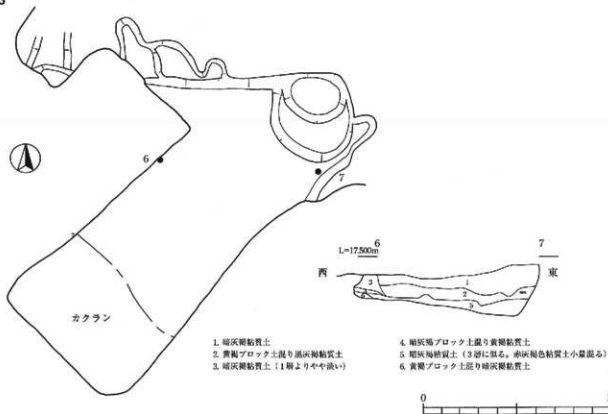
第 66 図 SI1 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

SI2

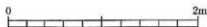


- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1. 灰色粘質土 (練作土) | 11. 黄褐色ブロック土混り黒褐色粘質土 |
| 2. 赤褐色粘質土混り灰白粘質土 | 12. 黒褐色粘質土 |
| 3. 暗灰色粘質土 | 13. 褐色ブロック土混り暗灰色粘質土 |
| 4. 黄褐色ブロック土混り灰褐色粘質土 | 14. 暗色砂質土 |
| 5. 礫 (5-10cm) 混り灰褐色粘質土 | 15. 灰白砂質土 |
| 6. 黒褐色粘質土 | 16. 暗褐色ブロック土混り灰色粘質土 |
| 7. 灰色粘質土 | 17. 灰白粘質土混り灰色粘質土 |
| 8. 暗褐色粘質土 | 18. 灰色ブロック土混り暗褐色粘質土 |
| 9. 暗褐色ブロック土混り黄褐色粘質土 | 19. 黒褐色ブロック土混り黄褐色粘質土 |
| 10. 黄褐色ブロック土混り暗褐色粘質土 | |

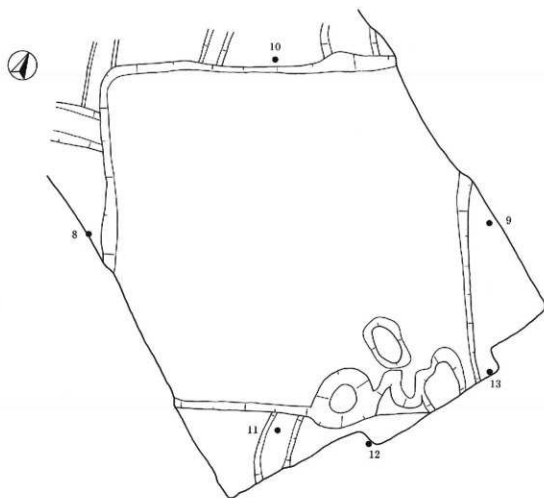
SI3



- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1. 暗褐色粘質土 | 4. 暗褐色ブロック土混り黄褐色粘質土 |
| 2. 黄褐色ブロック土混り黒褐色粘質土 | 5. 暗褐色粘質土 (3層に亘る。赤褐色粘質土少量混る) |
| 3. 暗褐色粘質土 (1層よりやや浅い) | 6. 黄褐色ブロック土混り暗褐色粘質土 |



第 67 図 SI2、SI3 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

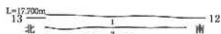
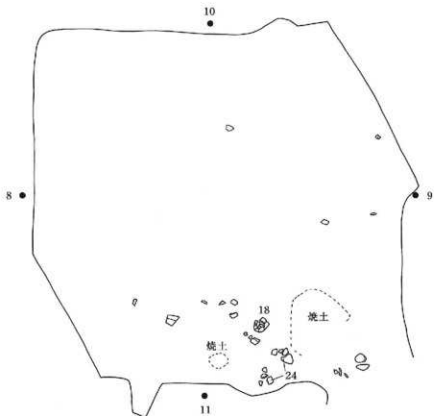


1. 暗灰色粘土
2. 灰褐色ロック土混り灰褐色質土
3. 灰褐色質土
4. 黒褐色質土



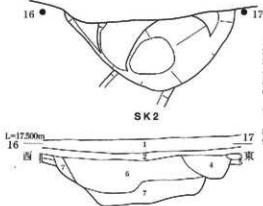
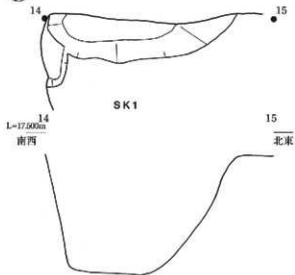
第 68 図 SI4 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

S14



1. 粘土、灰色粘質土
2. 包含物、暗灰色粘質土
3. 暗灰色粘質土 (2層よりも少し深い)
4. 黄褐色ブロック土混り暗灰色粘質土 (カマド覆土)
5. 黄褐色ブロック土混り灰褐色粘質土 (カマド覆土)
6. 炭化物混り赤褐色粘質土 (カマド炉道部)
7. 暗赤褐色粘質土 (カマド炉道部)

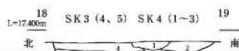
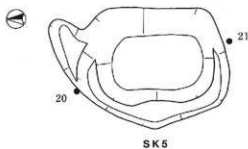
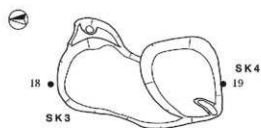
S14 カマド



1. 灰色粘質土
2. 灰色粘質土混り暗灰色粘質土
3. 褐色粘質土
4. 炭、黄褐色土混り黒褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土
6. 褐色、黄褐色ブロック土混り暗褐色粘質土
7. 褐色、黄褐色ブロック土混り暗褐色粘質土
8. 暗褐色粘質土混り暗褐色粘質土
9. 暗褐色粘質土混り暗褐色粘質土 (5層に於ける)

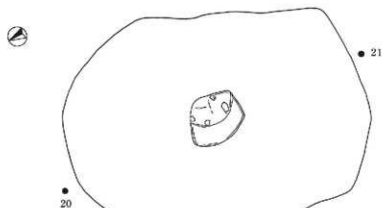


第 69 図 S14、SK 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

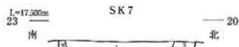
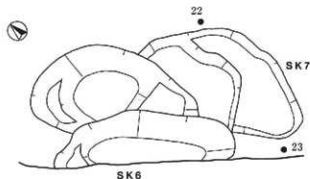


1. 黄褐色ブロック土混り灰褐色粘質土
2. 炭・黄褐色ブロック土混り灰褐色粘質土
3. 黄褐色土混り淡灰褐色粘質土
4. 炭・黄褐色ブロック土混り黒褐色粘質土
5. 炭塊・炭褐色ブロック土混り黒褐色粘質土 (4層よりも黄褐色ブロック土が多い)

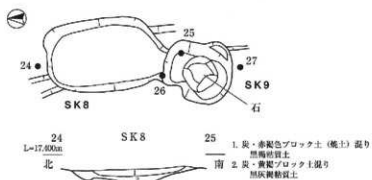
1. 炭混り灰褐色粘質土
2. 黄褐色ブロック土混り灰褐色粘質土
3. 淡灰褐色粘質土
4. 灰褐色粘質土
5. 黄褐色粘質土混り灰褐色粘質土



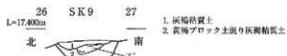
SK5 鉄鍋出土状況図



1. 炭混り灰褐色粘質土
2. 灰褐色ブロック土混り黄褐色粘質土
3. 炭・黄褐色ブロック土混り灰褐色粘質土



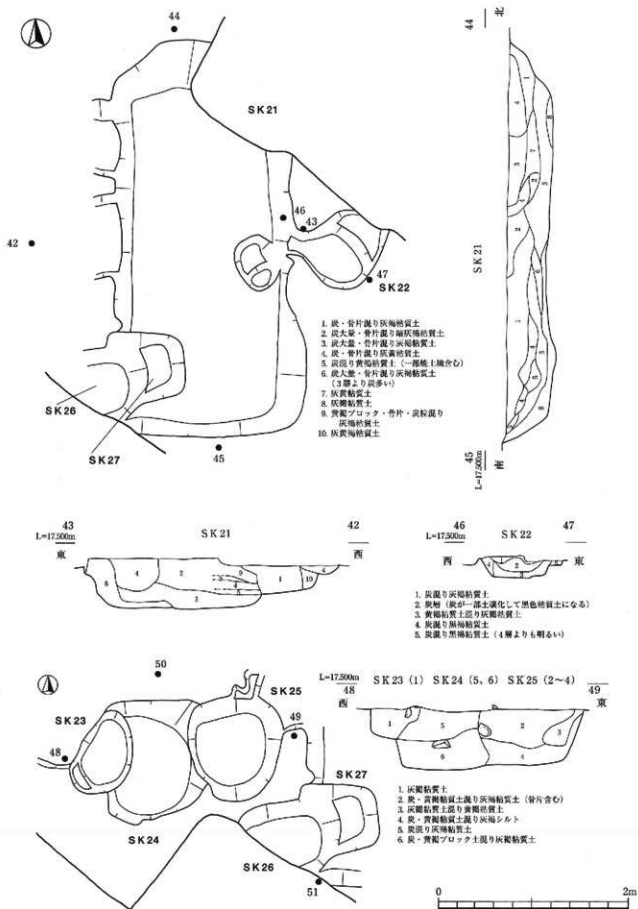
1. 炭・赤褐色ブロック土 (焼土) 混り 黒褐色粘質土
2. 炭・黄褐色ブロック土混り 黒灰褐色粘質土



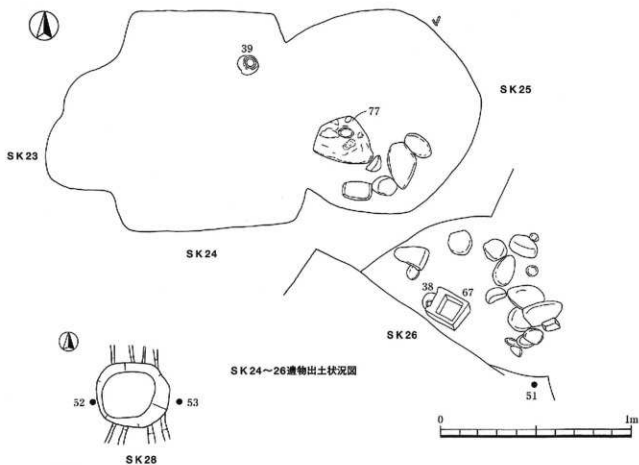
1. 灰褐色粘質土
2. 黄褐色ブロック土混り灰褐色粘質土



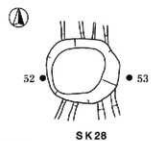
第70図 SK 遺構図・土層断面図1 (S=1/20、SK5 鉄鍋出土状況図のみ S=1/40)



第 72 図 SK 遺構図・土層断面図 3 (S=1/40)



SK 24~26遺物出土状況図



SK 28

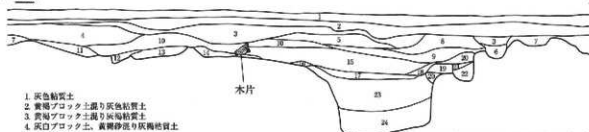
L=17.500m



1. 黄褐色ブロック土盛り暗灰褐色粘質土
2. 黄褐色ブロック土盛り灰褐色粘質土
3. 灰褐色粘質土
4. 暗灰褐色粘質土

南東
54
L=17.400m

北西
55



SD 2 (第61図I区遺構全体図参照)

1. 灰色粘質土
2. 黄褐色ブロック土盛り灰色粘質土
3. 黄褐色ブロック土盛り灰褐色粘質土
4. 灰白ブロック土、黄褐色砂盛り灰褐色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 暗灰褐色粘質土
7. 暗灰褐色粘質土
8. 暗灰褐色ブロック土盛り灰色粘質土
9. 灰白砂盛り灰褐色粘質土
10. 暗灰褐色粘質土
11. 灰褐色粘質土盛り灰白砂質土
12. 黄褐色粘質土
13. 暗灰褐色粘質土 (粘性強い)
14. 暗灰白ブロック土盛り灰褐色粘質土
15. 灰白ブロック土盛り灰褐色粘質土

16. 竈 (5cm 丈) 盛り暗黄褐色砂土
17. 竈 (1cm 丈)・暗黄褐色砂盛り灰色粘質土
18. 暗黄褐色砂土盛り暗灰褐色粘質土
19. 暗灰白ブロック土盛り灰白粘質土
20. 灰色粘土 (1層よりも厚く、粘性強い)
21. 灰色白ブロック土盛り灰白粘質土
22. 暗黄褐色砂土盛り灰色粘質土
23. 灰白・暗黄褐色砂土盛り灰色粘質土
24. 暗灰シルト

第73図 SK、SD 遺構図・土層断面図 (S=1/20、SK 遺物出土状況図のみ S=1/40)

第4節 遺物(第74～81図)

1～35は古代土器である。1～5はS I 1、6～17はS I 3、18～24はS I 4、25はS D 3、26はS D 6、27～29は古代北陸道の側溝S D 8、30～32はP 1、33～35は包含層からの出土である。

1は高台を有する小型の坏である。2は須恵器甕の口縁部で、上下2段の波状紋を施している。3～5は土師器甕である。4は図面上より若干外側へ傾く。3と5は焼成や胎土から同一個体になるかもしれない。6は土師器甕である。外面赤彩・内面黒色である。7と8は無台坏で、両者とも焼成が甘い。9は高台を呈する大型の坏である。12は外底部に回転糸切痕を有する甕の底部である。内面の底部には煤が付着している。13～17は土師器甕の口縁部である。13の内面には煤が付着している。12と17は焼成や胎土から同一個体になるかもしれない。なお、12～14、16、17は堅穴内に掘られたP 4からの出土である。18～20は坏で、18は高台を有する。21と22は短頸甕で同一個体になる。21の体部上方には窯焼成のときに生じた降灰による自然軸がみられる。23と24は土師器甕である。長頸甕24の外面部部下半には煤が多く付着している。古代北陸道の側溝から見つかった28は土師器甕の底部である。外面に赤彩痕跡の可能性があるが明瞭ではない。29の須恵器甕は図面上より若干寝た状態になると思われる。

36と38～40は中世の遺物である。36は京都系の土師器皿である。38は瀬戸灰釉丸碗である。釉薬は高台付近以外全面に施釉している。体部には、印花原体Aを連続して押し、蓮弁文風になっている。39は瀬戸天目茶碗である。体部の形状は、下方が丸味を帯び上方にかけて立ち上がりが強くなる。口縁端部は短く折り返され玉縁状になる。高台周辺には濃い紫色したサビ軸が施され、高台内の削り込みは浅い輪高台である。38と39は瀬戸大窯I期と考えられる。40は内湾する白磁皿である。41～62は近世陶磁器である。ほとんどはS D 2・3からの出土で、江戸後期を主体とする。

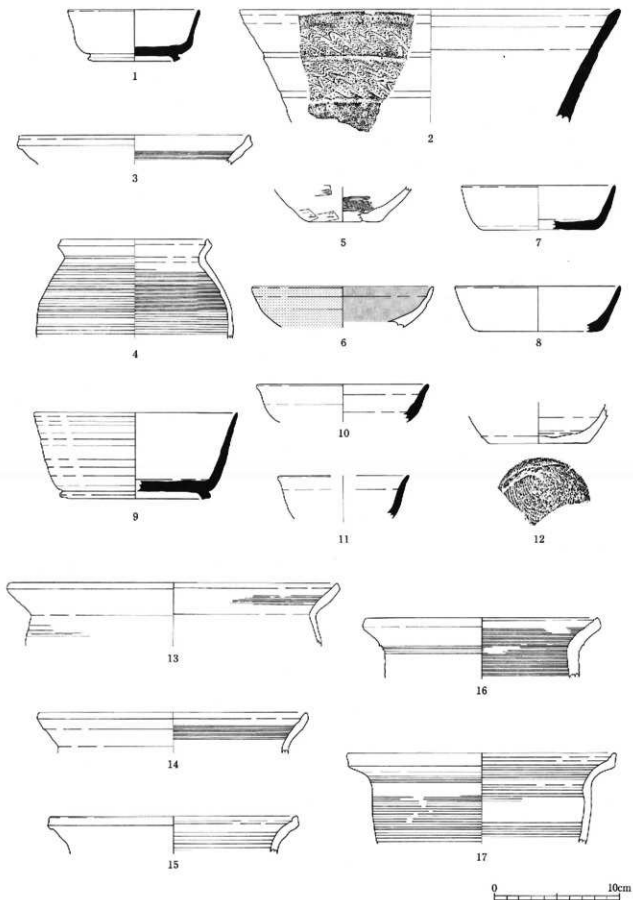
63と64は縄文土器である。63は浅鉢の破片で、縄文晩期前葉の御経塚式にあたる。64は縄文後期後葉にあたる八日市新形式の浅鉢口縁部である。

65～74は石製品である。65と66は打製石斧である。65は長軸中ほど括れるタイプで、基部が凹基、刃部は円刃である。あまり使用していなかったようで、刃先はよく残っている。66は基部から刃部に向かって幅が広がるタイプで、基部は凹基である。刃部は途中で欠損しており分類はできない。67は行火の完形品である。前側面にやや上向きの口を四角状に大きく開いた構造をしている。石材は軽石凝灰岩で、加賀の産地と考えられる。68はS I 4のカマド内に備え付けられていた石である。四角柱のような形状をし、火受けしたため全体に煤が付き、脆くなっている。69～73は自然石であるが、全体に煤が付着している。69～72はS K 14内のピットから大量に見つかった自然石の一部である。73はP 2から単独に出土した。74は黒蒸石である。両面とも細かく磨いている。

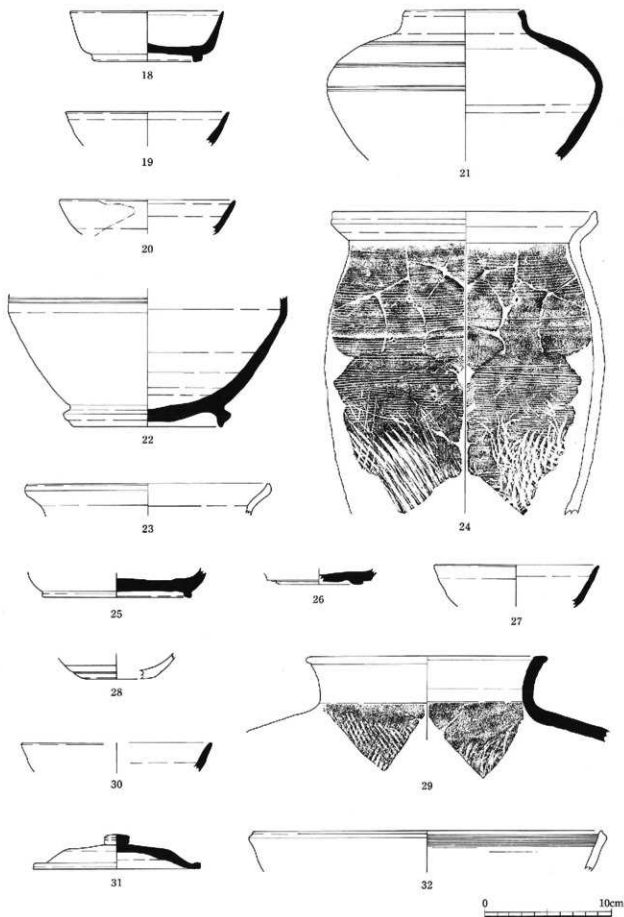
75～86は鉄製品である。75～77は鍋である。いずれもサビの付着が著しく、当時の製品の状態で復元することはできなかった。76は12世紀から見ることができるとされる湯釜の系譜を引くAタイプである。底部から体部にかけて湾曲しながら立ち上がり、口縁部で外側に屈曲する。ただし、屈曲の度合いはそれほど強くはない。口縁部の長さは胴部よりも長い特徴をもち、中世末～近世初めの時期と考えられる。75と77は、口縁部に対向する吊耳をもち、底部に短い三足が付くBタイプにあたる。75は、図上では足がない状態で書かれているが、散在したパーツの中に足の一部を確認している。77の口縁部の一部には、曲がってしまった片口が付いている。図面では、両者とも断面を厚く表記しているが、付着したサビの分を含んでおり、本来はもっと薄く鑄造したと思われる。78は小刀の刃先になると考えられる。79～86は釘である。79と86はU字型に折曲がっている。

87～93は銅製銭貨である。87～92はS K 25からまとまって出土した。いずれも寛永通宝で、92のみ背面に「文」が見られる。93はS D 2から出土した。S D 2は水流があったと思われる、そのため激しく磨耗し、文字の判読はできない。

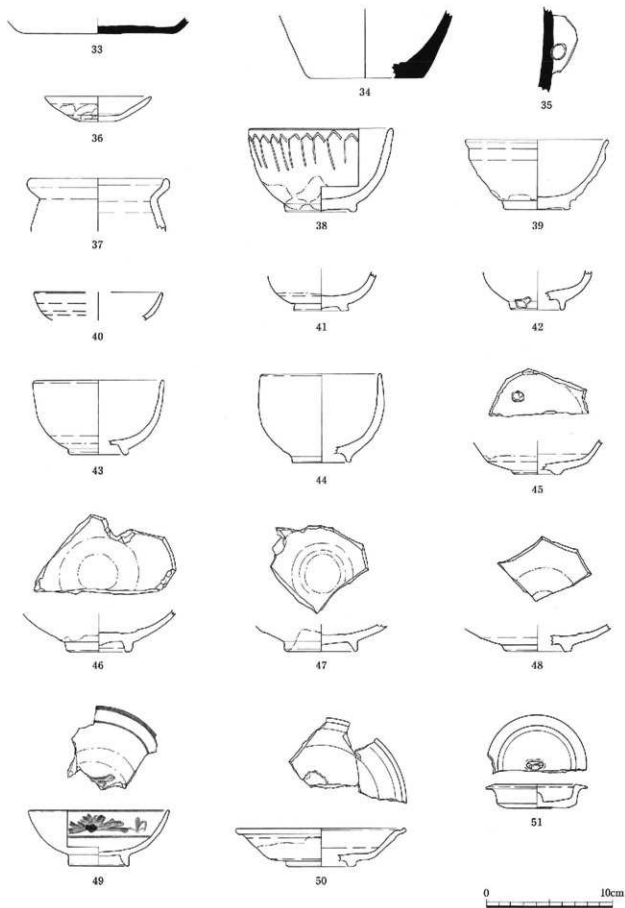
図示はしていないが、I区北半で確認した土坑群一帯で骨を大量に確認した。骨は人骨と考えられ、そのほとんどが焼骨である。しかし、S K 2やS K 16からは人歯が見つかっており、一部は焼かれないものもあったようである。人歯は大きさなどから、成人のものと思われる。また、P 2からは大量の炭化材片が見つかった。



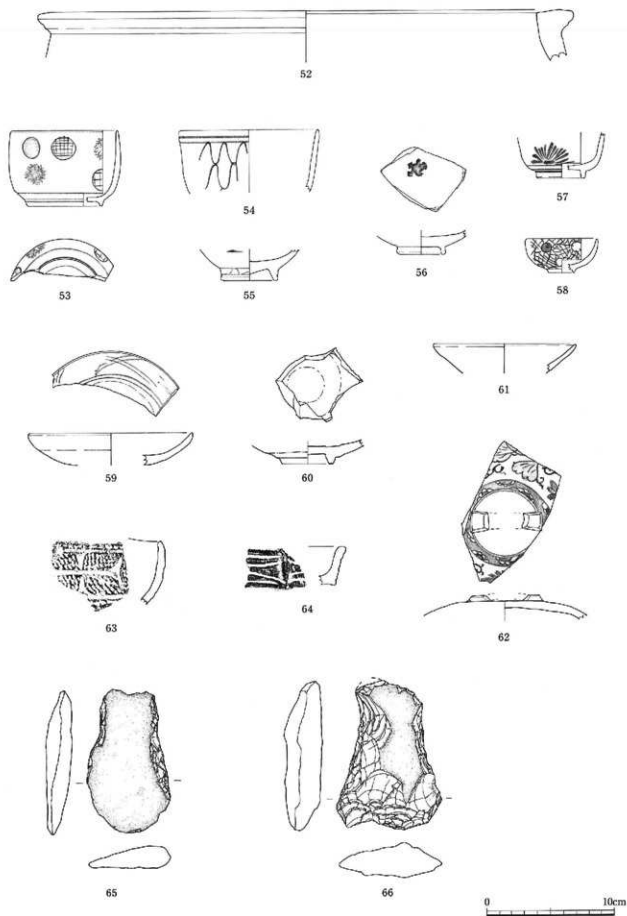
第74图 土器実測图1 (S=1/3)



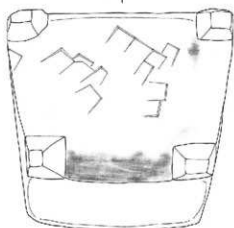
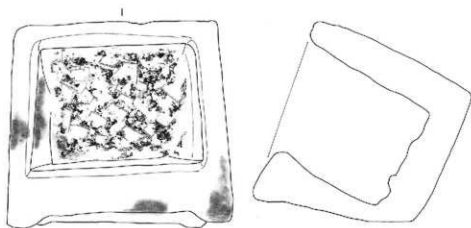
第75图 土器实测图2 (S=1/3)



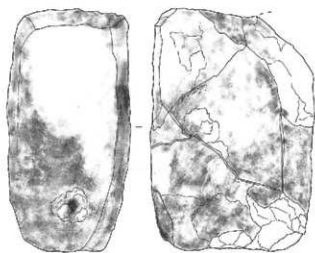
第 76 图 土器、陶磁器实测图 (S=1/3)



第77图 土器、陶磁器、石製品実測図 (S=1/3)



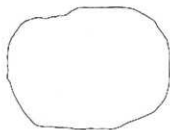
67



68

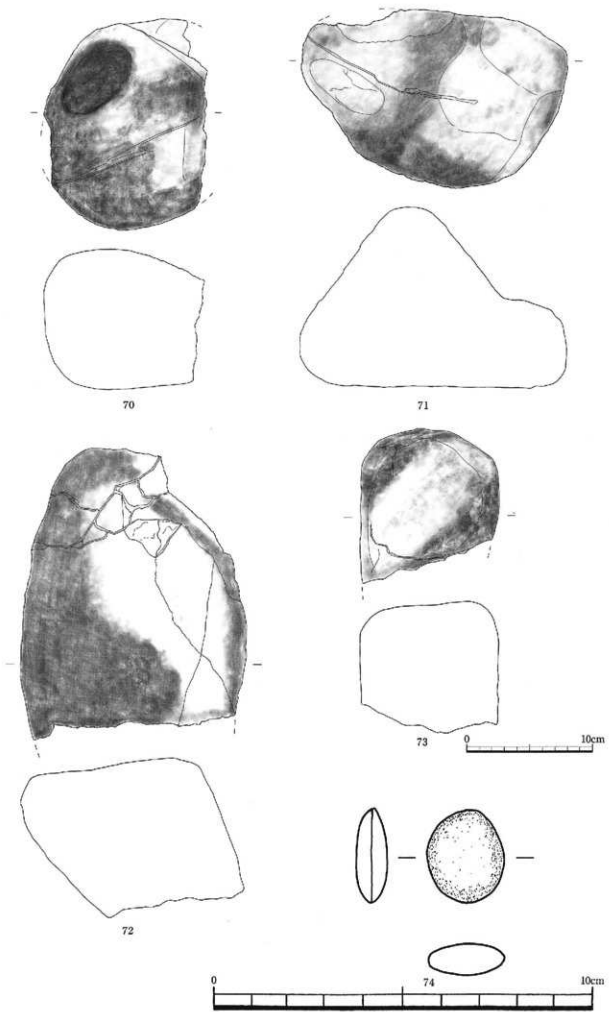


69

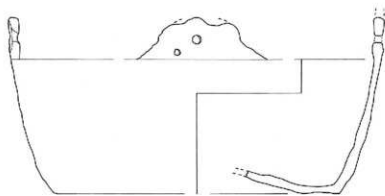


0 10cm

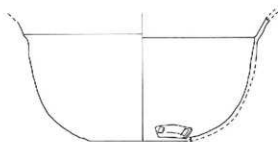
第78图 石製品実測図1 (S=1/3)



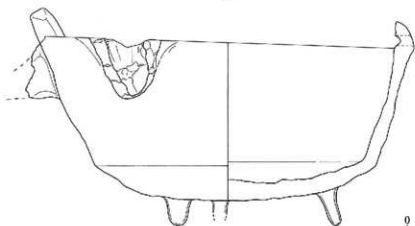
第79図 石製品実測図2 (S=1/3、74のみS=1/1)



75

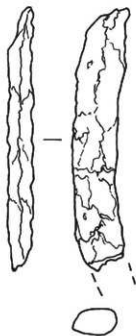


76

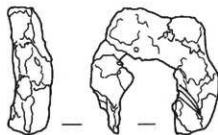


77

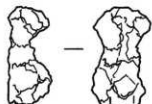
0 10cm



78



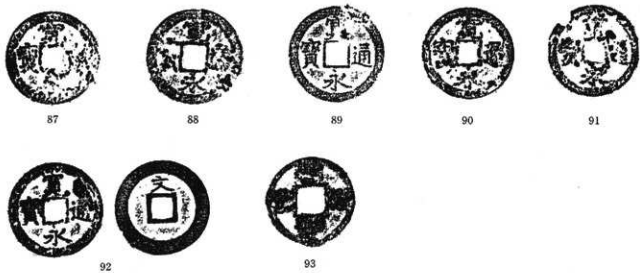
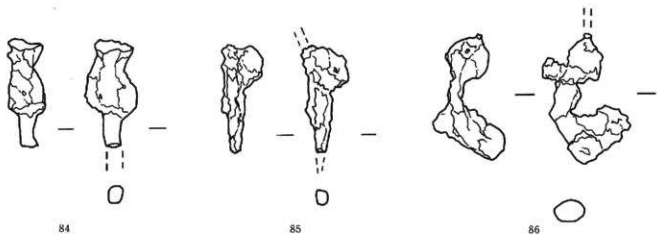
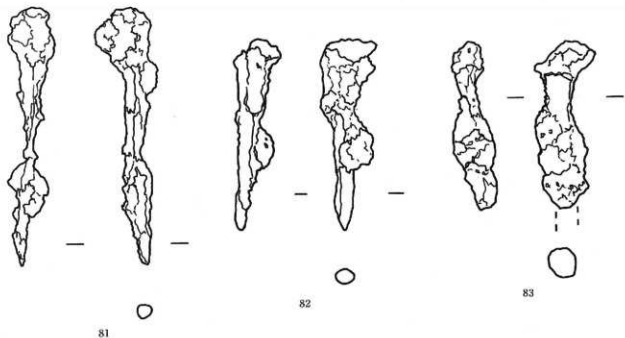
79



80

0 10cm

第80図 鉄製品実測図 (75~77 S=1/3、78~80 S=1/1)



第 81 图 鉄製品、銅銭実測図 (S=1/1)

第5節 小結

本調査区では、古代と中近世の大きく2時期の遺構と遺物を確認した。以下、両時期の様相を述べたい。

古代

調査区の北側Ⅰ区で堅穴建物跡SⅠ1～SⅠ4を検出した。SⅠ1～SⅠ3の3棟は、調査区外へと延びるものばかりであったため、堅穴の構造が明らかにできたのはSⅠ4だけであった。ただし、検出した4棟の堅穴はいずれも同規模と考えたい。時期は8世紀中頃から9世紀前半と推測される。

SⅠ4の南東隅にはカマドが設置されていた。カマドは大きく崩壊しており、袖部の一部が残っているだけで、周囲には土師器片が散在していた。このように、カマドの崩土の中や周囲から土器が散らばった状態で出土するのは、野々市市内南部地域で発見された同時期の堅穴建物内でも複数確認している。ここで見つかったカマドはいずれも袖部ばかりで、上部装置まで確認できた事例は一度もない。このことから、カマドの崩壊は自然状ではなくて、人為的に行われたものと考えたい。民俗例では、家主が家屋を手放すとき台所の火処を壊してから家を出る事項がある。SⅠ4も建物廃棄の際、カマドを意図的に破壊したものと考えられる。

確認した堅穴建物の同エリアには、畝溝群も検出した。溝の長さは10～15m、幅は平均30cm前後、深さは5～10cmである。これらは耕作溝と思われる。堅穴建物とは切り合いから、溝の方が新しいことがわかっており、堅穴建物がいくつも建ち並んだ集落が廃絶した後、畑作などの耕作地に変わったようである。

堅穴建物と畝溝群のさらに南方の第Ⅱ区には、北東-南西に方位をとる古代北陸道跡が存在する。路面の幅は約10.5m、両側にはSD7とSD8の側溝を有しており、本調査区以外で確認した道路跡とは、規模や形態などほとんど変わっていない。路面の一部には硬化面も見られる。しかし、後世の擾乱などにより、全体の遺存状態はよくない。遺構全体図を概観すると、この道路跡より南側は遺構・遺物が皆無で、古代北陸道跡より北方に集落や耕作地などが展開することがわかった。

中近世

Ⅰ区の北端で大小様々な規模の土坑群を確認した。土坑は隅丸方形と楕円形の大きく2タイプあり、隅丸方形は南北に長い長方形が多数を占める。この土坑群の中で、SK2、5、7～13、16、17、21～26からは、骨と大量の炭化物を検出した。人骨のほとんどは焼骨であったが、SK2とSK16からは人歯が見つかっており、焼かれなかった骨も存在すると思われる。

これらの土坑群は墓域にあたると考え、各穴は土坑墓と推測される。骨は焼かれたものがほとんどであることから、火葬墓が主体である。陶器を使用した蔵骨器は発見されていないので、木製などによる容器に入れたものと思われる。遺物はほとんど見つからないが、副葬品と思われる瀬戸天日茶碗と丸碗がSK24とSK26から出土しており、両遺物とも大窯1期に比定されていることから、これらの墓は15世紀末頃と考えられる。

また、SK5、16、25からは鉄鍋の完形品が出土している。3点の鍋は全て伏せた状態で見つかっており、鍋底には頭骨と思われる骨片を確認した。また、SK16からは人歯も見ついている。これらの出土状況などから、上記の土坑は土葬墓で、東日本で見られる鍋被りによる葬法と考えられる。時期は、SK25から寛永通宝が見つかっており、近世前半と思われる。なお、発見された寛永通宝は計6枚で、副葬品として取り扱った六道銭と思われる。当刻時期の墓坑はSK2、5、16、25である。

今回、15世紀末期に火葬された骨を埋めた土坑墓がいくつも確認できた。間を置いて、近世前半になると鍋被りによる特殊な葬法で埋葬された墓坑が設置される。鍋被り葬は国内でも北海道、東北と関東の一部でしか確認されておらず、本調査区が日本最西端にあたるようである。なお、近年は、金沢市直江道跡でも鍋被り葬の跡が見つかっている。

参考文献

- 五十川伸矢 1992 「古代・中世の鉄器」『国立歴史民俗博物館研究報告第46集』
国立歴史民俗博物館
- 垣内光次郎 1999 「石の文化誌」『中世北陸の石文化Ⅰ』北陸中世考古学研究会
- 河合忍 安英樹 1999 「石叢考」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農工具』石川考古学研究会
- 柿田祐司 2006 「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』
北陸中世考古学研究会
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年輪の設定」|シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題|
石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤田邦夫 1997 「中世加賀国の土器器様相」『中近世の北陸-考古学が語る社会史-』桂書房

第8表 土器観察表1

番号	遺構	種類 器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調(内)		残存率	備考	実測 番号
						色調(外)	調整(外)			
1	SI1	須恵器 有台坏	10.4	4.1	7.2	灰	ロクロナデ	底部4/9		43
2	SI1	須恵器 甕	30.2			灰	ロクロナデ	口縁約1/9	黒色粒 波状紋	42
3	SI1	土師器 甕	16.2			灰	ヨコナデ, カキ目	口縁約1/6	赤色粒	39
4	SI1	土師器 甕	11.6			明黄褐色	ヨコナデ, カキ目	口縁2/9		41
5	SI1	土師器 甕			6.0	灰	ナデ	底部5/9		40
6	SI3	土師器 甕	14.4			赤褐色	ヨコナデ, 内黒	口縁1/3	赤色粒 外面一部に煤付着	2
7	SI3	須恵器 坏	12.4	3.5	9.0	灰白	ロクロナデ	口縁1/6	黒色粒	7
8	SI3	須恵器 坏	13.2	3.6	(9.0)	浅黄	ロクロナデ	口縁1/6	口縁部内外面に煤付着	9
9	SI3	須恵器 有台坏	16.2	6.8	12.0	灰	ロクロナデ	口縁1/12、 底部1/9		1
10	SI3	須恵器 坏	13.6			灰白	ロクロナデ	口縁1/18		10
11	SI3	須恵器 坏	(10.2)	(3.4)		灰黄	ロクロナデ	口縁1/12		11
12	SI3 (P4)	土師器 甕			7.8	にぶい黄褐色	ヨコナデ	底部5/12	赤色粒 黒色粒 内面底部に煤付着	6
13	SI3 (P4)	土師器 甕	26.4			浅黄褐色、にぶい黄褐色	ヨコナデ, 口縁部	口縁1/12	赤色粒 黒色粒 内面に煤付着	12
14	SI3 (P4)	土師器 甕	21.4			にぶい黄褐色	ヨコナデ, カキ目	口縁1/9	赤色粒 黒色粒	4
15	SI3	土師器 甕	30.0			にぶい黄褐色	ヨコナデ, カキ目	口縁1/12	赤色粒 黒色粒	8
16	SI3 (P4)	土師器 甕	18.4			にぶい黄褐色	ヨコナデ, カキ目	口縁5/36	金色粒散在 赤色粒	5
17	SI3 (P4)	土師器 甕	21.4			にぶい黄褐色	ヨコナデ, カキ目	口縁1/9	赤色粒 黒色粒	3
18	SI4	須恵器 有台坏	12.0	4.0	8.6	灰	ロクロナデ	2/3	口縁部内面に煤付着	31
19	SI4	須恵器 坏	12.8			灰白	ロクロナデ	口縁1/6		33
20	SI4	須恵器 坏	13.8			灰	ロクロナデ	口縁1/12	自然釉	34
21	SI4	須恵器 短頸甕	11.4			灰黄	ロクロナデ	口縁1/12	黒色粒、自然釉 22と同一個体	36
22	SI4	須恵器 短頸甕			11.5	灰	ロクロナデ	底部7/18	21と同一個体	32
23	SI4	土師器 甕	19.0			にぶい黄褐色	ヨコナデ	口縁約1/9	赤色粒 黒色粒	35
24	SI4	土師器 長脚甕	21.0		18.2	明黄褐色、にぶい黄褐色	ヨコナデ, 口縁部	口縁1/3	赤色粒 黒色粒 部分的に煤付着	38
25	SD3	須恵器 有台坏			13.8	灰白	ロクロナデ	底部1/9		51
26	SD6	須恵器 有台坏			6.8	灰白	ロクロナデ	底部1/2		53
27	SD8	須恵器 坏	13.0			灰黄	ロクロナデ	口縁1/12		55
28	SD8	土師器 甕			6.0	浅黄褐色	ナデ	底部1/6		54
29	SD8	須恵器 甕	19.0			灰	ヨコナデ, タタキ	口縁約1/18		56
30	P1	須恵器 坏				黄灰	ロクロナデ	口縁小片		78
31	P1	須恵器 甕	13.2	2.8		灰	ロクロナデ	口縁7/12		77
32	P1	土師器 甕	24.2			にぶい黄褐色	ヨコナデ, カキ目	口縁1/12	黒色粒	79

第8表 土器観察表2

番号	遺構	種類 器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調(内)		調整(内)	残存率	備考	実測 番号
						色調(外)	調整(外)				
33	包含層	須恵器 鉢			12.0	灰白	ロクロナデ		底部1/6	黒色紋	81
34	包含層	須恵器 壺			9.0	灰白 黄灰	ロクロナデ ロクロナデ		底部1/3	黒色紋	83
35	包含層	須恵器 双耳瓶				灰白			小片	黒色紋 自然釉	82
36	SK6	土師器 甕	8.4	2.0	3.0	にぶい黄橙	ヨコナデ		口縁1/3	赤色紋 京都系	15
37	SK21	土師器 甕	11.2			にぶい黄橙	ヨコナデ		口縁1/9	赤色紋	16
38	SK25	瀬戸焼 丸壺	11.4	6.6	5.6	浅黄			ほぼ完形	露胎部保存者 口縁端部一部欠損	13
39	SK24	瀬戸焼 天目茶碗	11.4	5.5	5.0	暗赤褐 暗赤褐	施釉(鉄釉) 施釉(鉄釉)		口縁7/9 底部完形	口縁端部2ヶ所欠損	14
40	包含層	白磁 皿	(10.2)			灰白	施釉(透明)		小片		80
41	SD2	陶器 碗			4.4	褐	施釉(鉄釉)		底部ほぼ完形		74
42	SD2	陶器 碗			4.4	灰オリーブ 灰オリーブ	施釉(灰釉) 施釉(灰釉)		底部2/9		65
43	SD2	陶器 碗	10.2	5.9	4.8	浅黄、にぶい黄 浅黄、にぶい黄	施釉(灰釉) 施釉(灰釉)		口縁2/9		70
44	SD2	陶器 碗	9.6	7.0	4.6	灰白	施釉(白泥釉) 施釉(白泥釉)		底部1/3		69
45	SD2	陶器 碗			3.8	オリーブ黄	施釉(鉄釉)		底部約1/3	胎目1箇所	67
46	SD2	陶器 碗			5.0	明オリーブ灰	施釉(青白釉) 施釉(青白釉)		底部2/3	黒色紋 蛇の目割割ぎ	72
47	SD2	陶器 碗			5.8	灰白	施釉(白泥釉) 施釉(白泥釉)		底部1/4	黒色紋 蛇の目割割ぎ	71
48	SD2	陶器 碗			5.2	緑灰	施釉(鉄釉)		底部2/9	蛇の目割割ぎ	73
49	SD2	陶器 染付碗	11.2	4.4	5.0	灰白	施釉(透明)		口縁1/6	蛇の目割割ぎ	66
50	SD3	唐津 折縁皿	13.6	3.0	5.6	灰白	施釉(鉄釉)		口縁1/6	黒色紋 胎目1箇所	52
51	SD2	陶器 蓋	8.0	1.9		灰黄褐	施釉(鉄釉)		1/2		68
52	ST3	越前焼 甕	42.0			灰黄褐、浅黄			口縁小片	黒色紋	58
53	SD2	磁器 染付碗	8.4	6.0	5.8	灰白			口縁1/3、 底部5/18		62
54	SD2	磁器 染付碗	11.0			灰白			口縁1/9		75
55	SD2	磁器 染付碗			4.4	灰白			底部1/3		63
56	SD2	磁器 染付碗			3.8	灰白			底部2/9	赤色紋 高台端部輪割ぎ	61
57	SD3	磁器 染付小坏			3.8	灰白			底部1/6	高台端部輪割ぎ	57
58	SD2	磁器 染付器口	5.6	2.7	2.0	灰白			口縁2/9		59
59	SD2	磁器 染付皿	13.0			灰白			口縁5/18		64
60	SD3	磁器 右台皿			4.2	明緑灰 明緑灰、灰白			底部完形	蛇の目割割ぎ	49
61	SD2	白磁 皿	11.2			灰白			口縁1/9		60
62	SD3	磁器 染付蓋				灰白			小片		50
63	SD4	縄文 浅鉢				明黄褐			口縁小片	黒色紋	45
64	SD5	縄文 浅鉢				黒褐			口縁小片	黒色紋	46

第9表 石製品観察表

番号	遺構	器種	最大長	最大幅	最大厚	質量	石材	備考	実測番号
			(cm)	(cm)	(cm)				
65	SD2	打製石斧	11.4	6.7	2.1	155	火山礫凝灰岩		47
66	包含層	打製石斧	(11.8)	(8.3)	(3.0)	(280)	花崗斑岩		76
67	SK26	行火	16.6	17.8	13.5	1,700	軽石凝灰岩	定形 煤付着	17
68	SI4	カマド石	(19.9)	(13.1)	(9.8)	(2,600)	砂岩	煤付着	37
69	SK14	自然石	20.1	15.4	14.0	5,100	安山岩	煤付着	21
70	SK14	自然石	(16.9)	(12.8)	(11.8)	(3,300)	安山岩	煤付着	18
71	SK14	自然石	(14.3)	(14.4)	(14.4)	(4,800)	珸岩	煤付着	19
72	SK14	自然石	(23.2)	(17.8)	(12.8)	(7,350)	流紋岩	煤付着	20
73	P3	自然石	(12.4)	(11.0)	(10.5)	(2,080)	花崗斑岩	煤付着	84
74	SX1	番石	2.5	2.0	0.8	7	頁岩	完形	86

第10表 鉄製品・銅銭観察表

番号	遺構	器種	最大長	最大幅	最大厚	質量	備考	実測番号
			(cm)	(cm)	(cm)			
75	SK3	鍋	口径 (29.8)	器高 (14.0)	(0.9)	(1,670)	内面に骨付着 三足	88
76	SK16	鍋	口径 -	器高 (9.8)	(0.3)	(1,470)	内面に骨付着	87
77	SK25	鍋	口径 26.5	器高 16.6	1.7	2,250	内面に骨付着 三足	89
78	SK1	刀子	(7.0)	(1.5)	(0.7)	(11.3)		28
79	SK1	釘	(3.4)	(3.4)	(1.2)	(8.9)		29-1
80	SK1	釘	(2.7)	(1.5)	(1.2)	(3.3)		29-2
81	SK25	釘	6.9	1.7	1.3	6.1		30-1
82	SK25	釘	(5.1)	(1.5)	(1.3)	(4.5)		26
83	SK25	釘	(4.5)	(1.6)	(1.2)	(4.9)		27
84	SK25	釘	(2.9)	(1.4)	(1.0)	(2.5)		30-2
85	SK25	釘	(2.9)	(1.3)	(1.1)	(1.9)		30-3
86	SK25	釘	(3.4)	(2.3)	(1.9)	(5.3)		30-4
87	SK25	鉄貨	直径: 2.5cm			3.4	寛永通寶(六道銭)	22-1
88	SK25	鉄貨	直径: 2.5cm			1.6	寛永通寶(六道銭)	23-2
89	SK25	鉄貨	直径: 2.5cm			2.9	寛永通寶(六道銭)	24-3
90	SK25	鉄貨	直径: 2.4cm			3.7	寛永通寶(六道銭)	25-4-2
91	SK25	鉄貨	直径: 2.4cm			3.7	寛永通寶(六道銭)	25-4-3
92	SK25	鉄貨	直径: 2.5cm			3.3	寛永通寶(六道銭、裏面に「文」)	25-4-1
93	SD2	鉄貨	直径: 2.3cm			3.4	不明 全体磨耗	48



北側調査区 (南西から)



北側調査区中央小穴群 (南から)



南側調査区 (南東から)



南側調査区 (南から)



A-3トレンチ (北西から)



A-6トレンチ (北西から)



B-4トレンチ (北西から)



B-7トレンチ (北西から)



C-2 トレンチ (北西から)



C-4 トレンチ (北西から)



C-5 トレンチ (北西から)



C-6 トレンチ (北西から)



D-1 トレンチ (北西から)



D-2 トレンチ (北西から)



D-4 トレンチ (北西から)



E-4 トレンチ (北西から)



調査区全景 (上空から)



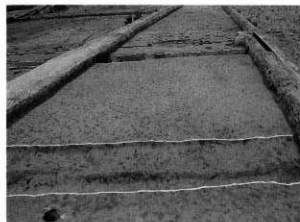
調査区全景 (上空東から)



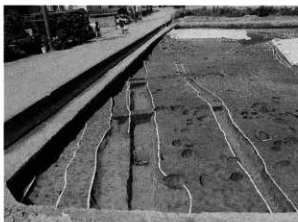
古代北陸道全景 (東から)



古代北陸道全景 (東から)



古代北陸道 (南から)



古代北陸道側溝 (中央東から)



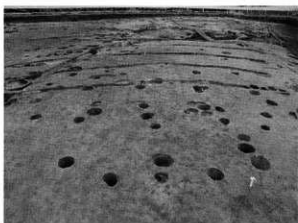
古代北陸道 (中央西から)



古代北陸道側溝断面 (西から)



SB 1 (南から)



SB 2 (北から)



SB3・4 (東から)



SB4 (東から)



SB6・7 (南から)



SB6～9 (西から)



SB6～10 (南から)



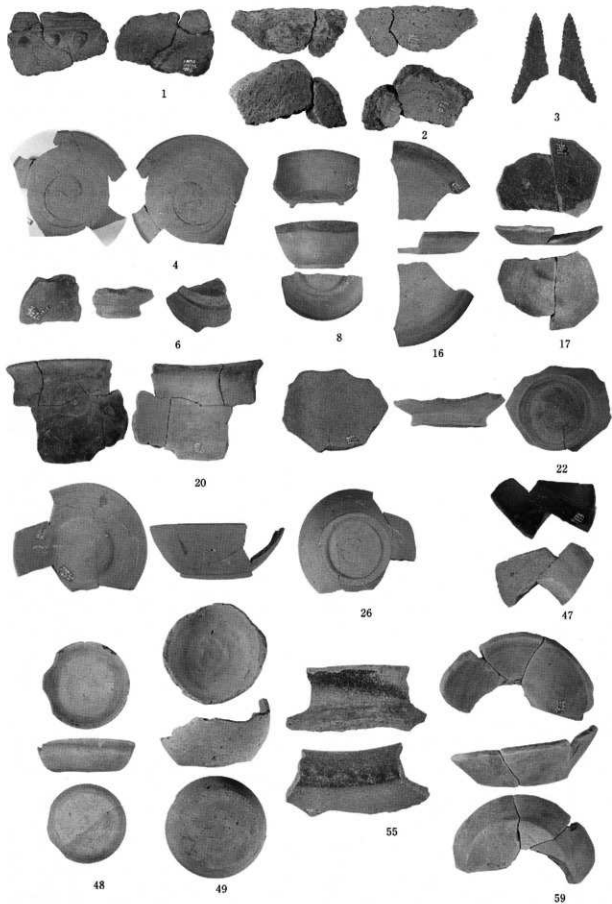
SB8・9 (南から)



調査区西側土取穴 (北から)



鞍部全景 (南から)





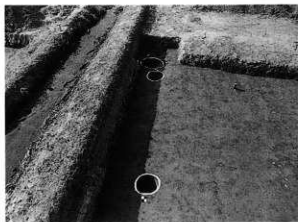
I区全景 手前SD2 (東から)



V区全景 (西から)



II区全景 (西から)



V区SB1 (南から)



III区全景 (東から)



I区SD1, SX1 (北西から)



IV区全景 (西から)



IV区自然河道 (北から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



23



21



22



24



トレンチ1 (北西から)



トレンチ5 (南東から)



トレンチ2 (北から)



トレンチ6 (北東から)



トレンチ3 (北東から)



トレンチ7 (南東から)



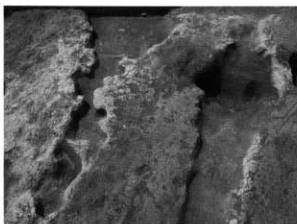
トレンチ4 (北東から)



トレンチ8 (南東から)



トレンチ9 (北西から)



道路跡硬化面 (トレンチ10)



トレンチ10 (北西から)



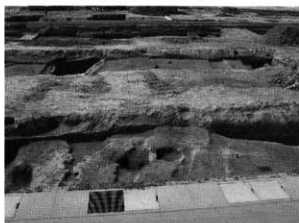
SD 3 (南から)



古代北陸道跡 (南西から)



畝溝 (南西から)



古代北陸道跡 (北東から)



SK 1 (南西から)



1



2



3



4



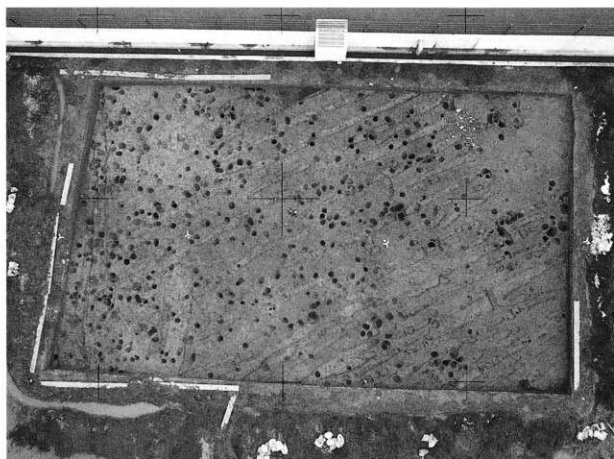
5



6



7



第22次調査区2区全景 (上空から)



第33次調査区全景 (上空北側から)



第33次調査区東側 (北西から)



第33次調査区西側 (南西から)



第33次調査区中央 (東から)



第33次調査区中央小穴(垣)群 (北から)



第33次SI 1 (北から)



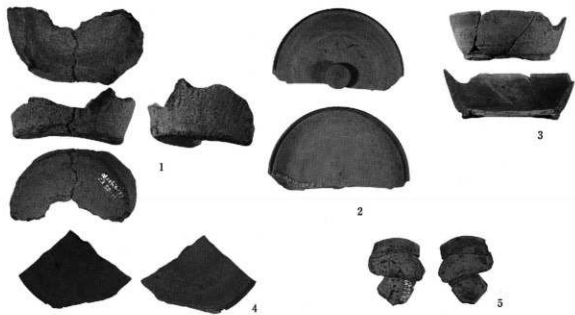
第33次SI 2 (南から)



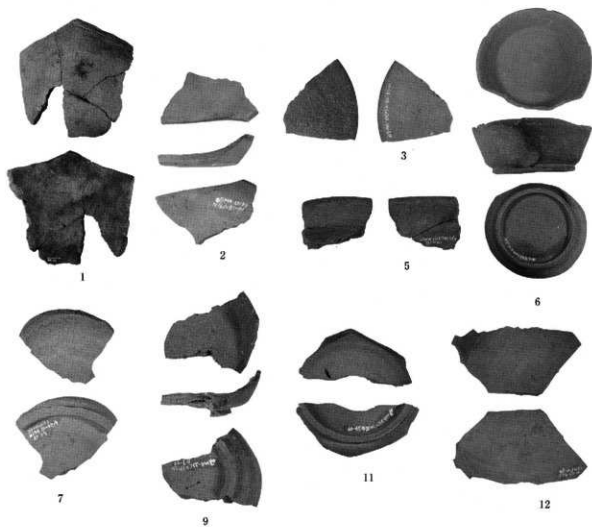
第33次SI 3 (南西から)



第33次SI 4 (南東から)



第22次



第33次



14



15



16



17



23



25



29



34



35



38

第33次



S I 1 (南から)



S I 4 カマド (北から)



S I 2 (西から)



須恵器 18 出土状況 (S I 4)



S I 3 (南から)



S D 7 II区古代北陸道跡路面 (西から)



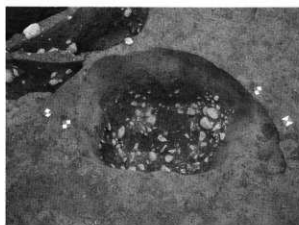
S I 4 (東から)



S D 8 III区古代北陸道跡路面 (西から)



SK 1 (北東から)



SK 5 (東から)



SK 2 (南東から)



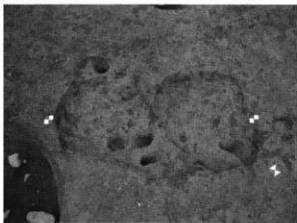
SK 5 鉄鍋 75 出土状況 (東から)



人歯出土状況 (SK 2)



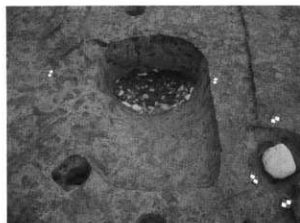
SK 6・7 (北東から)



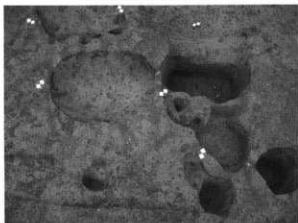
SK 3・4 (西から)



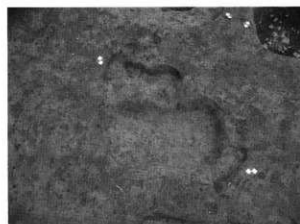
SK 8・9 (東から)



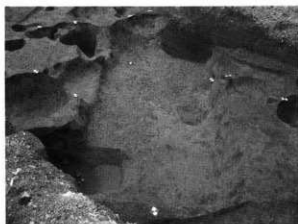
SK 10 · 11 (北から)



SK 17 · 19 · 20 (西から)



SK 12 · 13 (東から)



SK 21 (南から)



SK 14 (北西から)



SK 22 土層断面



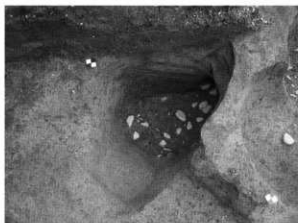
SK 16 (西から)



SK 23 · 24 · 25 (南から)



SK 24、25 (北から)



SK 26 (北から)



天目茶碗 39 出土状況 (SK 24)



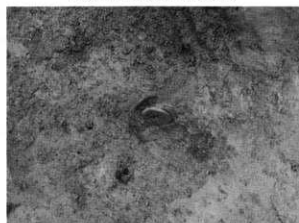
瀬戸丸碗 38、行火 67 出土状況 (SK 26)



鉄鍋 77 出土状況 (SK 25)



SK 19～26 (西から)



銅銭 87～92 出土状況 (SK 25)



SK 2 (南から)





41



42



43



44



46



47



48



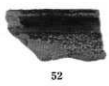
49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



68



69



67



70



71



72



75



73



74



76



78



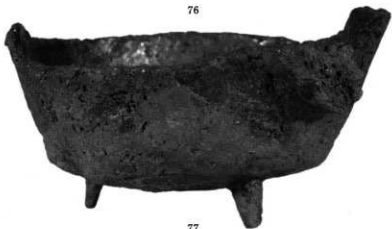
79



80



81



77



82



83



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



炭化物(P2)



人骨(SK21)



人骨(SK2)



人骨(SK16)

報告書抄録

ふりがな	みっかいちAいせき							
書名	三日市A遺跡5							
副書名								
シリーズ名	北西部十地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6							
編集者名	田村昌宏 横山貴広							
編集機関	野々市市教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 TEL 076-227-6122							
発行年月日	西暦 2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
三日市A遺跡 4次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 4"	136° 35' 47"	20020208 ～ 20020326	830	記録保存 調査
三日市A遺跡 9次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 6"	136° 35' 52"	20030418 ～ 20030707	2,770	記録保存 調査
三日市A遺跡 16次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 4"	136° 35' 36"	20040412 ～ 20040716	1,387	記録保存 調査
三日市A遺跡 21次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 3"	136° 35' 43"	20051018 ～ 20060329	570	記録保存 調査
三日市A遺跡 22次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 12"	136° 35' 52"	20060120 ～ 200602223	822	記録保存 調査
三日市A遺跡 30次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 3"	136° 35' 44"	20070507 ～ 20070629	1,795	記録保存 調査
三日市A遺跡 33次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 10"	136° 35' 52"	20071023 ～ 20071127	1,642	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三日市A遺跡 4次調査	集落	古代	道路状遺構(古代北陸道)、 土坑、溝		須恵器、土師器、石製品			
三日市A遺跡 9次調査	集落	縄文、古代	道路状遺構(古代北陸道)、 掘立柱建物、土坑、溝		縄文土器、須恵器、土師器、 石製品			
三日市A遺跡 16次調査	集落	縄文、中世	溝、土坑		縄文土器、土師器皿、青磁、 打製石斧、磨石			
三日市A遺跡 21次調査	集落	縄文、古代 中世	道路状遺構(古代北陸道)、 竪溝、土坑		縄文土器、須恵器、土師器、 青磁			
三日市A遺跡 22次調査	集落	古代、中世	土坑、溝		須恵器、土師器、中世土器			
三日市A遺跡 30次調査	集落 墓	古代、中世 近世	道路状遺構(古代北陸道)、 竪穴建物、墓坑、溝		須恵器、土師器、瀬戸焼、青磁 行火、鉄鍋、人骨		近世銅板り葬	
三日市A遺跡 33次調査	集落	縄文、古代 中世	竪穴建物、土坑、溝		縄文土器、須恵器、土師器、 中世土器、石製品			
要約	縄文時代では、土器と石製品が出した。古代は、集落跡を確認しており、竪穴建物跡8棟、掘立柱建物跡11棟を検出した。また、各調査区の一部で、古代北陸道跡を確認した。中世は、集落跡の縁辺部と墓跡を確認した。墓は火葬による土坑墓が主体となる。中世の墓域の中には近世前半の墓も認められた。近世墓の中には銅を頭上に被せた。銅板り葬を確認した。							

2012年3月30日 発行

野々市市北西部土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書6

三日市 A 遺跡 5

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目1番地

発行者 野々市市教育委員会

印刷者 石川県金沢市金市町ホ34番地

前田印刷株式会社

三日市 A 遺跡 遺構全体図 (第 4、9、16、21、22、30、33次)

